

啓蒙期西欧における 科学アカデミーと女性

科学研究費補助金
基盤研究(C) 課題番号：19510237
平成19年度—22年度

川島慶子（名古屋工業大学）

目次

序：ヨーロッパにおける科学アカデミー.....	3
1. 科学アカデミーへの羨望と嫉妬：エミリー・デュ・シャトレの『火の論文』 再出版に見るジェンダー問題.....	6
1-1. 1744年版『火の論文』とエミリー・デュ・シャトレ.....	6
1-2. 科学アカデミーの懸賞と『物理学教程』.....	7
1-3. パリの王立科学アカデミーと才女たちの関係.....	9
1-4. 「火の論文」（1738）、シャトレ＝メラン論争（1741）そして科学アカ デミー.....	11
1-5. 再出版の意味とジェンダー問題.....	15
2. 科学アカデミー会員の周縁で—啓蒙期における女性の科学翻訳.....	17
2-1. 科学翻訳の必要性.....	17
2-2. 文芸共和国の交渉者.....	18
2-3. マリー・アンヌ・ラヴワジエ：女神の葛藤.....	20
2-3-1. 夫にふさわしい妻.....	20
2-3-2. カーワンの伝説とその反響.....	22
2-3-3. 翻訳作業のジェンダー的意味.....	26
2-4. エリザベート・モンベイヤール：地方アカデミーの陰で.....	29
2-5. クロディーヌ・ピカルデ：地方アカデミーからパリへ.....	32
2-6. マリー・ダルコンヴィル—美の喪失はジェンダー問題か？.....	36
2-7. 結び：女性による科学翻訳.....	42
3. 科学アカデミー院長：エカテリーナ・ダーシコワと女帝エカテリーナ.....	43
3-1. ペテルスブルク・アカデミーとロシア帝国.....	43
3-2. 科学アカデミー院長、エカテリーナ・ダーシコワ.....	44
3-3. ダーシコワの特殊性とジェンダー問題.....	48
4. 科学アカデミー会員：ラウラ・バッシとイタリアの才女たち.....	51
4-1. ボローニャ・アカデミーとラウラ・バッシ.....	52
4-2. 女性「非アカデミー会員」の自由と、女性「アカデミー会員」の束縛.....	56
結び：科学アカデミーと女性.....	61
資料.....	64
資料1：18世紀欧米の科学アカデミーの状況.....	65
資料2：メスレー懸賞に関する、エミリー・デュ・シャトレからモーペルデュ イへの手紙.....	79
資料3：マリー・ダルコンヴィルの主要業績.....	80
資料4：マリー・ラヴワジエによる『化学論集』の序文.....	81
資料5：アントワーン・ラヴワジエと地方および外国の科学アカデミーの関係	82
資料6：マリー・キュリーが会員になった科学アカデミー.....	84

序：ヨーロッパにおける科学アカデミー

「アカデミー」という言葉の起源はもちろん古代ギリシャ語の「アカデメイア」である。しかしこれは当時の「哲学」、つまり学問全体を愛好する知識人の集まりや学校のようなものをさす言葉であり、本研究で問題とするアカデミーとは趣が異なる。ここでとりあげる科学アカデミーとは、科学革命で生じた（あるいは生じつつあった）近代科学の擁護と発展のために集まった知識人の集団から発した私的組織を期限に持ち、のちに王国、都市などの公的な機関によって認承、あるいは経済援助を受けて活動したものを指す。つまり、最初は17世紀前半に、俗に言うリンチェイ・アカデミー、モンモール・アカデミー、メルセンヌ・アカデミーなど、裕福な一個人の尽力で出現したいくつかの集まりに、この世紀後半の国家が注目するようになったのである。

アカデミーを認めた国の国王や皇帝自身が、必ずしも近代科学の可能性を認識していたわけではないが、こうしたケースでは、そこに必ず科学に深い関心を抱いていた宰相が存在していた。典型的なのは王立パリ科学アカデミーの設立に力を尽くした、ルイ14世（Louis XIV, le Grand, 1643-1715）の宰相コルベール（Jean-Baptiste Colbert, 1619-1683）である。ブルジョア出身のこの政治家は、文学や芸術の方が国家に役立つと思っていた国王を説得して、こうした分野に加え、1666年に科学に特化したアカデミーの設立をも許可させたのである¹。こうして、実質上はアカデミー改革の1699年以降のことではあるが、この後の欧米の科学アカデミーのモデルとなる、パリの科学アカデミーが誕生したのである。

もうひとつのモデルが1662年にロンドンに設立された王立協会である。これはパリと違ってアマチュアの集団であり、「王立」の意味するところは「国王の承認」以外の何物でもない。もちろんニュートン（Sir Isaac Newton, 1643-1727）などの傑出した学者も所属していたが、会の運営は多くのアマチュア会員の払う学会費で運営されていた。パリの組織に比べると、国家からの束縛が少ないという利点があるが、学会誌などの論文はまさに玉石混交であり、全体としてのレベルは低い。

こうして17世紀後半に設立されたふたつの対照的な科学アカデミーは、特に18世紀の半ばから雨後のタケノコのように出現する欧米のアカデミーのモデルとなった。そして、こうしたアカデミーが増えれば増えるほどに、先のふたつ

¹パリの科学アカデミーの歴史その他に関しては、川島慶子「フランス王立科学アカデミーの懸賞論文と18世紀 科学の関係」科学研究費補助金による基盤研究(C)(2)(1998年度—2000年度)報告書； 隠岐さや香「18世紀パリ王立科学アカデミーと『有用な科学』の追及—理想の科学者像と道具的専門性の狭間で」東京大学大学院博士学位請求論文（学術）2008 など参照。

は伝統のある組織として、ますます世間の尊敬をうけるようになっていったのである²。ちなみにこの二つの組織は、現在でもパリとロンドンに存在しており、共に権威のある組織として世界中から認められている。

ここまではパリモデル、ロンドンモデルの差異に着目してきたが、じつはジェンダーという観点から見てみると、このふたつには強力な共通点がある。それは何かというと、女性の入会を認めなかったことである。性に関する規定はどちらの組織にも存在しない。会則はむしろ、自国民であるかどうかの方に（パリでは特に、正会員には年金が支給されるので、外国人はどれほど優秀でも、「外国人会員」という年金なしの特別枠になる）注意を払っている。ちなみに、当時の先進国フランスは、自国の学者を正会員にするだけで、国家の威信を保てるメンバーが集められたが、プロイセンやロシアなどの発展途上国はそうはいかない。ベルリン・アカデミーやロシアのペテルスブルク・アカデミーなどでは、むしろ外国人学者の方が、自国民より優遇される事態が生じていた。「外国の知識人」をどう取り扱うかは、王侯を悩ませる国家的問題だったのである。ところが女性知識人の問題はそうではなかった。

規定がないことの意味は何なのか。つまり「女性の排除」は、当時のほとんどの国にとって、書く必要すらない、当然の決まりだったのである。ここから科学アカデミーと女性の関係について、男性のそれとは単純に比較できない非常に微妙な問題が生じてくる。重要なポイントは、女性たちは仮にどれほど科学的な才能があっても、けっして科学アカデミー会員になれないということである。なぜこれが重要かといえば、彼女たちは現実の世界では絶対に男性会員とライバル関係にならないからである。

公開会議の出席者として、アカデミー発行の雑誌や会員たちの出版物の読者として、また会員や会員候補の学者たちのパトロンとして、男性会員や会員候補の男性知識人から見て、これほど「安心」できる存在もあるまい。実際には科学アカデミーの会員になるには、パリの組織などでは厳しい審査があるから、男性でも高い科学的能力のない者—つまりほとんどの男性—は会員にはなれない。しかしこの、「形式的には可能性がある」という「事実」をもって、女性と非会員の男性とは、別のカテゴリーとして考えなければならない。

「いつの日にか会員に」という「希望」がくれた時、はじめから可能性のない女性と違って、「希望を見せられていた」男性は激しい反動的行動に出る恐れがあるからだ。フランス革命で科学アカデミーを激しく批判し、ついには崩壊に導いた、革命家マラー（Jean-Paul Mara, 1743-1793）のアカデミーに対する憎しみなどは、こうした「拒絶された男性」心理の極端化した姿である。も

²18世紀を中心とした、この時代のヨーロッパのアカデミーの分布および特徴に関しては巻末資料1を参照。

ちろんマラーのように、現実の行動を起こすような者は稀であろうが、空想の上でなら、マラーの思いは、科学を目指しながらそれを拒まれた当時の男性としては、決してめずらしいものとはいえないであろう。

女性会員を認めるという、例外的な科学アカデミーもあるにはあった。だがそれはわずかな例外にすぎなかった。また芸術や文学などに特化したアカデミーは、科学アカデミーに比べて女性会員を認めることに寛容であったのは事実である。しかしこうした組織が、同じ町や国に存在する科学アカデミーに影響を与えることはなかった。多くの科学アカデミーには、女性知識人たちの役割に関して、決して語られることのない、しかしはっきりとした限界が定められている。それは「観客」や「消費者」として科学アカデミーに関わることは賞賛しても、「参加者」としての女性は認めない、という限界である。そこから出ることはやはりジェンダーの逸脱だった。

科学に造詣の深い才女たちは異議申し立てをしなかったのであろうか。じつはそうした女性たちも存在した。たとえばモリエール (Molière (dit), Jean-Baptiste Poquelin, 1622-1673) の戯曲『女学者』には、ヒロインたちが夫や父親、兄弟の横暴さと無知にうんざりして自分たちのアカデミーを結成しようとする場面が登場する。つまりモリエール自身は揶揄しているものの、ここから当時のサロンの女性たちの隠れた望みの内に「女性のアカデミー」あるいは「女性も参加できるアカデミー」の結成ということが含まれていたことは明らかである。しかしけっきょく、このようなものは成立しなかった。

たとえば、イギリスではマーガレット・キャベンディッシュ (Margaret Cavendish, 1661-1717) が、王立協会の部会に出席しようとしただけで大騒ぎになったのだ。彼女はそのときすでに、何冊もの科学の本を出版しており、さらにニューカッスル公爵夫人という大貴族の知識人として、ケンブリッジ大学のパトロンという権威ある立場にあったにもかかわらず、である³。かくして科学の本や論文、あるいは新しい機械の制作や探険への参加という、科学におけるさまざまな商品の作り手という役割はエリート男性の手に独占されることになる。そして現実には、多くの女性知識人は先に書いたような、「観客」や「消費者」の役割を喜んで受け入れたのであった。

女性たちのこの態度の裏には、当時の「女らしさ」の規範からくる心理的な理由と共に、制度上の理由が存在する。というのも、当時たはたとえ上流階級であっても、女性には男性と同等の教育を与えられていないことから、実際問題として男性会員と競えるほどの科学的知識や技術を持つ女性などほとんどいなかったことが、この態度に大きく影響している。ただ、ゼロではない。教育制

³アカデミーとキャベンディッシュの関係に関しては、ロンダ・シービンガー『科学史から消された女性たち』（小川眞里子他訳、工作舎、1992）、pp.34-52, 67-83 参照。

度が整っていないということは逆に、親や保護者が、もし公的な女子教育が存在していたら、どうして与えられることがなかったような、高度の教育を女子に施す自由があったということだ。つまり、女子へのそうした破格の英才教育「実験」に介入する、正規の教育制度もまた存在しない。この「自由」を享受し、その興味関心が科学に向けた女性たちとアカデミーとの関係はどのようなものだったのか。フランス、ロシア、イタリアを例として、こうした例外女性たちの行動を見てゆこう。

1. 科学アカデミーへの羨望と嫉妬：エミリー・デュ・シャトレの『火の論文』再出版に見るジェンダー問題

1-1. 1744年版『火の論文』とエミリー・デュ・シャトレ

デュ・シャトレ侯爵夫人（Gabrielle-Émilie Le Tennerier de Breteuil, marquise du Châtelet, 1706-1749）は、科学史上ではニュートンの『プリンキピア』唯一の仏訳者として知られており、文学史上ではヴォルテール（Voltaire (dit), François Marie Arouet, 1694-1778）の哲学的恋人として異彩を放つ、18世紀フランスを代表する才女である。それだけではない、2006年に設立されたフランス初の女性研究センターが彼女の名を冠して「エミリー・デュ・シャトレ研究所」と命名されたことからわかるように、この女性はフランスのフェミニズムにとって今や一種のアイコンともいえる存在である。デュ・シャトレはその生誕200年である2006年前後から、フランス本国を中心に特に注目を浴びるようになり、専門研究だけでなくテレビ番組などで取り上げられるようになった。

したがってデュ・シャトレの作品については、『プリンキピア』のような科学作品だけでなく、『幸福論』や『聖書の検討』といった哲学的作品、あるいはパリやペテルスブルグに残る草稿についても様々な方向から研究が積み重ねられている。しかるにここにひとつ、印刷されたものであるにもかかわらず、研究者たちにほとんど言及されていない作品がある。1744年出版の『火の本性と伝播についての論考』（以下『火の論文』と略す）がそれである⁴。

この本はいかなる作品なのか。なぜこれだけデュ・シャトレについての研究が蓄積された今日においても、この本は注目されなかったのか。この作品は彼女の研究経歴のなかでいったいどのような意味を持つものなのだろう。1744年に出版された『火の論文』は、じつは過去に出版された三論文の再出版とっていい作品である。「火の論文」という本のタイトルは第一論文のそれをとっ

⁴Emilie du Châtelet, *Dissertation sur la nature et la propagation du feu*, Paris, Prault, 1744.

たもので、のこりは往復書簡の形をとった活力論争である、シャトレ＝メラン論争の二論文「科学アカデミー常任書記メラン氏の手紙」（以下「手紙」と略す）と「デュ・シャトレ侯爵夫人の返事」（以下「返事」と略す）である⁵。

こう書くと「単なるつぎはぎの再出版では、この作品が研究者に着目されなかったのは当然」という印象を受ける。しかしここに印刷されているデュ・シャトレの二論文については、じつは本人による大幅な加筆修正が行われており、初出のものと同じではない。デュ・シャトレ自身による自分の論文の改定作業はほとんどの研究者に見過ごされてきた。しかし、当時の科学アカデミーと女性の関係に着目すると、この本に収められた一見無関係に見える二つの科学論文に共通する、ジェンダーと科学者共同体の問題が明らかになってくるのである。

1-2. 科学アカデミーの懸賞と『物理学教程』

そもそもこの三作品は当初どういう経緯で出版されたのか。科学アカデミーはこの三作品とどう関係していたのだろうか。

最初に出版されたのは「火の論文」で、これは1738年度のパリ科学アカデミー主宰のメスレー懸賞に提出されたものであり、賞は逸したが次点作品として1739年にアカデミーの雑誌に掲載された。メスレー懸賞は科学アカデミーの懸賞の中でももっとも大規模な懸賞であり、賞金額も大きい⁶。1738年度の題は「火の本性と伝播について」であり、恋人のヴォルテールがフランスにおけるニュートン啓蒙の一環としてこれに応募しようとしたことをきっかけに、デュ・シャトレも自ら論文を書いて応募したのである。二人の作品は惜しくも落選したが、アカデミーはこれらを次点のものとして、受賞三作品とともにその雑誌に掲載することを決定したのである。

残りの二作品である、シャトレ＝メラン論争の往復書簡が最初に印刷されたのは1741年。論争のきっかけはデュ・シャトレが1740年に出版した『物理学教程』である。彼女はこの本の最終章で運動する物体の量として活力派の立場をとり、それに反対する科学アカデミー常任書記メラン（Jean-Jacques Dortous de Mairan, 1678-1771）の論文を徹底的に攻撃した。これに激怒したメランの反論が「手紙」であり、それへの再反論が「返事」なのである。ただし、初版では『物理学教程』そのものが匿名出版であったために、メランの手紙には作者名があるが、デュ・シャトレの返事の方は作者名が「***夫人」としか記載されて

⁵仏語のタイトルは“Lettre de M. de Mairan, secrétaire perpétuel de l'Académie des Sciences,” “Réponse de Madame la marquise du Chastelet”。

⁶メスレー懸賞については、川島慶子「フランス王立科学アカデミーの懸賞論文と18世紀科学の関係」*op.cit.* 参照。

いない。彼女は、1742年に『物理学教程』を再版したとき、最後にこの往復書簡を追加している。つまり往復書簡に関しては、1744年は三度目の出版ということになる。

こうしてみると、1744年版の『火の論文』にある二論文はデュ・シャトレの科学作品の二度目と三度目の出版となり、とくに「返事」についてはすべて本人のイニシアティブによる三度目の出版である。この時期彼女は公私ともに非常に多忙をきわめていた。にもかかわらずかなりの量の加筆、修正を行ってまでこれを出版したというからには、彼女はこれらの作品に対する並々ならぬ熱意があったはずである。

そして「熱意」というならば、もう一つ興味深い事実がある。じつはこの時期にデュ・シャトレは別の科学作品の準備にとりかかっていた。これこそが絶筆となった『プリンキピア』翻訳・注釈であり、じつに命がけの作業となったものである。彼女は身重の体を押してまでも仕事を続行し、ついには産褥死に至る。つまり、1744年時点で、彼女には科学に関して二つの熱意が存在していたことになる。

ところが、『プリンキピア』と『火の論文』を科学思想という観点から考えると、一見奇妙に見えることがある。それは何か。それはこれらの二作品の目指すところが異なるように見えることである。1744年版『火の論文』に収められた二論文は、「火」と「運動する物体の力」という一見異なったテーマを扱っているのだが、じつは「活力」という一つの学説でつながっている。つまりこの点ではこの二論文は、ニュートン説と対立する、ライプニッツ (Gottfried Wilhelm Leibniz, 1646-1716) の説を支持しているのだ。

ここまででわかったことは、デュ・シャトレは1744年時点でこれだけ活力にこだわっているにもかかわらず、同時にニュートンの翻訳計画をも進めていたということである。活力だけではない。彼女はモナド説にも依然として深い興味を持っていた。したがって彼女にとって、ニュートンの『プリンキピア』翻訳という行動と、ライプニッツの活力、モナド支持は自分の中でなんら矛盾する事柄ではなく、こうした折衷的な科学思想上の傾向は『物理学教程』執筆時から変化していない。

なぜここでこれを強調するかというと、デュ・シャトレの行動から見た明白なこの事実が、長い間研究者たちにも理解されてこなかったからである。研究者の間でさえヴォルテールが残した、これと反対の言説が一人歩きし、デュ・シャトレによる『プリンキピア』翻訳計画は、彼女のライプニッツ放棄を意味するものと解釈されてきたのである⁷。

⁷これについては、川島慶子『エミリー・デュ・シャトレとマリー・ラヴワジエ』（東京大学出版会, 2005）、第4章参照。

これには理由が二つある。ひとつはデュ・シャトレ研究は長い間ヴォルテール研究者が片手間にしてきたということ。もうひとつは女性の資料より男性の資料を重視するというジェンダーバイアスの存在。これらの要因から、デュ・シャトレ自身の残した資料よりもヴォルテールの言説が重んじられ、先のような事実と反する解釈がまかり通っていたのである。

ここで強調したいのは1744年時点でのデュ・シャトレの科学思想の部分ではなく、この本と科学アカデミーとの関係である。というのも、『火の論文』は、「懸賞」および「常任書記との論争」という点から、科学アカデミーとの深い関係が認められるからである。アカデミーとまつわる作品をまとめた本を彼女に編集させた「熱意」を理解するために、デュ・シャトレが深く関係したパリの科学アカデミーについて、もう少し詳しく見てゆこう。

1-3. パリの王立科学アカデミーと才女たちの関係

最初のところでも触れたが、パリの王立科学アカデミーは、科学史上では常にロンドンの王立協会と並び称される、「科学者」共同体である⁸。ルイ14世の財務総監であったコルベールは、科学革命が国家にもたらすであろう成果をいち早く察し、国家の威信と実利というその両面から「役立つ」ものとしての近代科学を支援する組織として、国語や芸術と並んで、科学のアカデミーを設立することを王に進言したのである。つまりコルベールは科学的発明や発見の特許管理、地図や鉱物資源の分布の作成、科学の本の出版認可、科学に関する懸賞の主催などをアカデミーに行なわせることによって、国家に役立つ「科学者」集団を管理しようと考えたのである。

しかしその成立時である1666年ごろは、近代科学をこのようにとらえるものは少数派であり、ルイ14世もまた、この組織にさしたる期待を持たなかった。従って会員の権威も年金も、国語の純化を目的としたアカデミー・フランセーズに遠く及ばない状態であった。科学アカデミーが本当の意味で機能し出すのは1699年以降であり、そのときの常任書記フォントネル（Bernard le Bovier de Fontenelle, 1657-1757）— 彼はアカデミー・フランセーズの会員でもあった—の尽力によるところが大きい。これ以降、科学アカデミーはその権威を徐々に拡大してゆき、コルベールの当初の目的を果たし、先にも述べたが、ヨーロッパ全土に「科学者」集団の見本としての役割を果たすようになるのである。

そして繰り返しになるが、ここにジェンダーと科学という視点を持ち込むと、科学アカデミーのもう一つの顔が見えてくる。コルベールに次ぐこの組織の立

⁸ここで「科学者」という言葉に「」をつけたのは、scientistという言葉がこの時期に成立しておらず、これらの会のメンバーも、今日我々が科学者という言葉で定義している人々とは異なる生活形態の人間が多数を占めることによる。

役者であるフォントネルは、数学者であると同時に、近代科学の啓蒙に尽くした文人でもあった。彼はその著『世界の複数性についての対話』（1686）でデカルトの渦動宇宙論と理性の勝利を謳い、古い科学理論や教会の閉鎖性を批判する。しかも上流社会における婚姻外カップルの会話という形で科学を語ることで、読者にリベルタンと近代科学の親密な関係を見せ付けた。ヒロインの侯爵夫人は、恋人の哲学者により天動説から地動説に導かれ、宇宙人が存在する複数の世界をもった新しい宇宙論を信じるようになる。彼女は恋よりも学問的会話を好み、自分の知的好奇心を隠さない。

これは17世紀末にパリを中心に出現した女性知識人層である「才女」を好意的に描いた作品でもある。ここからわかるのは、フォントネルがこれらの有閑女性知識人の興味を科学のほうに向けたいと考えていたと同時に、このような科学好みの傾向がすでに才女たちの間に存在していたということである。

近代科学の支持者としての女性というフォントネルのこの視点は、当の女性たちからも好意的に受け取られた。というのも、一見社交界に君臨しているように見えても、大学やコレージュといった正規の学問へのアクセスは禁じられている女性にとって、フォントネルが提示した役割は魅力的だったからである。彼女たちは「科学者」（その多くは科学アカデミー会員およびその候補者）を自分のサロンに呼び、その知識を吸収し、彼らの説の宣伝者となる。パトロンとして物質的支援をすることもあるし、時にはその内に恋愛遊戯も含まれるだろう。しかしリベルタンであるフォントネルの視線には、それに対する道徳的かつ宗教的批判は存在しない。近代科学は知識人女性たちにさまざまな自由を保障してくれるのだ。

ただ、やはりここでも本当の参加は認められていない。繰り返しになるが、パリの科学アカデミーは女性会員の入会は認めない。名誉会員としてなら女性を認めたいいくつかのアカデミーとは対照的に、パリは断固として女性を拒んだ。これが、啓蒙のあらゆる知識人が、好意的であれ、批判的であれ、一致した見解であるところの「ヨーロッパでもっとも女性の知的水準が高い町」パリにおける科学アカデミーのジェンダー的矛盾であり、それは同時にフランス国家が抱えるジェンダーの矛盾でもあった。

ジェンダーから少し離れるが、アカデミーの支持した科学思想という点については、フォントネルがデカルト派であったこともあって、パリの科学アカデミーは最初デカルト主義が優勢であった。のちに専門的には、やはり会員であった当時の若手モーペルテュイ（Pierre-Louis Moreau de Maupertuis, 1698-1759）やクレロー（Alexis Claude Clairaut, 1713-1765）（ともにデュ・シャトレの友人）の論文や本によって、さらにはヴォルテールの科学啓蒙書力もあり、だんだんとニュートン主義がアカデミーの主流となる。このことは無限小解析（微積

分) や厳密な実験の必要性を意味し、その最前線に近づくことは専門家以外にはますます困難になってくる。ここからも、特に世紀の後半になるにつれ、科学アカデミーは「知の貴族」の属する集団というイメージが強まってゆく。じつに革命期には、この点こそが先に述べたマラー達によって批判されたのである。

1-4. 「火の論文」(1738)、シャトレ=メラン論争(1741)そして科学アカデミー

さてここでは、科学アカデミーが初出の「火の論文」とシャトレ=メラン論争にどのようにかかわってきたのかをくわしく見てゆこう。

「火の論文」は先にも見たように、アカデミー主宰のメスレー懸賞論文である。この懸賞はじつに75年の長きにわたって続いた由緒ある懸賞で、その莫大な賞金額もさることながら、特にフランス人にとっては将来のアカデミー会員への登竜門ともいえる重要な機会であった。そもそもメスレー懸賞にかかわらず、フランス人アカデミー会員は懸賞に応募できない。だからこそ懸賞は非会員が補欠会員などに推薦されるためには絶好の機会だった。

ただしここには明文化されていない留保がついている。それは実質的にはフランス人すべてではない、ということだ。つまり「教育を受けた男性だけ」という留保である。要するにデュ・シャトレがどんな素晴らしい論文を出そうとも、これがアカデミー会員へのパスポートになることはない。ただ、世間の注目をあつめることはできる。彼女が賞金を必要としたとは考えられないが、出版は切望していたに違いない。というのも、女は会員になれないのだから、通常のアカデミーの出版物である『論文集』に自分の論文を載せることはできない。しかし懸賞なら賞がとれたら論文が雑誌に掲載されるのだ。これは事実上、女性の論文がパリの科学アカデミーの出版物に載る唯一の機会であった。

ただし、上の議論はデュ・シャトレが科学アカデミーに強いこだわりを持っていないかぎり意味がない。彼女はアカデミーを強く意識していたのか。答えは「諾」である。彼女は死ぬまでアカデミーにこだわり続けた。彼女ひとりではない。それはこの時代、科学に興味を持ったすべての女性に共通した意識でもあった。

しかしこの時、デュ・シャトレは、この懸賞に関して、私的には非常に微妙な立場にあった。つまり彼女から見て、ニュートン啓蒙に「異常に」熱中している恋人ヴォルテールの存在が大問題なのだ。ヴォルテールは重さが測定されてもいない「火」物質に万有引力の法則を応用し、なにもかもをこの法則から説明しようとしている。これはデュ・シャトレには同意しがたい結論であった。だが正面切って反論するような論文を書いたなら、彼の男としてのプライドを

傷つけることになる。それにそもそも女の書いた論文とわかれば、周囲から正当に評価される保証はないのだ。こうした経緯から彼女は懸賞応募をためらい続け、締め切りの一ヶ月前についに決意する。ただし一緒に暮らしているヴォルテールには内緒だった。匿名応募という決まりが彼女に安心感を与えたのだろう。しかし自分の実験も識者との討論も、はては論文をきちんと見直す時間もとれないままの応募であった。

結果は先にも述べたが落選である。ここではじめてデュ・シャトレは応募のことをヴォルテールに打ち明ける。ヴォルテールは驚き、人脈をたどって科学アカデミーに働きかけ、自分たちの作品を次点のものとして雑誌に掲載させることに成功したのだった。つまり雑誌掲載はアカデミー側の自主的判断ではない。論文のレベルが次点であったにせよ、通常は受賞作品しか雑誌には載らない。すべてはヴォルテールの奔走の賜物であり、これがなかったら、デュ・シャトレの作品が科学アカデミーの雑誌史上初の女性の論文としてここに印刷されることはなかったろう。

問題は印刷というこの名誉な事態に当たって、デュ・シャトレがアカデミーとの間に悶着を起こしたことである。なんと彼女は論文を一部修正したいと言い出したのだ。アカデミー側としては審査されたときの形で印刷しないことには載せる意味がない。ただでさえ、次点論文を載せることは例外的措置なのだ。そのうえ修正など認められるはずがなかった。しかしデュ・シャトレはなかなかあきらめない。交渉の末に彼女の論文にだけ正誤表をつけることで折り合いがつく。彼女のこの要求はアカデミーから見れば無礼なものである。しかしじつはここにこそこの女性の、アカデミーに対する切なる憧憬が込められていたのだ。彼女が、有名なアカデミー会員であり、この懸賞の審査員でもあったモーペルティエに書いた手紙を引用してそれを簡単に説明しよう。

おわかりでしょうか、アカデミーに印刷される栄誉を得て、私は自分が切望していたものを全て手に入れたのです。[...] 私は貴方が [火の論文について]私に言ってくださろうと思っていること全てを有難く思うのです。そして貴方に読んで頂けることは、私が望んでいたはずのものより素晴らしい賞なのです。[...] 私はレオミュール氏に正誤表を入れてくれるように頼みました。私には、自分が論文に入れる訂正はアカデミーに捧げる私の崇拜であり、[印刷という] アカデミーの判断に対する私の敬意の証だと思っているのです⁹。

⁹Lettre 152.in *Lettres de la marquise du Châtelet*, introduction et notes de Théodore Besterman, Genève, Portrait, 2 vols., 1958.デュ・シャトレはこの前にやはりモーペルティエに、自分がなぜ匿名応募したのか、そして秘密執筆したのかについて詳しく説明している。巻末資料2参照。

ここにはモーペルデュイのような男性知識人には絶対に理解できない、当時の女性知識人の置かれた中途半端な立場が反映している。会員になれない女であるデュ・シャトレには「次」がないのだ。これがアカデミーの雑誌に載る最後の機会なら、自分の論文をできるだけ完成された形にしたいと思いつめるのは当然である。しかしこの必死さは結果として「アカデミーの都合などかまっていられない」というエゴイズムに転化してしまう。彼女がそれを「敬意の証」と正当化しようとしても、アカデミーにとってみれば迷惑な要求である。しよせん「礼節」は、真つ当な権利が保障された者にしか守れないものなのだ。

しかもアカデミーはここでデュ・シャトレから二重に挑戦されている。ひとつは「正誤表」を入れるという事実。もうひとつは「正誤表」の中にアカデミーの常任書記の論文を否定する内容が含まれているという、科学理論上の問題である。1737年の応募段階では、デュ・シャトレはヴォルテールの極端な万有引力崇拜には反対していたものの、運動する物体の力に関しては、恋人と同意見で、結果として常任書記メランが書いた「運動の量」を支持する1728年の論文に賛成していた。ところが印刷する頃に見解が変わり、活力派になっていたのである。つまりアカデミーは『論文集』に載せた常任書記の論文を批判する内容を追加する羽目になったのである。

当然メランは面白くない。彼は科学のみならず、その幅広い教養で当時の文芸共和国の有力者として名を馳せており、ヴォルテールの友人でもあるのだ。この時は関係者が食事会を催してお茶を濁したが、メランの心にはしこりが残った。由緒ある家柄の侯爵夫人とはいえ、たかが「一介の女性」に批判され、その内容が自分が仕切っている組織の雑誌に掲載されたのだ。これが結果として次の論争への序曲となる。

デュ・シャトレは、それが法外な要求であったにもかかわらず、「火の論文」の印刷のされ方に不満が残っていた。彼女はこの問題を再び自分の本である『物理学教程』の中で取り上げる決心をする。全21章のなかの最後の一章丸々を割いて、活力支持を表明したのである。しかも今度は本文でメランの論文を徹底的にけなすという大胆な行為に出た。こうしてメランはついに1741年に「手紙」を出版し、さらに味方の援護を受けながら問題の論文を再出版することまでしたのである。デュ・シャトレはこれに対して「手紙」で答え、『物理学教程』より激しくメランを批判する。両者は真つ向から対立して、まったく接点を見出せない。

これが史上初の男女の対等かつ公的な科学論争となったシャトレ＝メラン論争」である。

あわてたのは科学アカデミーである。明らかに「余裕」を欠いたメランの文章や態度は、上流社会の尺度で見れば「紳士」の資格を欠くものである。『ト

レヴュー評論』という当時の教養誌は、このメランの動揺を見抜き、すかさず「社交人としての勝利はデュ・シャトレにあり」としてメランを皮肉り、この論争を記事にした¹⁰。

デュ・シャトレのするどい批判にメランは心底あわてたのだろう。そしてこれはデュ・シャトレにとっては、すばらしい「評価」と同義のものだった。みなから尊敬されているアカデミーの常任書記が本気で自分に反論したのだ。彼女はこれをライブニツ＝クラーク論争のようにしたいと願った。しかし友人たちはメランに手を引くよう忠告し、アカデミーの息のかかった『サヴァン誌』も沈黙を守る。結局論争は一回限りのものとなり、活力の哲学的要素には触れられずじまいであった。

彼女はこのときもモーペルテュイたち友人に「そりゃあ私はアカデミーの書記ではありませんわ。でも私は正しいのです。これはあらゆる称号に値するのです」¹¹「このメランという人物は、名声というものがいかにいいかげんかということの証拠のような人物です」¹²と書き送り、この論争がいかに自分に名誉であったかを誇らしく語っている。

特に最初の言い分は、科学アカデミーに対する逆説的な信仰告白に等しい。絶対に自分がその中に入れただけに、デュ・シャトレのアカデミーに対する感情はいやでも愛憎のこもったものにならざるを得ない。そしてそんな彼女の心の揺れは、同時代人からみても明らかだったのだろう。さきの『トレヴュー評論』は、彼女のこのアカデミー常任書記に対するアンヴィヴァレントな感情を「今後自分もその仲間の内に数えられる光栄に浴したいと、デュ・シャトレ侯爵夫人が願っているような」¹³学者らのひとりと表現している。懸賞で入選することと共に、会員と本気で論争するのは、非会員が会員と同等の実力を証明するには有効な方法だ。その点でシャトレ＝メラン論争は理想の論争だった。メランにとっては苦々しい思い出だったかもしれないが、デュ・シャトレにとってはこれは最大級の名誉だった。

また『トレヴュー評論』はこれが男女の論争ということに注目するが、ジェンダー・バイアスのかかった見方をして、科学理論とは関係のない、「エレガンス」という「女らしい」側面において、特に論争におけるデュ・シャトレを賞

¹⁰川島慶子「デュ・シャトレ夫人と ヴォルテールの『化学』研究」『化学史研究』第24巻、第4号 (No.81), 1998: 261-280; 「Journal de Trévoux とシャトレ＝メラン論争」『名古屋工業大学紀要』第46巻、1994: 253-263.

¹¹lettre 269. *Lettres*, op.cit.

¹²lettre 274. *Lettres*, op.cit.

¹³“RÉPONSE DE MADAME ***. à la Lettre que M. de Mairan Secrétaire perpétuel de l'Académie Royale des Sciences lui a écrite le 18 Février 1741. sur la Question des Forces Vives. A Bruxelles; chez Foppens 1741 in-12. pag. 45.” *Journal De Trévoux ou Mémoire pour servir à l'histoire des sciences et des arts*, Article LXVII: 1390-1402、 p.1401.

賛する。あるいは、彼女を真剣にほめるときは「紳士 (honnête homme)」と男性形で賞賛する。したがって、活力論争という視点から見れば、1744年の『火の論文』は、三論文でひとつのまとまりをなす作品とも言える。断じて単なる過去の論文の寄せ集めではないのだ。

1-5. 再出版の意味とジェンダー問題

さて、以上のことを踏まえたうえで、再編集された『火の論文』(1744)と、最初の原稿を比較してみよう。デュ・シャトレは再版にあたって、この論文をどう変更したのだろうか。この変更こそ、これらが書かれた時の経緯と、その後の反響からデュ・シャトレが何を学んだのかということが刻印されている。

まず「火の論文」の方だが、初版と比較するとかなり文章をスリム化し、読みやすくなっている。繰り返しの表現をけずり、例なども重複しないように減らしてある。しかも正誤表の中身を本文にもりこみ、ここではあたかも、作者は最初から活力派だったかのように見える。したがって、これは改訂版であり、オリジナルとは別の作品とも言える。ただ、特に読者にことわずらなくこうした大きな改訂をすることは、当時としては珍しいことではない¹⁴。

ここで重要なのは、デュ・シャトレが、最初に書いたときの問題点(執筆や実験のための時間がなく、全体に推敲が足りなかったこと)と、投稿以降の数々のできごと(活力派への転向と、正誤表の導入)を、きちんとした形で修正したいとずっと願っていたということが、ここに明らかになったことである。

「返事」にも細かい修正が色々あるのだが、最も重要な変更は、なんと『トレヴー評論』が女らしさの象徴として賞賛した、活力や運動の量をダイヤモンドとその値段と比較するというたとえ話を、デュ・シャトレが完全に削っていることである。アカデミーの息のかかった雑誌、『サヴァン誌』がシャトレ＝メラン論争を無視する中で、『トレヴー評論』はそれでもこの話題を取り上げ、おまけにその点において彼女の方を賞賛したのだ。それなのにデュ・シャトレは『トレヴー評論』の賞賛を拒絶しているのである。これはどういうことか。

要するに、デュ・シャトレはここで、どんな賞賛でもありがたいわけではない、ということをも明言したかったのだろう。彼女が欲しかったのは、先にも書いたが、まさに『トレヴー評論』が見抜いていたように、メランやモペールデュイたちと同じような「学者」と見なされるという評価であり、「科学論争においてもエレガントなフランス語を使う、女らしい女性」という類の賞賛ではないのだ。

¹⁴ たとえばヴォルテールの有名なニュートン理論の啓蒙書『ニュートン哲学要綱』も、初版の1738年版と、『物理学教程』出版以降の版とは、かなり違った内容になっており、題名だけは同じだが、もはや同じ本とは言いがたい。

こう考えると、この1744年版の『火の論文』は、観客としてではなく、真の論客として科学に参加した一女性が、当時の科学界の最高権威に挑んだ戦いの記録であり、科学を「雄雄しいもの」と見なして、そこからの女性の排除をもくろんだベーコン (Francis Bacon, 1561-1626) のテーゼへの挑戦と見なすこともできる¹⁵。

さらに注目すべきは、この二つの論文はともに科学アカデミーと関係していたものということである。彼女は他にも論文があり、それを出してもよかつたはずだ¹⁶。じっさい、科学的主題としては、「火の論文」と活力中心の「往復書簡」というこの組み合わせは、あまりしっくりこない。その点から考えれば、この作品は本としてのまとまりを欠いているという印象は否めない。それがわからないデュ・シャトレではない。にもかかわらずこの組み合わせを選んだのは、科学的内容というよりも、その両者が「科学アカデミーとの公的な関わり」という、本来的には女性に許されていなかった榮譽を受けることができた作品だったからではないだろうか。

したがってこの本は、科学アカデミーのジェンダーに関係する二面性、つまり観客や援助者としては歓迎するが、参加者としては拒絶するというその矛盾した態度が、デュ・シャトレのような、科学を真剣に研究する女性知識人にもたらした葛藤の、ひとつの帰結と見ることができる。この矛盾により、科学に参加したい女性のアイデンティティは常に不安定となる。そこから生じる女性たちの奇妙な行動は、たとえ彼女の友人や恋人であっても、当時の男性知識人には理解できない。ここから、また、当時の多くの男性知識人の、科学に参加する女性に対する解釈は、19世紀から今日までの男性、あるいはその価値観を内面化した女性研究者にも、そこに存在するジェンダー・バイアスが気付かれないうまま、置き去りにされてゆく。

このような状態では、デュ・シャトレの手紙や本などの史料、つまり当の女性の第一次史料という、本来的には最も重要であるはずの史料が、著名な男性の解釈に反するということで一顧だにされなくなる。たとえばヴォルテールが晩年のデュ・シャトレに下した評価「ライプニッツ思想を捨ててニュートンにもどった」というものが、実際のデュ・シャトレの行動と完全に矛盾しているにもかかわらず、かなり長期間にわたって流布したことは、こうした「不可視化」の一例であろう。もちろん研究者が意識してそうするわけではない。それだけにこれは恐ろしい現象である。その意味で、デュ・シャトレ作『火の論文』

¹⁵ベーコンのこうした思想傾向に関しては、エヴリン・フォックス・ケラー『ジェンダーと科学』（幾島幸子、川島慶子訳）、工作舎、1993 第一部参照。

¹⁶これら未発表論文は、ペテルスブルグのロシア国立図書館に現存する。これをまとめたのが、ヴォルテール研究者であるウェイドである。Ira O. Wade, *Studies on Voltaire With Some Unpublished papers of Mme du Châtelet*, Princeton, Princeton Univ. Press, 1947.

1744年版は、ジェンダーの視点からは非常に重要なテキストであり、この時代の女性と科学アカデミーの関係を理解する上で、さらなる研究が期待されるものでもあろう。

2. 科学アカデミー会員の周縁で—啓蒙期における女性の科学翻訳

2-1. 科学翻訳の必要性

翻訳の意義とは何だろう。それは異なる言語を持つ人々への知識の伝播であり、情報の共有が促進されることである。かの12世紀ルネサンスにおける一大翻訳運動が生み出した成果にそれは明らかだ。このときアラビア語からラテン語に翻訳された書物の数々が、後のヨーロッパ世界におけるスコラ学の基礎となったのである。12世紀ルネサンスからその直前の時代、つまり科学革命の時代までは、学問の本はほぼラテン語で書かれていた。この時代の学問、宗教、法律の公式用語は、自国語ではなくラテン語だったからである。しかし17世紀の終わりごろからこの傾向に変化が訪れる。フランスやイギリスを中心に自国語が隆盛し、学問の本が自国語でも書かれるようになる。こうして、それぞれの国で学術書を読むことのできる人の数は圧倒的に増加するが、異なる言語を母国語とする人にとっては、逆に難しくなる。

というのも、科学アカデミーの中には有名な紀要を発行している所も多々あったが、そこに載っている論文の言語が多様になってきたため、他国のアカデミー会員がそれを読めないという事態が生じてきたからである。たとえば、先に述べたメスレー懸賞では、デュ・シャトレの論文はフランス語だが、入賞者の一人、オイラー (Leonhard Euler, 1707-1783) の論文はラテン語である。だからたとえこの雑誌を手に入れても、両方の言語ができないと、両者の論文を比較検討することはできない。ここで再び翻訳の重要性が増してくるのである。

この章では、この時代に科学書の翻訳に携わった女性であるマリー・アンヌ・ラヴワジエ (Marie-Anne-Pierette Paulze-Lavoisier, 1758-1836)、マリー・ダルコンヴィル (Marie-Geneviève-Charlotte Thiroux d'Arconville, 1720-1805)、エリザベート・モンベイヤール (Elisabeth-Bénigne Potot de Monbeillard, 1727-1798)、クロディーヌ・ピカルデ (Claudine Picardet, 1735-1820)、の四人の女性に焦点を当てる。女性の世紀とも称されるこの18世紀には、確かに女性の手になる優れた科学書の翻訳が多数出版された。彼女達はまさに科学の仲介者であり、その発展と伝播に大きく寄与した。ここで一つ注意したいのは、この時代に翻訳者という役割を選んだ女性達を、男性翻訳者と同等に捉えていいのかという問題である。

本論では、当時のジェンダー・バイアスを視野に入れることで、彼女達にとっての「選択」と、彼らにとっての「選択」は同じものではないということを明らかにする。こうしたアプローチは、この時代の科学翻訳についての一般的意味のみならず、ジェンダーの視点からの「科学翻訳」の意味についても考察することになるだろう。

2-2. 文芸共和国の交渉者

この世紀の前半に、「女性翻訳者とは何者か」という問いに鋭い考察を述べた女性が存在する。それは前の章で述べたエミリー・デュ・シャトレだ。彼女の遺作となった『プリンキピア』仏訳・注釈は、ラテン語が読めるフランス人がどんどん減少してゆく中、遂行された計画であった。それはデュ・シャトレの死後に、ヴォルテールをして「科学アカデミーがやるべきだったこと」¹⁷と言わしめたほどの壮大な企画であった。

この翻訳から15年ほど前に、草稿のままで残したマンドヴィル（Bernard Mandeville, 1670-1733）の『蜂の寓話』の翻訳者序文で、デュ・シャトレは翻訳や紹介という自分の選んだ役割を、当時のヨーロッパにおける知識人のネットワークである「文芸共和国」の交渉者だと規定している¹⁸。彼女によれば、自国語の粗悪な本よりも、外国の良書の翻訳の方が価値があるのだから、翻訳者は文芸共和国で賞賛されてしかるべき存在だというのである。

しかし、デュ・シャトレにとって翻訳者への賞賛は手放しのものではない。というのも彼女はそこで、翻訳者は語学だけでなく、作者の主張を理解する能力が必要だが、作者と同じ天才は必要ないと書いている。さらに、翻訳は大変な仕事だが、平凡なものでもあるとも述べているからだ。そして、ジェンダーという視点から見て重要な指摘は、そんな平凡な仕事ですら、女性がするとすると世間がその女性をあつかましいとみなすと、社会に対して異議申し立てをしていることである¹⁹。

つまり、「翻訳する」ことすらタブーならば、女性が「翻訳される」側になるのは容易なことではない。デュ・シャトレにしてみれば、偉大な本が女性によって書かれていないのは、社会の側の責任なのだ。彼女は次のように主張す

¹⁷ Voltaire, D.4040, *Correspondance*, Edition définitive par Théodore Besterman, Genève, Institut et Musée Voltaire, 1968-1977 (*Œuvres complètes*, vols.85-135), vol.95, p.81 : ヴォルテール『ヴォルテール書簡集』手紙 328, 1749.10.15. (高橋安光訳, 法政大学出版局, 2008) , p.407.

¹⁸ Emilie du Châtelet, “La Fable des abeilles,” in Wade, *op.cit.* : 131-187, p.133.

¹⁹ この時代に、女性がまじめなものを「書く」ことがいかに奇異な目で見られていたかということに関しては、次の文献を参照。 Nathalie Z. Davis, “Gender and Genre: Women As Historical Writers, 1400-1820,” in Patricia H. Labalme ed., *Beyond their Sex, Learned Women of the European Past*, New York & London, New York Univ. Press, 1980: 153-182.

る。

多くの女たちが教育の欠陥から自分たちの才能に気付かずにおり、精神における偏見と勇気のなさのためにその才能を埋もれられているのだと私は確信している。[...] 私は偶然にも学識のあるひとびとと知己になった。彼らは私に友情を寄せてくれて、私は非常な驚きと共に、彼らがこの友情になんらかの敬意を表明してくれることを知った。それで私は自分自身が考える生き物 (*creature pensante*) であるという確信をもち始めたのである。けれどもそのことを垣間見ただけだった。[...] 自分が考える生き物であると本当に確信したのは、まだ理性的になる時間は残されているけれど、才能を獲得するだけの時間はすでになくなっていく年齢になってからだった²⁰。

このような状況下では、デュ・シャトレが選んだ翻訳者という役割は、社会から創造者になることを拒否されている女性である自分が見つけた、数少ない選択肢の一つでしかない。つまり、もし男子と同じ教育や期待を与えられていたならば、彼女は『プリンキピア』を翻訳したかどうかわからないということになる²¹。こうなると、翻訳という彼女の「選択」は、男性のそれとは同様に扱えない。つまり、同じ科学翻訳と言っても、ベルリン・アカデミーの有名な会員であったラ・メトリ (*Julien Offray de La Mettrie, 1709-1751*) が、パリの科学アカデミーの外国人会員かつ、ロイヤル・ソサイエティの会員であった恩師、ブールハーヴェ (*Hermann Boerhaave, 1668-1738*) の本を仏訳した、などという話と単純に比較することはできない²²。われわれはここで常にジェンダー・バイアスの存在を意識する必要がある。

デュ・シャトレほど明確にこの問題を自覚していた女性は少数だが、この時代の女性翻訳者達のテキストを吟味すると、そこには類似の問題が存在することがわかる²³。以下の節ではマリー・ラヴワジエのケースを具体的に分析してみたい。

²⁰Du Châtelet, “La fable,” *op.cit.*, p.136.

²¹この問題に関しては、次の論文を参照。川島慶子「『レディ・ニュートン』の科学啓蒙書」『UP』8 (東京大学出版会, 2005): 28-32.

²²『人間機械論』で有名なラ・メトリはライデン大学でブールハーヴェに学び、帰国してから師の *Institutiones rei medicae in usus annuae exercitationis domestica* を仏訳した。その他にも *Aberégde la théorie chimique, tiré des propres écrits de M.Boerhaave*(1740)を出版したりして、師の理論の普及に努めた。

²³たとえば フィンドレンが、やはり 18 世紀のイタリアにおける女性の科学翻訳について、同様の状況が存在することを立証している。Paula Findlen, “Translating the New Science: Women and the Circulation of Knowledge in Enlightenment Italy,” *Configurations*, 3(2), 1995: 167-206.

2-3. マリー・アンヌ・ラヴワジエ：女神の葛藤

2-3-1. 夫にふさわしい妻

マリー・アンヌ・ラヴワジエはその名からもわかるように、近代化学の父と呼ばれたアントワーヌ・ラヴワジエ (Antoine-Laurent Lavoisier, 1743-1794) の妻である。結婚前のマリー・アンヌは、修道院付属学校での慣習的な初等教育以上のものを受けていない。デュ・シャトレが嘆いているように、この時代には女子のための高等教育機関は存在していなかった。マリー・アンヌが当時の先端的な科学論文を理解できるような教育を受けたのは、ラヴワジエと結婚してからである。

13歳の終わりで、裕福な徴税請負人であるだけでなく、将来を嘱望された科学アカデミー会員でもあったラヴワジエの妻となったこの女性は、学者である「夫にふさわしい妻」になろうと決意する。これは同時に夫の望みでもあった。ラヴワジエはこの、科学についてはまったく白紙の少女を、彼の化学研究の世界にいざなったのである。ラヴワジエだけでなく、彼の同僚の一人であるビュケ (Jean Baptiste Marie Bucquet, 1746-1780) もまた、この女性の化学の教師であった²⁴。

したがってマリー・ラヴワジエと科学のかかわりは、翻訳だけではない。彼女は夫とともに実験に立ち会い、多数の実験記録ノートを残している。そのほか、後にナポレオン (Napoléon Bonaparte, 1769-1821) の画家として著名になるダヴィド (Jacques Louis David, 1748-1825) に絵を習い、ラヴワジエの砲兵工廠の館にあった2つの大きな実験室のデッサンを残している。版画の技法も別途取得して、ラヴワジエの代表作である『化学原論』の実験器具の版画を手がけた。これらは、当時の最先端の化学実験室の様子を今に伝える貴重な資料である。もちろん18世紀の知的な上流社交夫人の常として、自分のサロンを持っており、そこで夫の化学理論を広めるために、内外の学者を招いてさまざまなイベントを催したりしていた²⁵。翻訳は彼女のこうした多様な活動の中の一つである。しかし、修道院の初歩的な教育しか受けていなかったこの女性は、誰に語学を習ったのだろうか。

19歳のころに、マリー・ラヴワジエが兄に送った手紙があるが、そこから彼女がこのころラテン語を習っていたことがわかる。

²⁴Carleton E. Perrin, "The Lavoisier-Bucquer collaboration: A conjecture," *Ambix*, 36(1), 1989: 5-13.

²⁵マリー・アンヌ・ラヴワジエの生涯については、Jean-Pierre Poirier, *La Science et l'Amour, Madame Lavoisier*, Paris, Pygmalion, 2004, 川島慶子『エミリー・デュ・シャトレと マリー・ラヴワジエ』, *op.cit.* 参照。

いつお帰りになりますの。ラテン語はお兄様がここにいらっしゃることを求めていますよ。私を楽しませ、そして夫にふさわしくして下さるために、退屈でしょうけど名詞や動詞の変化を教えにいらしてくださいませね²⁶。

そのほかに英語やイタリア語も習得しているが、その教師についてはわかっていない²⁷。

これら語学の知識の中で、マリー・ラヴワジエが公的な仕事として役立つことになったのは英語であった。じつは彼女の翻訳作業は、当初はごく私的な目的、夫のためだけの翻訳としてはじまったものである。というのも、ラヴワジエは英語が苦手だったからである²⁸。しかも当時イギリスやスコットランド、アイルランドといった英語圏は、化学研究の先進国であり、これらの国の学者たちは、英語で論文を書く者が多数になっていた。プリーストリー (Joseph Priestley, 1733-1804) やカーワン (Richard Kirwan, 1733-1812) たちの論文を読むには、英語が必須である。かくして語学にたけた妻の出番となる。こうして、出版とは関係のないところでマリー・ラヴワジエの翻訳作業がはじまったのである²⁹。

こうした妻の助力はアントワヌ・ラヴワジエにとって大きな助けになった。彼は英語圏の化学者たちの仕事に、次々と反論を加えてゆく。彼はシュタール (Georg Ernest Stahl, 1660-1734) が広めたフロギストン理論を打ち倒すべく、それを守ろうとする学者たちを批判した。中でもアイルランド人化学者カーワンは異色のフロギストン論者であった。というのも、彼は単なる守旧派ではなく、ラヴワジエたちの理論にも通じており、当時続々と発見されていたさまざまな気体とフロギストン理論をつなぐ糸を探そうとしていたからである。

カーワンはキャベンディッシュ (Henry Cavendish, 1731-1810) が発見した水素を、その軽さと可燃性ゆえに火物質であるフロギストンと同一視する。また酸の原理としてもこれを適用し、この説は科学界で一定の支持を集める、首尾一

²⁶ Antoine-Laurent Lavoisier, *Œuvres de Lavoisier, Correspondance*, éd par René Fric (toms.I-IV), par Michelle Goupil (tom.V), par Patrice Bret (tom.VI), Paris, Académie des Sciences, 1955-1997.

(以下続巻が刊行予定), tom.3, N.348, p.605 (強調は引用者による)。ラテン語に関しては、兄以外にも専門の教師から習っていた。 François-Auguste Faveau, baron de Frenilly, *Souvenir*, A. Chuquet éd., Paris, Nourrit, 1909, p.11.

²⁷ただし、フランス語とイタリア語は類似の言語であり、フランス人なら独学でもある程度のレベルになることは可能なので、特別の教師はいなかった可能性もある。じっさい、デュ・シャトレもイタリア語を取得していたが、独学である。

²⁸Lavoisier, *Correspondance*, *op.cit.*, vol.5, N.974, p.161.

²⁹パリの科学アカデミー古文書館には、マリー・ラヴワジエが夫のために訳した、夫あての英語の手紙や英語論文の仏訳草稿が残っている。 Fonds. Lavoisier, Dossier 122, Archives de l'Académie des Sciences: *Correspondance*, *op.cit.*, vol.6, N.1321-A, 1321-B, pp.185-188, etc.

貫した理論となっていた。フロギストンを必要としない新化学を打ち立てようとするラヴワジエと仲間たちは、共同でこのカーワンを批判することに決め、批判的翻訳という画期的な方法を採用する。これが、そのほとんどがラヴワジエ同様パリの科学アカデミーの会員であった、ラヴワジエグループによる、カーワン作『フロギストン論考』（1787）の仏訳である³⁰。

1788年に出版されたこの反論付き仏訳は大きな反響を呼び、その翌年に出版されたラヴワジエの『化学原論』とあいまって、少なからぬフロギストン論者をラヴワジエ派に転向させた。ラヴワジエたちはこの他にも新しい化学の普及を目指し、1789年に雑誌『化学年報』を立ち上げる。マリー・ラヴワジエはここでも翻訳を發表し、やはりカーワンの論文「種々の酸の力」を訳して1792年に掲載している。この、カーワンの2作品が、彼女が公にした翻訳である³¹。ただし彼女の翻訳作業は、私から公へと完全に移り変わったわけではなく、このあとも、『化学原論』イタリア語訳につけられたイタリア人の序文を、夫のために仏訳しており、私的な仕事は一貫して行っていた³²。こうしたマリー・ラヴワジエの行動はまさに有名な科学アカデミー会員の「夫にふさわしい妻」だった。彼女はその美貌や社交術とともに、最先端の化学を解する知性的な女性、化学革命の旗手であるラヴワジエの女神として、この時期の文芸共和国で高く評価された³³。じつに彼女は、この時代の女性雑誌でもその存在を「夫の化学研究を手伝う妻」として称えられている³⁴。「夫にふさわしく」なるようにラテン語を覚えてくれと兄に書いた、かつての幼な妻の望みはかなえられたのだ。

2-3-2. カーワンの仏訳とその反響

マリー・ラヴワジエが行った公的な翻訳はふたつとも通常翻訳とは多少意

³⁰ Richard KIRWAN, *An Essay on Phlogiston*, London, P.Elmsly, 1787: French translation, *Essai sur le phlogistique et sur la constitution des acides*, traduit de l'anglais, avec des notes de MM. de Morveau, Lavoisier, de la Place, Monge, Berthollet et de Fourcroy, Paris, rue et hôtel Serpente, 1788.

³¹ Richard Kirwan, *On the Strength of Acids, and the Proportion of Ingredients in Natural Salts*, Dublin, George Bonham, 1791: French translation, “De la force des acides et de la proportion des substances qui composent les sels neutres,” “Suite du mémoire sur la force des acides et sur la proportion des substances qui composent les sels neutres,” *Annales de Chimie*, XIV, juillet, 1792: 152-211, 238-286.

³² Fonds Lavoisier, Archives de l'Académie des Sciences, dossier 152.

³³ 当時、ラヴワジエ夫妻に会った外国人たちは妻の知性の高さについて書き残している。Gouverneur Morris, *A Diary of the French Revolution*, London, 1939 in Denis I. Duveen, “Madame Lavoisier,” *Chymia*, 4, 1953: 13-29, p.17: Arthur Young, *Travels During the Year 1787, 1788 & 1789*, 2nd ed., London, Royal-exchange, 1794: rep., New York, AMS Press, 1971, p.78: 『フランス紀行』（宮崎洋訳）法政大学出版局, 1983, p.106, etc.

³⁴ Suzanna Van Dijk, *Traces des femmes, présence féminine dans le journalisme français du XVIIIe siècle*, Amsterdam & Maarssen, APA-Holland Univ. Press, 1988, p.67.

味が異なる。というのも、翻訳者の性にかかわらず、たいていの翻訳は作者の思想を広めるためになされるからである。しかしカーワンの翻訳は反論のための翻訳であり、作者がいかにも間違っているのかを読者に知らしめなければならない。したがってここには、通常の翻訳には存在しない、翻訳者のさまざまな工夫が凝らされている。仏訳とオリジナルとの違いや、彼女がここにつけた翻訳者の序文については拙論で分析したので、仔細はそれにゆずるが、ここでその工夫について簡単に説明しておこう³⁵。

たとえばカーワンはラヴワジエに反対しているので、原本の物質名はすべて旧来のものである。しかし『フロギストン論考』仏訳では括弧の中に、「種々の酸の力」では本文にそのまま、ラヴワジエたちが提唱する新しい命名法に従った物質名を使用しており、翻訳者は明らかにカーワンとは別の立場にいることがわかる³⁶。

また、『フロギストン論考』仏訳には作者の序文の直前、つまり読者が最初に読むところに「翻訳者の緒言」がある。ここではマリー・ラヴワジエみずから筆をとって、最近の化学の発達がいかにめざましいものか、そしてそのことで古い理論の間違いがどのようにあきらかになったのかを明白に述べている。彼女は「化学の研究は日に日に総括的なものになり、ある学者の出現以来、とりわけその進歩の速度が増しているように思われる。この学者は、彼が実験に取り入れた厳密な配慮と、彼の観察を導き新しい理論を生み出した哲学的精神によって著名であり、この新しい理論には立証された真理以外のなにものも存在しない」と書いた。もちろんこの「ある学者」は夫のアントワーヌ・ラヴワジエである。妻はここで夫の貢献を傑出したものとして描くと同時に、この仏訳が反論のためのものであることをも直接的に述べている³⁷。また、翻訳というものの持つ問題についてもコメントしており、「我々は言葉の違いが許す限りで字義通りに訳し、カーワン氏の考えを最も明瞭で正確に解説するべく努めた。科学的な事柄に要求される極端な正確さは言葉の選択に最大限の厳密さを要求するものだ」という表現で、自分がいかにこの仕事に気を使ったのかを訴えている³⁸。

これは版画も含めてマリー・ラヴワジエの最初の公的な仕事であり、私から公への登場にあたっての彼女の緊張が見て取れる。そして最後に「翻訳者はあえて、余り重要でない幾つかの注のみを担当した」と書いて、控え目ではあるも

³⁵ 川島慶子「フロギストン論考仏訳におけるラヴワジエ夫妻の協力」『化学史研究』、第22巻第3号(72), 1995: 163-179; Keiko Kawashima, "Madame Lavoisier et la traduction française de l'Essay on phlogiston de Kirwan," *Revue d'histoire des sciences*, 53-2, 2000: 253-263.

³⁶ 川島「フロギストン論考」前掲書, p.18; Kawashima, "Madame Lavoisier," *op.cit.*, p.243.

³⁷ Marie-Anne Lavoisier, "Préface du traducteur," in Kirwan, *Essai sur le phlogistique*, *op.cit.*, p.v.

³⁸ *Ibid.*, p.vij.

の、ここでの翻訳者の役割は、単なる字句の転換ではなく、その内容に対する検討も含まれていることを明記している³⁹。

ただし、翻訳者 (*traducteur*) という言葉が男性形であることからわかるように、マリー・ラヴワジエは自分の名前を公表してはいない。この本には翻訳者の名前が記されてはいない。ところが「種々の酸の力」ではこれが多少変化し、フルネームではないものの、自分を「L夫人」 (*Madame L.*) と記載し、少なくとも女性であることが誰の目からもわかるようになっている。1788年から1792年の間に、マリー・ラヴワジエになにか心境の変化があったのだろうか。記録が残っていないのであくまでも推測だが、やはり彼女自身が第一作で自信をつけたことがあるのではないかと思われる。

というのも、『フロギストン論考』仏訳はカーワンに衝撃を与え、彼はラヴワジエ達の反論部分を英訳させ、そこに自分のさらなる反論をつけて1789年に再出版するという行動を起こしたからである⁴⁰。ここには「翻訳者の序文」も「翻訳者注」もきちんと英訳されている。他にも初版にはない注も挿入されており、仏訳の影響を見てとれる。結局、カーワンの再反論は功を奏さなかった。繰り返しになるが、『フロギストン論考』仏訳は、『化学原論』とともに、少なからぬフロギストン論者を新化学派へと転向させ、最後にはカーワンその人もまた、フロギストン説を放棄するに至る⁴¹。ラヴワジエの研究者仲間であったフルクロワ (*Antoine François de Fourcroy, 1755-1809*) は、『系統的百科全書』の項目「化学」で、この仏訳を「忠実な翻訳」であると、賞賛している⁴²。この翻訳は当初の目的を完全に達成したと考えていいだろう。

こうした成功がマリー・ラヴワジエをして、「種々の酸の力」に「L夫人」と印刷させたのではないだろうか。そしてこの「名前を公表する」という点では、翻訳ではないが、『化学原論』の版画の作者として、彼女は自分を「ポールズ＝ラヴワジエ」と明記させている。3つの公的作品において、これが一番詳しい表示である。この理由についても記録は残っていないが、もしかしたら彼女が一番自信があった分野は、翻訳ではなくて絵画だったのかもしれない。いずれにせよ、こうして名前を公表することによって、仲間内では自明のことであ

³⁹*Ibid.*, p.xj. この本には3つの長い翻訳者注が挿入されており、それはカーワンの実験結果に対する反論である。『種々の酸の力』にも（ここには翻訳者序文はない）、やはり4つの翻訳者注があり、翻訳者は著者の実験結果に疑問を呈している。この注の作者問題については、拙論で述べたので、詳細はそれにゆずるが、以上のことからこれら二つの翻訳は、通常の翻訳とは趣を異にすることがあきらかである。川島慶子「フロギストン論考」前掲書, pp.166-168; Keiko Kawashima, “Madame Lavoisier,” *op.cit.*, pp.246-247, 262-263.

⁴⁰Richard Kirwan, *An Essay on Phlogiston and the Constitution of Acids, A New Edition*, London, J. Johnson, 1789.

⁴¹Antoine Fourcroy, “Chimie,” *Encyclopédie méthodique : Chimie, pharmacie et métallurgie*, tom.3, Paris, chez H. Agasse, l’An IV de la République, p.560.

⁴²*Ibid.*, p.546.

った翻訳者の存在が、広くヨーロッパの学問世界に知られることになる⁴³。翻訳に関する学者たちからの賞賛は、マリー・ラヴワジエにとって心地の良いもだつたに違いない。

たとえばスイス人学者ソシュール (Horace-Bénédict de Saussure, 1740-1799) は、『フロギストン論考』仏訳によって新化学に転向した元フロギストン論者だが、マリー・ラヴワジエに次のように書き送っている。

貴女は私の疑いに打ち勝たれたのです。少なくとも、貴女が私に送ってくださった興味深い本の主要なテーマであるフロギストンに関してはそうです。私はかつてシュタールの大の崇拝者でした。[...] 貴女が気品のある文章で正確に彼の作品を翻訳なさったのですが、このように翻訳することで貴女が彼に与えた栄誉は彼にとっては致命的なものとなったのです。と申しますのも、それによって彼の推論のとんでもない貧弱さ、いやむしろしばしばまやかしとすらいえるものが白日の下にさらされたのですから⁴⁴。

マリー・ラヴワジエはこれを受けて、夫の仲間の一人で、恋人のピカルデ夫人が優秀な翻訳者でもあり、自身はディジョンのアカデミーの中心人物のひとりでもあった高名な学者ギトン・ド・モルヴォー (Louis Bernard Guyton de Morveau, 1737-1816) に次のように報告している。

ソシュール氏が即刻フロギストン説の放棄宣言をしたばかりだという手紙をくれたことをお知らせします。この学者が正しい学説に戻れたという幸福は、カーワンについての貴方の覚書のおかげです。イギリスでは彼ら〔フロギストン論者〕はまだ屈服していないように見受けられます。というのも、ケイル氏がフロギストンに関する本を出す予定とか。思うに、私がそれを翻訳し、貴方がそれに反論するまでもないでしょう⁴⁵。

この引用の最後の文章から、マリー・ラヴワジエが、科学翻訳者としてのプライドと意欲を有していたと考えていいだろう⁴⁶。というのもこの文章は、もし

⁴³マリー・ラヴワジエの翻訳作業は秘密のことでもなんでもなく、彼女は友人、知人にそのことを公表していた。たとえばイタリア人化学者ランドリアーニ (Marsilio Landriani, 1751-1815) は、彼女への私信でこの仏訳を「あなたの本」と表現しているし、このころラヴワジエ邸をおとずれたイギリスの農業改革者アーサー・ヤングは、彼女がカーワンの本を翻訳していたことを書き残している。 *Correspondance, op.cit.*, vol.5, N.1074, p.219; Young, *op.cit.*, p. 78; 和訳, p.106.

⁴⁴*Correspondance, op.cit.*, vol.5, N.1089, p.232.

⁴⁵*Correspondance, op.cit.*, vol.5, N.1092, p.234. (強調は引用者による)

⁴⁶マリー・ラヴワジエは、ギトン・ド・モルヴォーあての他の手紙でも、自分を「翻訳者」

ケイル (James Keir, 1735-1820) の本が重要なら、自分はそれを翻訳しようと言っているのと同義だからである。マリー・ラヴワジエはラヴワジエグループの一員としての自分の役割を、積極的に引き受けていたのだ。

2-3-3. 翻訳作業のジェンダー的意味

本節では、マリー・ラヴワジエにとっての科学翻訳の位置づけについて、ジェンダーの視点から考察する。先の部分では、彼女が『フロギストン論考』仏訳の成功で、自分の翻訳者としてのプライドを有していたことを示したが、じつはこのプライドには影の部分が存在する。これがデュ・シャトレの告白に通じる部分である。というのも、ギトン・ド・モルヴォーにはあのように書いたマリー・ラヴワジエだが、肝心のソシュールには以下のような返事をしているからである。

貴方が御自分の信仰告白のお相手に私を選んでくださったことで、私はとても得意になっております。本当なら**翻訳しか取柄のない私**にはそんな資格はありませんのに。この主題に関しまして貴方が私にかけてくださった数々の優しいお言葉は、もしもいつも私の周りにいる、私よりずっと有能な人たち、その人たちと比べると**私なんて小娘**でしかない**あの人たちがいなかったら**、私に自尊心を与えてくださるのに十分なものでしたでしょうに。化学という学問は、それについてゆくのがかなり困難なほど進歩しています。そしてその進歩はあの新しい学説に負っているのです⁴⁷。

これはなんという矛盾だろうか。「あの人たち」のせいで自尊心が持てないとマリー・ラヴワジエは告白している。しかし、この、ほとんどが優秀な科学アカデミー会員という「あの人たち」がいなければ、自分がこうした科学書を翻訳する立場になど絶対に立てなかったのではないのか。女子のための高等教育機関が存在しなかった当時において、ラヴワジエとその仲間たちという最高級の教師達からの教えは、マリー・ラヴワジエを「最先端の化学を理解できる女性」という稀有な存在にすることを可能にした。ところが、こうして化学革命の実現に協力してみれば、そこに見えてくるのは自分と彼らとの実力の超えようもない「差」であり、いつまでたっても「小娘」から抜け出せない自分の姿であった。彼女もまた、デュ・シャトレ同様、「考える被造物」としての自分を見出したとたんに、「天才でない」自分の姿を自覚してしまうのである。

として強調している。Mme Lavoisier à Guyton de Morveaux, le 6 sept. 1788, Fond. Guyton, Archives de l'Académie des Sciences.

⁴⁷Correspondance, op.cit., vol.6, N.1106, p.1. (強調は引用者による)

「翻訳しかとりのない私」という表現から、彼女にとって、科学翻訳の位置づけは決して高いものではないことがわかる。これはデュ・シャトレが、自然から選ばれた者としての「天才」を賞賛し、自分をそれ以外の部類に数えていることに似ている⁴⁸。マリー・ラヴワジエとその周辺の世界にとって、化学において価値のあることは「創造」であり、「伝達」は二次的な役割しか持っていない。これを自らの価値としてとりこんだとき、自分が行っている科学翻訳は「あの人たち」の業績に比べればたいした値打ちのない仕事になってしまう。

こうした感情は科学翻訳にたずさわった女性に多くみられるものであり、あとに述べるイタリア人女性科学啓蒙家バルバピッコラ (Giuseppa Eleonora Barbapiccola, n.d.) やアルディゲッリ (Maria Angela Ardinghelli, 1728-1825) たちにも同様の傾向が存在する⁴⁹。

つまり、こうした女性たちに共通しているのは、皆がその地域に存在する科学アカデミーの男性会員たちと近い関係にあり、彼らのアイドル的存在であったこと。また、彼らの影響から、啓蒙より創造を高い位置に置き、自分たちの科学や語学の能力を誇りながらも、同時に翻訳されるような本の作者ではない自分たちを恥じているという複雑な心境なのである。

ここで、一見理想的なマリー・ラヴワジエの科学教育についてもういちど考えてみよう。たしかに彼女の教育には時間の無駄がない。14歳直前でラヴワジエの妻となった少女は、この時点から本格的な科学教育や語学教育をスタートさせているからだ。これは同時代の男性と比べても早い方である。しかも教師陣は超一流である。たいていの知識人女性は、デュ・シャトレが『蜂の寓話』の翻訳者序文で述べているように、女子教育制度の不備のせいで、学問の開始は遅い⁵⁰。

たとえばデュ・シャトレ自身のケースでは、語学や哲学では生家での早期教育のおかげで少女のころから男子と同等の教育を受けたが、科学や数学についてはそうはいかなかった。デュ・シャトレが本当の科学の教師といえるモーペルテュイに会ったのは27歳の時だ。ここから代数学を学んで、最後には『プリンキピア』を翻訳し、注釈をつけるまでに至ったのだから、その才能と努力は並々ならぬものがある。しかし同時代の男性学者と比べると、その学問の開始は明らかに遅い。ところが皮肉なことに、自分の本が「翻訳される」栄誉を得たのは、マリー・ラヴワジエではなく、デュ・シャトレである⁵¹。これを単に才能の

⁴⁸Du Châtelet, "La fable," *op.cit.*, p.131.

⁴⁹Paula Findlen, "Translating the New Science," *op.cit.*, pp.176-184, 193-203.

⁵⁰Du Châtelet, "La fable," *op.cit.*, p.136.

⁵¹デュ・シャトレは『プリンキピア』の翻訳者でもあるが、同時に『物理学教程』 (*Institution de physique*, Paris, Prault, 1740) の著者でもある。この本はイタリア語とドイツ語に翻訳された。Madama la Marchesa du Chastellet, *Institutioni di fisica*, Venezia, Giambatista Pasqualli, 1743;

問題と片付けていいのだろうか。

結局のところ、マリー・ラヴワジエへの英才教育もまた、社会におけるジェンダー・バイアスの影響を逃れることはできなかつたのである。勉学のスタートが早いことは、科学研究者になるには有利ではあっても、それだけでは十分ではない。最初の時点で教師が生徒より知識が多いのは当たり前だが、たとえばアントワーヌ・ラヴワジエ少年のような優秀な生徒なら、そのうちに「自分もまた先生のようになれる」あるいは「先生を抜ける」と自己イメージすることができるようになる。というも、少年にはそう思えるだけの社会的条件がそろっているからだ。彼は大学教授やアカデミー会員になる将来の自分を思い浮かべることができる。しかもそれは誰からも賞賛される未来である。

ところが若妻マリー・ラヴワジエに、科学についてどんな具体的将来が思い浮かべられたであろうか。「夫より抜きんでる将来」など考えられないだろう。それは「才能の問題」である以上に、「立場の問題」である。もしそんなことになったら、ラヴワジエはこの妻を同じように遇したであろうか。もし彼女が新しい化学理論を打ち立てようとしたら、たとえば重さがないという理由で、ラヴワジエ理論の要でもあったカロリックを元素から外すことを提案したら、夫がそれを認めただろうか。そして仲間たちは彼女を賞賛したであろうか。

こう考えると、マリー・ラヴワジエに与えられた英才教育には、最初からある「限界」が設定されていたとも言える。それは夫の科学理論を理解し、その発展を助け、それを世間に伝播するための知識や技術を身につけるに十分な「程度」の能力であり、決してこれを超えてその理論を批判したり、新しい理論を打ち立てる為の能力を培う教育ではない⁵²。この「限界」は誰も意識したことでなかったが、彼女は己のおかれた中途半端な立場に悩み、文芸共和国からの賞賛を喜びながらも、自尊心の欠如に苛まれていたのである。

こうして彼女の中でアントワーヌ・ラヴワジエの功績はますます輝かしいものとなり、ソシユールに書いているように「ついてゆくのがむずかしい」程の早い進歩をもたらしているものとなる。彼女は多分人生の最後まで、科学における独立心というものを持てなかつたに違いない。そしてこの独立心や自尊心の欠如、あるいは「自分はそこには到達できない」という前提で抱いている天才への尊敬こそが、皮肉なことだが彼女の翻訳のレベルをより高いものにしたこともまた事実である。「天才の妻」にふさわしい存在という規範は、マリー・

Frau Marquisinn von Chastellet, *Naturlehre*, Halle & Leipzig, In der Rengerischen Buchhandlung, 1743.

⁵²この「限界」はたとえば、ラヴワジエが息子に英才教育をほどこしたという仮定と、妻へのそれを比較してみれば、周囲がその二人の将来に期待しているものの差はあきらかであろう。

ラヴワジエの誇りであると同時に、強迫観念でもあったのである⁵³。

2-4. エリザベート・モンベイヤール：地方アカデミーの陰で

エリザベート・モンベイヤールは、典型的な「陰の存在」である、本研究に登場する他の女性たちと違い、ほとんど何の資料も残っていない。肖像画もないし、印刷された科学の本も論文もない。そういう女性の何が重要なのか。じつはこの「不在性」こそが、それまでの歴史の中での女性のあり方そのものなのである。つまり彼女のような行動様式こそが、この時代の女性知識人としてはよくあるケースであり、同時に、「女性による科学活動への参加の見本」として、男性たちから理想化されたケースなのである⁵⁴。

エリザベートはディジョンに近い地方都市、スミュールで、その地方の行政官の娘として生を受ける。少女時代については何もわかっていない。これもまた、女性の歴史資料の不在という典型的なケースである。ただ、他の兄弟姉妹の行く末を考えると、当時の有産階級の令嬢として、有利な結婚を成立させるのに必要な教育が施されたものと考えられる。ただ、結婚後に夫の科学研究に大きく貢献したと称えられていることから、すでに生家で「おけいごと」を超えるレベルの教育が与えられたのではないかと考えられるが、仔細は不明である。

これも理由は不明だが、エリザベートは1756年に、当時としては晩婚の29歳で、同じ身分の男性である、ゲノー・ド・モンベイヤール (Philibert Guéneau de Montbeillard, 1720-1785) と結婚する。ゲノーは有能な博物学者であり、これ以降、妻は夫の研究協力者として、30年以上にわたって夫を支え続けることとなる。

ゲノーの名が科学史に残っているのは、この時代の大博物学者ビュフォン (George-Louis Leclerc, comte de Buffon, 1707-1788) に負うところが大きい。『博物誌』により一世を風靡した大博物学者にして、パリ科学アカデミー会員、さらには故郷のディジョン・アカデミーの立役者の一人であったビュフォン伯爵には、パリにも地方にも多数の共同研究者がいた。ゲノーはその一人だったのである。ゲノーは『博物誌』の中でも『鳥類の博物誌』に大いに貢献し、さらにはビュフォンから『昆虫の博物誌』を完全に任せられるに至ったのだが、その死によって、これは完成しなかった。

⁵³ラヴワジエがどのくらい有名な学者であったかは、彼が属していたアカデミーの多さからも明らかである。巻末資料5参照。

⁵⁴エリザベート・モンベイヤール については Patrice Bret, “Montbeillard (Élisabeth-Béigne Potot de Montbeillard, épouse Guéneau de -),” *Dictionnaire des femmes des Lumières*, Paris, Honoré Champion, à paraître 参照。

当然ゲノーはディジョン・アカデミーの会員である。また、ビュフォンの結婚式での証人を務めたほどに、私的な部分でもビュフォンと近い関係にあった。じっさい、ビュフォンはしばしばゲノーの館に滞在して夫妻に歓迎されていたし、逆にモンベイヤール夫妻がビュフォン邸に滞在することもあった。その他、ゲノーについては、時代に先駆けて自分の息子に種痘を施したという記録も残っており、自身の博物学研究と、私的な生活とを結びつけて考えていた人物であることがわかる。

ディジョン・アカデミーは、文学・哲学史では、ディドロの勧めでルソーが『学問芸術論』を著わし、見事アカデミーの懸賞に入選したという話で有名であることからわかるように、科学に特化していたアカデミーではない。しかしここは、先に登場したラヴワジエの同僚ギトン・ド・モルヴォーも活発に活動していたことでも有名で、科学の分野でも当時の文芸共和国に一目置かれていた存在だった。そしてエリザベート・モンベイヤール夫人は、次に述べるピカルデ夫人とともに、ディジョン・アカデミーでは知らぬものなき存在だったと当時の会員たちが書き残しているのである。

もちろんエリザベートは女性なので会員ではない。しかし夫と共にアカデミーの集まりに参加し、夫に協力して昆虫や鳥を観察してその記録を取り、夫が苦手な外国語を補うべく、外国語で書かれた博物学文献を夫のために翻訳した。ビュフォンの子孫であるナダールが残した記録によると、彼女はラテン語、ギリシャ語、英語、ドイツ語などの素養があり、スミュールやディジョンの知的サークルで、その地方の知識人たちから絶賛されていたという。ゲノーの翻訳や論文ということになっているものでも、じつはかなりの部分、エリザベートの手が入っているのではないかと思われるものが存在する。

じっさい、ゲノーはビュフォンと共にパリをはじめとしてあちこちを旅行する機会が多かった。その間、自邸で飼っている動物や昆虫の世話をし、その観察記録をとっていたのは誰か。これこそがエリザベートの仕事だった。彼女は印刷されたものこそ残さなかったが、翻訳に加えて、こうした実践的な面からも、当時の先端的な博物学研究に加わっていたのである。ビュフォン自身も、彼女を「羊さん」と読んでかわいがり、その科学的知識を絶賛していた。また、自分の息子を長期間彼女にあずけることもあったほどに、あらゆる面でこの女性を信頼していた。

じつはゲノーは一度、ディジョン・アカデミーに対して、自分の論文に「妻によって観察されたホタル」という文章を入れたいと、申し出たことがある。ところがこのアカデミーは、その会員たちが常に言葉による絶賛を惜しまなかったこの女性の貢献を、印刷された文章として残すことを拒絶したのである。夫の願いは聞き入れられなかった。出版された論文に記載されているのは、ゲノ

一の名のみである。

しかしこの観察がエリザベートのものであることは、その記述より明らかだ。というのも、ここでホタルの飼育や観察に使用された容器は、女性用の白粉を入れる容器だったのだから。もし観察者が男性だったら、別の容器を使用しただろう。モンベイヤール一族には、他にもゲノーのために、動植物の観察記録を残した女性がいるらしいのだが、これも仔細がわかっていない。ゲノーの覚書に「親戚の女性が飼育を手伝ってくれた」という趣旨の記述が記されているのみである。

けっきょく、エリザベートに関して残っているわずかな記録は、具体的な科学に関するものというより、彼女の知性とそのふるまいを賛美するものばかりである。そしてジェンダー的に見るならば、この賛美こそが問題なのだ。というのも、そこで強調されているのは実は彼女の知性そのものではない。賛美の対象はなによりも、彼女がその知性を使って夫を助け、しかもそのことをひけらかさず、あくまで「女の美德」を守り、陰の立場に徹していたことに対してなのである。彼女は上京してパリで活躍することもなく、その交友関係も主に居住区在住の学者にとどまっており、地方アカデミーの狭いサークルから出ることはない。ゲノー自身が自分の妻に対して、彼女は「妻の務め」を果たすことにのみ、己の情熱を注いでいたという趣旨のことを書き残している。

夫の死後、エリザベートは惜しげもなく、『昆虫の博物誌』に関する彼の遺構や、そのための資料をすべて後任者のラ・ヴァレンヌにわたしたという。この態度もまた、周囲の男性たちから絶賛された。それは夫の遺稿集の編集と序文を、なんとしてでも自分の思い通りの形で出版しようとした、ラヴワジエ未亡人の態度とは正反対のものである。マリー・ラヴワジエはこのとき、かつての夫の同僚たちと対立してまで自分の主張を貫き通すのだが、このような態度は当然、周囲の男たちの反感を買うことになった⁵⁵。エリザベート・モンベイヤールはみごとに「女性の務め」を果たした存在として記録され、彼女に関する歴史史料はわずかではあるものの、賞賛だけが残されている。

エリザベート・モンベイヤールが実際にはどのような人物であり、博物学に何を求めていたのかはわからない。彼女に関する記録は、すべて当時あるいは後世の「男性たち」の手になるものであり、あまりにも具体的情報に欠け、しかもそこには「彼らの」女性にはかくあってほしいという願望ばかりが色濃く刻印されているからだ。ただ、はっきりしていることは、「モンベイヤール夫人のふるまい」とされているものは、当時の知的な女性が、周囲からのジェンダー・バッシングを「一切」受けることなく、本格的な科学にかかわることので

⁵⁵この間の仔細については、川島慶子『エミリー・デュ・シャトレとマリー・ラヴワジエ』, *op.cit.*, pp.202-207 を参照。

きる限界を示しているということである。デュ・シャトレが怒りと共に書き残しているように、このささやかな枠から出て、少しでも光に当たろうとするとき、その女性は冷やかな世間の目にさらされることになるのである。

その生涯の最後まで、博物学への情熱を忘れなかったモンペイヤール未亡人が、フランス革命のさ中の1798年に故郷でひっそりと死んだ時、フランスでは一人の英雄がエジプトへの大遠征をなしとげようとしていた。この英雄、ナポレオン・ボナパルトが、軍人のみならず、一大学術調査隊を率いて行ったこの大遠征こそが、象形文字の解読を可能にしたロゼッタ・ストーンや新しい動植物の発見をもたらし、フランスを一大博物学・考古学ブームへと導いたきっかけとなったのである。

2-5. クロディーヌ・ピカルデ：地方アカデミーからパリへ

クロディーヌ・ピカルデに関しても残っている史料がきわめて少ないので、その生涯の詳しいことはよくわからないのだが、反対に彼女が翻訳した科学論文はたくさん出版され、残されている。なんとこの女性は英語、スウェーデン語、ドイツ語、イタリア語、デンマーク語を理解し、これらの言葉で書かれた重要な科学論文を多数翻訳して、印刷媒体に載せたのである。つまり「印刷媒体」という意味では、彼女はラヴワジエ夫人以上に、新化学啓蒙にたずさわっていたのである⁵⁶。

もちろんここでもラヴワジエ夫人と同様の構図が見られる。つまりピカルデ夫人がこのような科学啓蒙活動にたずさわることができたのは、彼女が住んでいたディジョンの有力なアカデミー会員であったギトン・ド・モルヴォーとの交際ゆえである。彼の恋人になったときから、彼女の本格的な科学活動が始まるのである。

クロディーヌはその生涯のほとんどをフランスの地方都市ディジョンですごした。彼女は1735年にこの町のブルジョア家庭に生まれ、20歳で8歳年上のクロード・ピカルデと結婚してピカルデ夫人となる。残っている記録を見る限り、家庭で英才教育を受けたということはなさそうである。

ディジョンの社交界は小さい世界であり、クロディーヌ・ピカルデの美しさと才気はたちまち町の知識人の知るところとなった。彼女のサロンには知識人が集まり、『系統的百科全書』の記事を用意していたディジョンの名士ギトンは、

⁵⁶ピカルデ夫人については Jean-Pierre Poirier, “Claudine Picardet,” *Histoire des femmes de science en France*, Paris, Pygmalion, 2002: 273-280; Patrice Bret, “Il ne forment tous qu’une même république,” *Dix-huitième siècle*, 40, 2008: 263-279; “Les promenades littéraires de Madame Picardet. La traduction comme pratique sociale de la science au XVIIIe siècle,” dans Pascal Duris ed., *Traduire la science. Hier et Aujourd’hui*, Pessac, Maison des Sciences de l’Homme d’Aquitaine, 2008: 125-152 を参照。

彼女の学識を見込んで自分の仕事を手伝ってもらうことになる。1780年代のことである。すでにピカルデは30歳台の後半であった。だから化学革命に寄与したという立場は類似しているが、ピカルデが本格的に科学に関与しだしたのは人生の半ばを過ぎてからであり、その点で若干14歳で科学の世界に足を踏み入れたマリー・ラヴワジエとは大きな差がある。言い換えればピカルデは自身の人格が確立してから、主体的に学者を恋人に選び、その恋人の仕事を手伝うことを通して、ディジョンの学者サークルに深く関与したと言ってよい。

多分それ以前に初心者向けの本や公開の授業などで、ある程度の科学的知識は得ていたのだろうが、化学革命を理解するに足る知識を得たのはギトンの恋人となって、彼および彼のサークルの学者たちと真剣な科学談義をするようになってからである。じつに本格的な語学の習得もこの時代から始まるのである。

つまりピカルデは、語学に関しても少女時代から語学を鍛えられたエミリー・デュ・シャトレやマリー・ラヴワジエとは全然違う環境にあったのだ。そう考えると、この年齢から語学をはじめて何ヶ国語をも解し、みな賞賛に値するような翻訳をこなしたピカルデの語学の才能がどれほどのものだったかがよくわかる。

スウェーデン語を解したピカルデは、ディジョンだけでなく、パリのラヴワジエたちにとってもありがたい存在だった。というのも、冶金学や博物学、薬学の伝統が強いスウェーデンは優秀な化学者を多数排出し、彼らが自国語で書いた論文の内容を知るとはフランスの化学者にとって、必要ではあるが、難しいことだったからである。ギトンとともに化学研究にたずさわり、語学の才能を兼ね備えたピカルデは、その点化学論文の翻訳者としては理想的だった。

ピカルデの主要な業績は、なんといってもスウェーデンの著名な化学者シェーレ (Carl Wilhelm Scheele, 1742-1786) の『化学論集』を仏訳したことである。これにより彼女はヨーロッパの学者たちから高い評判を勝ち取った。その他、ディジョンの学者たちが発行している『物理学雑誌』や、ラヴワジエグループの雑誌である『化学年報』にも多数の外国語論文を仏訳した。訳者名に関しては、当時の習慣に習って大抵は匿名やイニシャルだけであったが（有名な学者が翻訳するときだけ、フルネームを載せるのが通常であった）、ディジョンだけでなく、パリの学者グループやその友人の外国人学者たちも翻訳者が彼女であることは知っており、ピカルデ夫人は先のモンベイヤール夫人と共に、ディジョンの知識人社会の重要人物として、ヨーロッパの化学者たちから尊敬されていたのである。しかも時にはフルネームで翻訳者名を出すこともあり、このことからクロディーヌ・ピカルデはマリー・ラヴワジエ以上に、プロの翻訳家としての意識をもって自分の仕事をこなしていたことは明らかである。

ピカルデの仕事が、プロ意識をもったものであることは、この、フルネーム印

刷という事実だけでなく、その翻訳量や種類からもあきらかで、実に彼女はページ数に直せば何百ページという膨大な翻訳をこなし、出版している。さらに、本はもちろん、翻訳を載せた科学雑誌の種類も、その分野も多岐をきわめている。彼女は化学論文だけでなく、天文学や鉱物学の論文の翻訳もこなした。

じっさい、ラヴワジエたちの雑誌である『化学年報』は、当初からかなりの部分ピカルデの語学力をあてにしていた。フランス革命が始まってディジョン・アカデミーの男性知識人たちが政治に夢中になり、科学活動がおろそかになったときにも、ひとり翻訳にはげみ、その活動がとぎれることはなかった。なんと彼女は60歳代になっても科学論文の翻訳を続けており、この点も、革命前は仲の良い女友達だったと言われているマリー・ラヴワジエとの大きな違いである。これは年齢と言うよりラヴワジエの死という要因が大きいのだが、マリー・ラヴワジエは未亡人になった30代後半からは、それまでの仕事に匹敵するような科学の作品を残してはいない。

しかもピカルデの科学的活動は翻訳だけではない。彼女はラヴワジエが考案し、ディジョンに設置した気圧計を使って毎日気圧を測定し、そのデータをパリに送り続けたのである。これはもちろん当初彼女に割り当てられる予定の仕事ではなかったのだが、ラヴワジエはディジョンのどの男性より、クロディーヌ・ピカルデの腕のほうが信用できるとして、彼女にその仕事をまかせたのである。

精密な観測を何よりも重視したラヴワジエがこのような決断を下したということは、ピカルデの実験家としての才能もまた優れたものであったことの証拠であり、彼女もマリー・ラヴワジエ同様、理論、実践、社交と多岐にわたる貢献で化学革命に参加したのである。

したがって、ラヴワジエのみならずディジョンを訪れた知識人たちは皆、ピカルデ夫人の才色兼備ぶりを絶賛した。ただし、それは彼らがラヴワジエ夫人を絶賛するとき同様、彼女が恋人である有名な男性学者、ギトンの科学活動を支援することに自分の才能を活用していたからである。彼らの賞賛の多くから感じられるものは、「自分にもこんな女性の協力者がいたならば」という、むしろ“才色兼備で裕福な女性を忠実な協力者に持っている”ギトンに対する羨望であり、ひとりの人間としてのクロディーヌ・ピカルデそのものを考慮した評ではない。

ピカルデ自身は科学に何を求めていたのだろうか。彼女自身の証言が残っていないので詳しいことはわからない。ただ、その驚くべき量の翻訳（しかも当時の習慣をやぶって、有名人でもないのにフルネームで翻訳者名を出したこともあるという事実）や、長きにわたる正確な気圧の観測記録という事実を考慮すると、彼女がここに「内助の功」以上のものを求めていたことは確実である。彼女もまた、マリー・ラヴワジエ同様、容姿の美しさや人柄以上のもので自分

自身を評価してほしいと願い、科学の内に自分が打ち込めるものを見出したのであろう。

ピカルデ夫人は夫の死後、63歳でギトンと再婚し、ギトン・ド・モルヴォー夫人としてパリに移り住んだ。帝政下にあっても、哲学的な晩餐会を主催したという記録が残っている。この「ギトンへの忠実さ」と「ピカルデ氏の無名さ」のために、ピカルデ夫人には、夫の死後十年余りで成り上がりの元アメリカ人、であるバヴァリアのラムフォード伯爵と再婚したラヴワジエ・ド・ラムフォード夫人に対するような揶揄の文章は残っていない。しかしこの順序がもし逆だったら、つまり有名なギトン・ド・モルヴォーの妻だった女性が、無名なピカルデと再婚したら、その女性が何と言われるかはあきらかであり、同時代人によるピカルデ夫人への最後まで賞賛と、ラヴワジエ夫人への再婚後からの批判は、同じコインの表と裏の現象に過ぎないことを忘れてはならないのである。

たとえばピカルデ夫人を、この時代の大家知識人の伴侶として長年連れ添った後に、その男性知識人の死後、年下の無名の男性と結婚した二人の女性（ヴォルテールの晩年の恋人だったドゥニ夫人、長期にわたってルソーの内縁の妻であり、生まれた子ども全部を、ルソーの命令で悪辣な環境の孤児院に捨てさせられたテレーズ・ルヴァスール）と比較するとその差は明らかである。ドゥニ夫人やテレーズの再婚は、当時の男性知識人や後世の男性研究者たちによって、長きにわたって酷評され続けた。こうしたことは、典型的なジェンダーの非対称性の問題である⁵⁷。

洋の東西も時代も問わない、社会のこのようなジェンダー・バイアスは、その後も科学史をはじめとする歴史、あるいは文学研究の中に生き続けた。研究者たちは実に200年にわたり、こうした女性知識人が、その傍らの有能な男を支えるように見えたときにだけ彼女を賞賛し、そうでないときには彼女を批判する、あるいは哀れむといった態度を崩そうとはしなかった。科学思想に関しては、彼女たちが一貫して化学革命を支持していたにもかかわらず、である。こ

⁵⁷ ジェンダーの非対称性は、この話の性を逆にしたときにより明らかになる。つまり、有名女性と結婚した男性が、妻の死後に若い女性と再婚したら、その男性は同情されるからだ。

たとえば日本では、画家岡本太郎の父である岡本一平が、有名人であった小説家の妻、岡本かの子の死後、女中だった若い女性と再婚している。こうした再婚は、「ああいう個性的な女性と長年つれそったあとは疲れるだろうから、この再婚は当然だろう」として、その男性はむしろ、男性知識人たちの共感を呼ぶ。しかし、その同じ男性知識人たちは決して、ドゥニ夫人やテレーズに対して「ヴォルテールやルソーのような個性的な人物と長年暮らした後は疲れるだろうから、彼女たちの再婚は当然だろう」とは言わず、彼女たちの「不実」をなじり、同時にその「夫」たちの残した資産が、無名の年若い男性に使用されることに激しい嫌悪を示すのである。

うしてみると、女性知識人の生涯とその評価の歴史は、彼女たちの生きた、そして我々が生きる社会の矛盾を映す鏡である。それは「科学は誰のものなのか」「科学に参加する権利は本当の意味で万人に等しく与えられているのか」という問いを常に我々に突きつけて続けているのである。

2-6. マリー・ダルコンヴィル—美の喪失はジェンダー問題か？

マリー・ダルコンヴィルは不思議な女性である。彼女はこの時代の科学史に登場する他のどの女性とも似ていない。その私生活は謎に包まれている。にもかかわらず、科学以外にも小説、道徳、歴史といった分野において、夥しい数の翻訳と著作を残している。多分ここでとりあげたどの女性よりも、「業績」の数や種類の多い女性である⁵⁸。この数に匹敵できるのは、分野は違うが、スタール夫人 (Germaine Necker, baronne de Staël-Holstein, 1766-1817) やジャンリス夫人 (Stéphanie Félicité du Crest de Saint-Aubin, comtesse de Genlis, 1746-1830) といった、文学や哲学、教育といった人文科学および社会科学の分野で、著述家、あるいは評論家として活躍した女性たちだけではないだろうか。しかしこの2人はダルコンヴィルとちがいで、私生活についてもかなりの資料が残っており、その華やかな恋愛遍歴や、フランス革命をはさんだ劇的な人生は、著作以上に良く知られている。

そう考えると、「業績によってのみ」その名が残っているマリー・ダルコンヴィルは、きわめて珍しい女性知識人である。いったい彼女はどのようにしてそれだけの数の作品を出版するに至ったのだろうか⁵⁹。

マリー・ジュヌヴィエーヴ・シャルロット・ダルリュ、後のダルコンヴィル夫人は、裕福な徴税請負人の娘として1720年にパリに生まれた。いわゆる法服貴族に属する家柄である。少女は4歳の時に母を失い、主に自宅で女性家庭教師による教育を受けた。女子修道院付属学校には行っていないと考えられているが、はっきりした証拠があるわけではない。受けた教育は大したものではなく、やはり未来の貴婦人をめざすもので、レベルは低いと考えて間違いはない。ただしマリーの家庭教師は道徳を重んじる女性であり、また「読書好き」の素質

⁵⁸巻末資料3 参照。

⁵⁹マリー・ダルコンヴィルについては、Jean-Pierre Poirier, “Marie Geneviève Charlotte Thiroux d’Arconville, née d’Artus (1720-1805), Femme de lettres et chimiste,” *Histoire des femmes de science en France*, op.cit.: 265-272 および、Brigitte Van Tiggelen, “L’Essai sur l’histoire de la putréfaction de Mme d’Arconville,” in *Un esprit des Lumières. Mme d’Arconville, femme de lettres et femme de sciences*, éd. par M.L. Girou-Swidorski, à paraître; “Entre anonymat et traduction, la carrière d’une femme en chimie : Mme d’Arconville,” in *Madame d’Arconville, femme de lettres, femmes de sciences et traductrice au siècle des Lumières*,” éd. par P. et B. Van Tiggelen, à paraître 参照。

を見せていた教え子の少女を励ましたようで、マリーは幼少期からキリスト者としての道徳的な行動を尊び、まじめな読書を欠かさなかった。また自ら小説や詩を書くといった、文学的傾向を持っていた。

道徳についてマリーが好んだのは、いわゆるジャンセニスト的な行動規範である。じっさいにこの宗派に属することはなかったが、その生涯の最後まで、この宗派の教えを尊重していた。こんな少女は14歳で親の決めた結婚をし、高等法院の法曹家であるティルー・ダルコンヴィルの妻となる。そして20歳ですでに三人の男の子の母となり、ダルコンヴィル家の女主人としての務めは果たし終えた。子育ては上流階級の女性の義務ではない。これ以降、夫妻の関係は当時の通常の上流階級の夫婦の常として、きわめて希薄なものとなる。ダルコンヴィル夫人は社交界の「普通の」女性として、サロンを開き、オペラに行き、小説を読む、といった日々を送っていた。

ここに転機が訪れる。天然痘に感染したのである。22歳の時だった。一命はとりとめたものの、容姿はもとにはもどらなかった。生死の境をさまよったマリー・ダルコンヴィルは、この後は派手な社交生活を捨て、もともと有していたジャンセニスト的な傾向を深めてゆくことになる。ここでそれまで趣味として行っていた詩作や小説に加え、新しい興味関心が彼女を捉える。科学、中でも博物学と化学が彼女の興味を引いたのである。

くりかえしになるが、当時女性のための高等教育機関は存在しない。しかし王立植物園の公開講座といった公衆への科学教育のための講義は、一般に解放されていた。ダルコンヴィルはこうした「女性も受講できる」講義への出席や、王立図書館での読書を通して、当時の第一線の科学研究に接近してゆく。ここで最も重要な出会いは、植物園の講義を担当していた著名な、化学者マケール（Pierre Joseph Macquer, 1718-1784）との出会いである。

マケールはラヴワジエなどの世代から見れば、大御所の化学者であり、パリ科学アカデミーの有力者でもあった。ここからダルコンヴィルの行動範囲は広がってゆく。彼女は当時のアカデミー会員、あるいはその卵であったビュフォン、フルクロワ、ジュシュー（Bernard de Jussieu, 1699-1777）、ヴァルモン・ド・ボマール（Valmont de Bomard, n.d.）、ルーエル（Guillaume François Rouelle, 1703-1770）といった学者達と知己になり、やはり病気の後に（多分）独学で取得した英語、イタリア語の知識を彼らに買われて、科学翻訳をするように進められる。

ダルコンヴィルが行った主要な翻訳は、当時イギリスで有名な科学啓蒙家であったピーター・ショウ（Peter Shaw, 1694-1763）のベストセラー『化学講義』の仏訳と、スコットランドの解剖学者アレキサンダー・ムルノ（Alexander Murno, 1697-1767）の『骨学論考』である。これはラヴワジエ夫人やピカルデ夫人によ

る翻訳と違い、リアルタイムで最先端の研究論文や本の翻訳ではない。すでに何十年かたった本の翻訳である。しかしデュ・シャトレの『プリンキピア』仏訳とも違う。それほどの「偉大な」古典でもないからだ。この点でもダルコンヴィルの選択は、他の女性翻訳者のそれとは違い、異質な業績である。

しかもこの翻訳は単なる正確な翻訳以上のものだった。ここでダルコンヴィルは、夫の領地であったクローヌの館に作った実験室や、植物園で行った自身の実験の成果を生かし、著者の間違いを細かく訂正するという作業をおこなっている。つまりこれは、「翻訳者注解」という形で最新の知識や、自分自身の科学理論を追加した、同時代人の役に立つ翻訳であった。特に『骨学論考』の方では、読者の正しい理解を促すために、オリジナルには存在しない、人体の骨格の挿絵を追加するという作業まで行っている。彼女はこのために画家を雇って絵について指示をし、印刷用の紙まで自ら選ぶという徹底ぶりだった。つまり両者ともに、オリジナルより翻訳の方がわかりやすいし、正確かつ最新の知識が得られる作品になっているのである。しかしこれだけではおわらない。ダルコンヴィルの仕事にはこの先がある。なんと彼女は自分自身の著作、それもほぼ600ページにわたる科学の本を出版したのである。

『腐敗について』と題されたこの本は1766年に出版され、現在の我々の目から見ても、ラヴワジエ以前の化学の著作としては、きわめて「近代的」な特徴を備えている。ダルコンヴィルは腐敗に関する実験を徹底的に行い、腐敗する物体そのものだけでなく、実験を行った時の諸条件（天気、気圧、温度など）を克明に記述している。しかも、現在我々が酸素と呼ぶ気体の性質がいまだ解明されていないこの時期に、彼女は「腐敗を避けるには、大気空気を避けよ」という、正しい結論を導きだしているのである。

これは当時のイギリス化学界の大御所、デヴィッド・マクブライド（David McBride, 1726-1778）の結論、「固定空気（二酸化炭素）を避けよ」という結論とまったく異なるものである。プリングルは最近発見されたこの気体が、物体から喪失されることこそが腐敗の原因だと考えたのである。たしかに腐敗物から二酸化炭素が発生することは事実だが、マクブライドはたとえば、すでに腐ってしまった肉に二酸化炭素を注入することができれば、その肉がもとの状態に戻るとまで明言しているのである。もちろんこんなことはありえない。こうした点から考えても、ダルコンヴィルの観察は、当時の第一線の学者達と比較してなんら遜色のないものである。

ただしこれらの作品には、ジェンダーの視点がなければ決して理解できない奇妙な現象が存在する。ダルコンヴィル夫人は決して自分の名前を出さない。なんと『骨学論考』は当時実在した男性学者シュー（J.Jos Sue, n.d.）の名で、『化学講義』はまったくの匿名で、そして『腐敗について』は、「ピーター・ショ

ウの『化学講義』の翻訳者」という文章のみを印刷させているのである。もちろん、マリー・ラヴワジエの翻訳同様、研究者仲間もみな、その翻訳者の本当の名を知っていた。もっとも、エミリー・デュ・シャトレやマリー・ラヴワジエの仲間たちとは違い、ダルコンヴィルの友人たちは、自分の作品の中で彼女の名を明記しなかった。印刷された状態を尊重したのか、あるいは別の意図があったのかは不明だが、彼ら男性科学研究者は常に、彼女の著作や主張を引用するときは、その著者を「『化学講義』の翻訳者」と表現したのである。

しかも腐敗理論の強調の仕方についても、ダルコンヴィルの態度はじつはあいまいであった。彼女は自らの実験観察から、先に述べた「大気空気を避けよ」という正しい結論を導き出しているにもかかわらず、マクブライドに遠慮してか、最終的にはこの処方箋を自ら否定している。また、他の科学者の誤った見解（と彼女が判断したもの）を否定する際にも、そのやりかたはきわめて控え目で、それはたとえばラヴワジエグループがカーワンのフロギストン理論を徹底的に批判し、カーワンもまたそれに激しく応酬したのとは対照的である。要するにダルコンヴィルの自己主張の方法は、非常に「女らしい」のである。

ダルコンヴィルは何についても、こうした「控え目」で、対象から「距離を置いた」態度を取り続けた。先にも述べたが、彼女自身はジャンセニスト的な禁欲さを支持していたが、仲間の学者やフィロゾーフたちの自由思想を批判したり、あるいは彼らの優れた点を無視するようなことは決してしなかった。たとえば、ルソーの生き方は否定したが、彼の思想の重要性は十分理解し、それに共感していたのである。

ここで、ジェンダーという観点から見て重要な問題は、こうした、思索的かつ非常に大人びた態度を、周囲の男性や後世の研究者が「天然痘による美の喪失」のせいだと見なしたことである。ダルコンヴィルの学問への情熱もまた、美と引き換えに手に入れたものと判断された。これは裏を返せば、「美しい女性には学問など必要ない」と言うのと同じことである。たしかにダルコンヴィルの生涯は、一見この説が正しいのでは、という判断材料になりそうに見える。しかし彼女の残した作品を仔細に検討してみれば、これは誤った考え方だということがよくわかるのである。

じつはダルコンヴィルが第一線の科学研究をした時期は限られていた。科学に関する「出版」は1766年の『腐敗について』を持って終了している。それというのも、理由は不明だが、ダルコンヴィル家は1770年代に、クローヌにあった田舎の領地を手放し、マリーは自然に恵まれた城の中の実験室で研究することができなくなったからである。しかしその後も彼女はマケールらの研究に協力していたらしく、彼らの私信の中にそのことが指摘されている。しかしダルコンヴィルはこの間に身に付けた「科学的方法論」を、他人の研究にだけ役立て

たわけではない。彼女は今度は、それを別の分野—歴史—に応用したのである。ダルコンヴィルは化学実験で見せたのと同じ正確さと緻密さで歴史史料を分析し、多くの歴史書をものした。そしてこの活動にマケールは援助を惜しまず、彼女の歴史研究に役に立ちそうなあらゆる知人をこの女性に紹介したのである。

確かにダルコンヴィルのこうした「公的な」知的活動は「美の喪失」の後である。しかしはじめに見たように、ダルコンヴィルは若いころから、出版こそしなかったが、多くの著述を試みていたのである。彼女の少女時代の興味は文学と道徳で、これらのテーマに関しては幼少のころから一貫して途切れることなく執筆活動を続けていた。ただ、科学に手を染め、マケールらの知識人と知己になってから、「出版」という方法をとっただけである。つまり、「公的」になったのは、そのつてを持っていた男性科学研究者と知己になったからであり、天然痘と直接の関係はない。

しかも科学と関係のない、文学や道徳でも、ダルコンヴィルはこれ以降、作品を公的に発表しだしたのである。彼女は英語からさまざまな小説や道徳論を翻訳出版し、自らもいくつもの著作を発表した。じつに80歳代になっても執筆活動は続き、晩年に目が見えなくなってからは、口述筆記をしてまでも、これをやめることはなかった。これら最晩年の著作は出版されることはなかったが、草稿として現存しており、ダルコンヴィルがその最後まで知的活動を継続していたことのある証拠となっている。

執筆活動のこうした持続性に加えて、これら膨大な著作の内容には、その初期から最後に至るまで強い一貫性があり、「軽薄な社交夫人が、天然痘で醜くなってから突然信心深い勉強家になった」などという説は完全に間違っている。ダルコンヴィルは少女のころから沈黙考する傾向があり、自らも晩年の回想録でそれについて述べているが、22歳で死と向かい合ったというその経験が、彼女をより深い思索家にし、神の創造した自然の不思議を注意深く観察する科学研究者にしたのである。

ダルコンヴィルは科学に何を望んでいたのだろうか。彼女は当時のジェンダー問題を意識していたのだろうか。じつはダルコンヴィルは「女性について」という題のエッセイを残しており、そこで当時の女性知識人の置かれた矛盾した立場についてははっきりと語っている。それはデュ・シャトレの『蜂の寓話』につけられた序文同様、この時代の女性知識人が直面した問題を鋭くとらえている作品であり、この問題についての、女性の側からの貴重な証言である。

「女性は学識とたしなみのどちらを表明すべきなのか。」ダルコンヴィルのこの問いは重要な問題を含んでいる。なぜなら、男性知識人がこのふたつのもの間で悩むことなど、決してありえないからである。彼女は続ける「もし女性の著書がつまらないなら、それは批判される。もしそれが素晴らしいなら、

それは無視される。いずれにしても、残るものは女性著者に対するひやかしだけなのだ」。これこそがダルコンヴィルをして匿名、あるいは他の男性名で著作や翻訳を出版した理由である。

ダルコンヴィル「夫人」という、自分の本名を出したが最後、その性ゆえにそれらの作品は正しい評価を受けることなく、闇に葬られてしまうだろう。ダルコンヴィルはこのことががまんできなかつたのだろう。彼女は著者の「属性」ではなく、「内容」で判断してほしかった。「匿名」や「ゴーストライター」はそのための彼女なりの作戦だったのである⁶⁰。

ダルコンヴィルはデュ・シャトレとは違い、決して表には出てこなかつた。自らを「観察者」にふさわしい立場に置き、当時の社会状況を冷静に見極め、自分の科学作品が最も正当に評価される方法を選んだのである。マケールやビュフォンといった有名な学者達との付き合いはあつたが、あくまで親しい友人としての付き合いに距離を保ち、彼らの忠告は重視したが、決して彼らのいいなりにはならなかつた。どんな学者の娘でも恋人でも妻でもアイドルでもないダルコンヴィルは、科学にせよ歴史にせよ、翻訳する書物や研究対象を「自分で」選び、淡々と、かつきわめて厳密にその仕事をこなした。「ピーター・ショウの翻訳者」という自己認識は、この分野では性のない存在でありたいという彼女の静かな自己主張である。

そして科学と歴史というこの二つの分野における、ダルコンヴィルの方法論の共通性は、ジェンダー的に考えても重要なテーマである。というのも、道徳や宗教、小説、教育書を書く女性はまだしも珍しくなかつたが、歴史や科学は当時完全に「男の分野」とされていたからである。彼女は「女らしい」分野の作品を書き続ける一方で、「男らしい」分野にも挑戦し続けた。そして「性のない存在」としてそこで評価されることに成功したと断言していいだろう。『腐敗について』は、当時の男性研究者たちに読まれ、引用された。先にも書いたが、彼らは彼女の名前を明記せず、「ピーター・ショウの翻訳者」として、自分たちの本や論文にその存在を書き残した⁶¹。

⁶⁰ これに関してはデュ・シャトレも同様の主張をしており、彼女は『物理学教程』を匿名出版した。しかし、彼女はダルコンヴィルと違い、普段からかなり「自分」を表に出しており、この本の著者についても、本人には不本意な事件が原因だったが、出版されて時点で、すでに著者の名前は社交界に知れ渡っていた。この間の事情については、川島慶子『エミリー・デュ・シャトレとマリー・ラヴワジエ』, *op.cit.* pp.103-110 参照。

⁶¹ こうしてみると、先のデュ・シャトレの章で述べた現象—科学アカデミー常任書記メランが、デュ・シャトレの『物理学教程』を批判すべく、この本が匿名で出版されたにもかかわらず、その著者の性を自らの批判文書で明らかにした—は、非常に意味深長である。ダルコンヴィルの現状認識と彼女の友人たちの態度を考えると、もしかしたらメランは、自分の科学理論を正当化する手段の一つとして、自分の批判者であるデュ・シャトレの性を暴露したという可能性が考えられるからだ。

こうして、作者ではなく、作品が作品そのものとして読まれることを期待したダルコンヴィルは、その望み通りに、「無視されず、必要以上に騒がれず」地道な研究者としての静かな生涯を送った。それはこの時代の女性知識人として、ジェンダー・バイアスに邪魔されずに生き残るための、ひとつの戦略の成功の証とも言えるだろう⁶²。

2-7. 結び：女性による科学翻訳

以上の分析から、ここでとりあげたような女性知識人にとって、自分の語学力と科学的知識を使って外国の科学書を翻訳するという作業の持つ意味は、当時のジェンダー規範と深く関係していることは明らかである。それはデュ・シャトレが指摘したように、「文芸共和国の交渉者」という役割を選ぶことである。そしてこの「交渉」という要素こそ、この時代を美しく飾った哲学サロンにおいて、もっとも重視された要素であり、その女主人に期待された役割であることを忘れてはならない⁶³。

マリー・ラヴワジエによる「翻訳者の緒言」での、新化学への賞賛や科学翻訳の意義およびその困難さ、翻訳者注の存在をさりげなくアピールする態度は、まさにこの当時のジェンダー規範の枠内でなされた、女性知識人によるぎりぎりの自己主張である。ここに自分の力を注ぎこむことで、彼女は単なる語句の置き換えを超えたものとしての「翻訳」を、自らの仕事ととらえていたのであろう。翻訳ではないが、ラヴワジエの絶筆である『化学論集』に、これを編集したマリー・ラヴワジエがつけた短い序文がある⁶⁴。19世紀に彼女の食客だった政治家で歴史家のギゾー (François Pierre Guillaume Guizot, 1787-1874) は、この序文を「すばらしく簡潔」で「うぬぼれのかけらもない」と絶賛している⁶⁵。しかしこの二点はまさに、「出しゃばらない」という言葉の言い換えであり、学問においては副次的存在であった、当時の女性に求められていた美点である。

彼女は何度もこの序文を書きなおしている。そこから、このテキストは、マリー・ラヴワジエが自分の生きた社会のジェンダー規範にきわめて注意を払

⁶²もちろん「性のない存在」というのは現実にはありえない。しかし少なくともダルコンヴィルのとった方法は、「性を強調しない」ものであり、雑音を避ける方法として、当時の文脈の中では有効であったと言ってよい。「ピーター・ショウの翻訳者」とだけ記載されていれば、何も知らない人間は当然その翻訳者を男性だと思う。したがって、ダルコンヴィルの科学理論は、名前を出さない男性知識人のものと解釈され、その前提での「中立な」評価を下されることになるからである。

⁶³ サロンについては、たとえば次の文献を参照。赤木昭三・赤木富美子『サロンの思想史』名古屋大学出版会、2003。Antoine Lilti, *Le monde des salons*, Paris, Fayard, 2005.

⁶⁴ 巻末資料4参照。

⁶⁵ François Guizot, *Madame de Rumford*, Paris, Clapelet, 1841, p.25.

っていたことの証拠であると言っていいたいだろう。

結論として、女性による科学翻訳を考える場合には、そこに存在する二重性に注意する必要がある。「優秀な科学翻訳者」という役割は、科学における「創造者」であることを社会によって拒まれた性が、それでも自分が何者かであることを証明するためにつかんだ一筋の藁なのだ。したがって、それがニュートンであれ、デカルト（René Descartes, 1596-1650）であれ、その説に賛成する場合は、女性たちは巨人の著作を翻訳することに熱意を燃やす。マリー・ラヴワジエのように、翻訳者が著者に反対する場合は、反対派が大物というわけである。彼女たちはひとりでは科学の中で独立した存在と見なされない。「巨人の肩に乗って」進むしか道はないのだ。したがって女性による科学翻訳では、あとで述べるイタリアの女性翻訳者達でも同様だが、「翻訳者序文」や「翻訳者注」が男性のそれよりも重要な意味を持つものとなる。それは「翻訳者自身の」見解を公的に披露する数少ない機会だからである。

たしかに、デュ・シャトレやマリー・ラヴワジエのような、語学にたけ、高い科学的知識をもつ女性たちによる科学翻訳は、文芸共和国におけるコミュニケーションの活性化に大いに貢献した。こうした翻訳によって、さまざまな言語で書かれた各国のアカデミー会員たちの論文や本が、本国語、あるいはフランス語に翻訳され、ヨーロッパ中に広まった⁶⁶。彼女たちの努力がなければ、母国語しかできない人々は外国の学者の仕事をきちんと知る機会には恵まれなかったであろう。しかしわれわれは同時に、こうした知識の伝播を可能にした要因のひとつであるジェンダー問題を忘れてはならないのである。

3. 科学アカデミー院長：エカテリーナ・ダーシコワと女帝エカテリーナ

3-1. ペテルスブルク・アカデミーとロシア帝国

ロシアは巨大ではあるが、ヨーロッパから見れば周辺に位置している国であり、18世紀のフランスなどにとっては、完全な「後進国」であった。ロシアの方もそのことを意識しており、代々の皇帝は「西ヨーロッパに追いつき、追い越せ」ということを目標に、「公用語はフランス語」といわれるほど熱心にフランスを中心に西欧の真似をしたのである。しかしこの国は、やはり当時のフランスからはその後進性が揶揄されていたプロイセンとは反対に、こと女性の政治進

⁶⁶かつてのラテン語ほどではないが、18世紀にはフランス語は上流社会及び学問界の、ある種の共通語となっていた。じつにロシアやプロイセンの宮廷では、ロシア語やドイツ語より、フランス語の方が通じたという話は有名である。

出に関しては、18世紀に四人の女帝を排出するという驚くべき実績を残した国なのである。しかもキリスト教的観点から見れば、この国の初代皇帝はピョートル一世（大帝）（Pyotr I, Alekseevich Romanov, 1672-1725）ではなく、妻のエカテリーナ一世（Ekaterina I, Alekseevna Romanova, 1684-1727）、つまり女帝であり、ロシアは女帝によって開かれた帝国であるとも言えるのだ⁶⁷。

ただ、ロシアの近代化を開始したのはやはりピョートル一世であり、ペテルスブルク・科学アカデミー（正式名称、科学と芸術アカデミー）を創設したのも彼である。1724年のことである。ただし、皇帝はこのあとすぐに世を去るので、ピョートルがこの組織の采配を振るうことはできなかった。彼の娘であるエリザヴェータ一世（Elisavata Petrovna Romanova, 1709-1761）が皇帝になって後は、この時の宮廷クーデターの立役者の一人、ラズモフスキー伯爵がアカデミーの総裁職に就いていた。ただしラズモフスキーはアカデミーの運営に熱心ではなく、その後継者たちも、この組織を単に自分たちの私腹を肥やす金づるとしか見なしていなかった。そのため、次に述べる女性院長が就任した時には、この組織は財政破たん状態にあった。

アカデミーの内容に戻ると、この組織はパリやロンドンを真似たその他の科学アカデミー同様、設立当初は自国の学者だけでその体裁を保つことができなかった。そのため公用語も外国語で、会員の多くは西欧から招かれた外国人の学者であった。その代表格がオイラーである。そして1747年より、芸術より自然科学に重点が置かれるようになる。ひとつ興味深いことは、このアカデミーはパリやロンドンのモデルと違い、学校も兼ねているということである。ここには中等教育機関が併設されており、単なる科学研究者の集団ではなかった。ただし上記のような監督者のもとでは、こうした教育機関が順調に運営されていたわけではない。

もうひとつのロシア科学界の特徴は、ヨーロッパ、特に同時代のフランスには存在し得なかった、「学問の自由」があったことである。この国の国教であるロシア正教は、ローマ法王を頂点とするカトリックが示したような、科学理論に対する「干渉」を行わなかった。ロシアはフランスより早くニュートン理論を受け入れ、宗教はそれに一切口をはさまなかったのである。

3-2. 科学アカデミー院長、エカテリーナ・ダーシコワ

後に大帝と呼ばれるエカテリーナ二世（Ekaterina II, Alekseevna Romanova, 1729-1796）が即位したとき、国家同様、アカデミーも混乱状態にあった。エカ

⁶⁷ピョートル大帝はロシア正教会での戴冠式を済ます前に他界してしまった。したがって、正式な戴冠式を行ったのはそのあとを継いだ妻のエカテリーナ一世からである。

テリーナはこの組織の立て直しのために、後にヨーロッパのどの君主も思いつかなかった人事をおこなったのである。女帝はまず手はじめに、科学アカデミーの立て直しのために、現実の活動を取り仕切る職として、1766年に総裁とは別に院長職を設けた。当初は、自分を帝位につけたクーデターの立役者グリゴリー・オルローフの弟、ウラジミール・オルローフを院長職に任命した。しかしウラジミールも、その後継者のダマシネフも、結局汚職をしただけで、アカデミーの活性化は果たされなかった。そこでエカテリーナ二世はやはりクーデターの立役者の一人、才女の誉れが高かったエカテリーナ・ダーシコワ (Ekaterina Romanova Vorontsova, Knyaginya Dashkova, 1744-1810) を科学アカデミーの院長に任命したのである。1783年のことであった。もちろんヨーロッパ初の女性管理職である。

これは画期的な人事だった。というのも、男子の跡継ぎがないときに女帝や女王が立つのは他の国でもときおり見られる現象だが、しかしそうして立った女性君主たち—エリザベス一世 (Elisabeth I, 1533-1603) やマリア・テレジア女帝 (Maria Teresia, 1717-1780) など—が、女官長や女子修道院長、女学校校長といった女性が着く決まりになっている、あるいは女性を対象とした組織以外の公式な組織の長の地位、ましてや学問的施設の長に女性を任命したことはなかったからである⁶⁸。

エカテリーナ・ダーシコワは結婚前のヴォロンツォーヴァ嬢であったときから、当時の皇太子妃エカテリーナの侍女として宮廷に伺候していた。ロシア語は結婚後に覚えたと言われるほど、西欧かぶれの教育を受けており、西のフィロゾフたちの著作、特にフランスのそれに親しんでいた。晩年の回想録もフランス語で書かれており、その文章は完ぺきである⁶⁹。このような学問的傾向から、やはり大陸のフィロゾフの影響を強く受けていた皇太子妃にとっては、かっこうの議論の相手だった。しかしダーシコワの関心が特に科学に向いていたわけではない。エカテリーナ二世がダーシコワに認めたのは、学者としてではなく、その百科全書的知識と政治、経済的手腕である。

ダーシコワはその前に、未亡人となつてからの婚家の財政立て直しで、すでに二十代のころに驚くべき経営手腕を発揮していた。さらに二十代後半から三十代で、息子のグランドツアーの付き添いの名目で、イギリスやフランスを訪れ、現地の著名なフィロゾフたちと知己になっており、科学アカデミーのための人材めや宣伝には格好の人材だった。ヴォルテールも、のちにエカテリーナ二世の宮廷に赴くディドロ (Denis Diderot, 1713-1784) も、ダーシコワの知性を絶

⁶⁸じつにダーシコワは、その後のロシア帝国、ソビエト連邦、そして現在のロシア連邦に至るまで、唯一の女性科学アカデミー院長である。

⁶⁹Princesse Dachcova, *Mon histoire, Mémoire d'une femme de lettres russe à l'époque des Lumières*, Paris & Montréal, l'Harmattan, 1999.

賛しており、女帝はこの評判をもアカデミー活性化の役に立てようとしたのである。そして女帝のもくろみは成功する。欧米の学術雑誌はこの大胆な人事を大々的かつ好意的に報道し、文芸共和国はいやでもこの「知的後進国」だったはずの北国に注目することになったのである。

しかし女性差別がなかったわけではない。そもそもエカテリーナ二世は皇帝の娘でもなく、ロシア人ですらない。彼女はドイツ生まれのアンハルト・ツェルプスト公女であり、プロイセンのフリードリッヒ大王（Friedrich II, 1712-1786）とも深いつながりのある元プロテスタントの「外国人の女」なのだ⁷⁰。ロシアだけでなく、ヨーロッパ中が、「ものめずらしい動物を見るように」この新しい女帝の手腕を見つめている。そして当然だが、諸侯たちは、あわよくば付け入る隙をねらっていた。だからダーシコワに失敗は許されなかった。彼女が最初に目をつけたのは、そのときすでに盲目になっていたオイラーだった。かつてデュ・シャトレが切望したアカデミーの賞、メスレー懸賞の「火の論文」で入選したあのオイラーである。

もともとスイス人のこの数学者は、科学アカデミー創設のときに抜擢されて、アカデミーの星となるべくロシアに迎え入れられたのである。彼は帝国の期待にたがわず、国内外で数々のすぐれた業績を残し、高い名声を博していた。じっさい、メスレー懸賞では賞金王と言ってよい存在だった。しかも彼は当時のほとんどのアカデミーの外国人会員でもある。ダーシコワはこの、現役をしりぞき、すでに盲目になっていた76歳の大学者を、自分の院長就任式に招待し、その手を取って会場に現れた。そして「科学は今後、ロシアの土壌では決して不毛なものではなくなります」という発言でもって、科学という学問への自らの真剣な愛情と、自分はお飾りではなく、この組織の長として実際に采配を振るうのだということを公に示したのである⁷¹。

エカテリーナ二世の人材を見抜く目の確かさはここでも証明された。ダーシコワは、前任者たちの杜撰な管理のためにその予算が全く不適切に使用されていたアカデミーの経理を透明化し、汚職をなくしてその財政を完全に立て直した、いや黒字にさえしたのである。それだけではない。先にも書いたが、このアカデミーはロシア近代化のためもあって、外国人会員が多いことで有名だが、ダーシコワは自国の学者達をはげまし、自国の学問レベルの向上を図ることを決しておろそかにしなかった。ロシア最初の大科学者と言われるロモノーソフ（Mikhail Vasilievich Lomonosov, 1711-1765）の全集やオイラーの論文集を出版させたのも彼女である。その他に地図や暦、文法書などを安価で発行し、アカデ

⁷⁰エカテリーナ二世は、皇太子妃となるべくロシアに来てから名前もロシア風に改名し（元の名前はゾフィー）、宗教もロシア正教に改宗した。

⁷¹中神美砂『ロシア初の女性アカデミー総裁—ダーシコワ公爵夫人—』ユーラシア・ブックレット 98, 東洋書店, 2006, p.44.

ミーの発展と収入の確保という一石二鳥を狙い、これに成功したのである。

ダーシコワは、なおざりにされていたアカデミーの中等教育機関にも多くの学生を集める工夫をこらし、ここを立派な学校として建て直した。ただしこれは男子校であり、女子は入学できない。高等教育はやはり男子だけのものであった⁷²。また、1985年からは自国語で行う公開講座を開設し、これについては性や身分によらない聴衆を対象とした。そしてそこでは、最新の科学知識をわかりやすく伝える為の多数の講演会を行い、自らも聴衆として積極的に参加した。

この公開講座は大変な好評を博し、ロシア科学の発展に大いに貢献した。また彼女は独自の科学研究こそ行わなかったが、『百科全書』の時代の知識人らしく、文理両方の分野に対する目配りの持ち主で、特に鉱物コレクターとして有名だった。後に自身の膨大な鉱物コレクションを科学アカデミーに寄付している。

しかもダーシコワと科学アカデミーとの関係はロシア国内だけに留まらなかった。かつてその高い知性に感動した西欧のフィロゾフたちは、手紙や雑誌の記事でこの新しいアカデミー院長を絶賛した。これは結果として、ダーシコワのみならず、その裁定を下したエカテリーナ二世の、文芸共和国での評判を上げるに至った。さらに、アメリカも含めた多くの国々は、この女性院長を自分たちのアカデミーの外国人会員や名誉会員として迎え入れたのである。

じつにダーシコワが名を連ねたのは、スウェーデン王立科学アカデミー、アメリカ哲学協会、アイルランド王立科学アカデミー、ベルリン博物学協会などのアカデミーである。多分彼女は18世紀のヨーロッパで最も多くのアカデミー会員の肩書を持った女性であろう。ここからもダーシコワが当時の文芸共和国でいかに有名であったかがわかる。

また、科学とは関係ないが、エカテリーナ二世は人文科学の充実、特にロシア語の整備を目指して、アカデミー・フランセーズを意識したロシア・アカデミーを設立した。そしてこのアカデミーの総裁にも、ダーシコワを任命したのである。それは彼女が科学アカデミーの院長職についてのもと同じ1783年のことであった。この組織が編纂、発行した『ロシア・アカデミー辞典』は、ロシアの辞書学の基礎を築き、その後長期にわたって多くの人々に活用された。つまりダーシコワは1783年以降、ふたつのアカデミーの長として采配を振るい、その両方の仕事をみごとにこなしたのである。

こうしてダーシコワは、科学研究者でこそないものの、フランス革命以降は

⁷²アカデミーの学校のような 高いレベルではないが、エカテリーナ二世はともかくもその治世中に女子のための中等教育機関を充実させ、特に貧しい貴族の娘たちの将来が安定するように図った。女子教育のこうした流れが、後の数学者ソフィア・コヴァレフスカヤ (Sofia Kovalevskaja, 1850-1891) を生む土壌となる。この間の経緯に関しては、橋本伸也『エカテリーナの夢、ソフィアの旅』(ミネルヴァ, 2004) 参照。

反動的になったエカテリーナ女帝と対立したことで、1794年にその地位を去るまで、ヨーロッパの科学界で知らぬものなき女性として存在し続けたのである⁷³。

3-3. ダーシコワの特殊性とジェンダー問題

ダーシコワはなぜアカデミー院長になれたのか。これはひとえにエカテリーナ二世の抜擢のおかげである。したがって、例外的措置でしかない。それによってロシア全体の女性の地位が大きく向上したわけでもないし、女性会員が任命されたわけでもない。また、将来会員になれるような科学教育が女学校に取り入れられたわけでもない。結局のところ、エカテリーナ女帝の死後は、こうした「女性の公的な地位」という習慣はロシア帝国には根づかなかった。ダーシコワの後任は男性となり、科学アカデミー会員に女性が選ばれることもなかった。

じっさい、ジェンダー的にみればこれ以降のロシア帝国の歴史は、まさに「反動」の歴史である。エカテリーナ大帝の息子のパーヴェルー世 (Pavel I, Petrovich Romanov, 1754-1801) は、正式な法律を作って、これ以降の「女帝」の出現を阻止することさえしたのである。こうして、エカテリーナ二世を最後に、ロシア革命で処刑されるニコライ二世 (Nikolai II, Aleksandrovich Romanov, 1894-1917) まで、その後のすべての皇帝は男性である。科学アカデミー院長エカテリーナ・ダーシコワは、4人の女帝を輩出した18世紀ロシア帝国の、最後を飾る打ち上げ花火のようなはかない存在でもある。

ダーシコワの生涯の中で、ジェンダーという視点から特に注目すべきは、彼女が果たした西ヨーロッパへのグランド・ツアーである。これは当時北欧を中心に、上流社会の男子の教育の仕上げとして流行していた「外国遊学」という習慣であるが、女子はこの学問的旅行から排除されていた。18世紀においては、多分最も偉大な科学的業績を上げた女性であり、女性としては例外的に恵まれた学問環境にあったデュ・シャトレですら、イギリス留学を熱望しながらそれを果たせなかった。

なぜダーシコワにはこんな大旅行が可能だったのか。それには以下の特殊な条件がそろっていたからである。第一は1764年以降、彼女は未亡人だった。この時代に妻の居住地を決める法的権利を持つのは夫であったが(未婚の場合は父)、

⁷³これには後日談がある。エカテリーナ二世の死後、帝位を継いだ息子のパーヴェルー世はダーシコワを宮廷から遠ざけたが、そのあとのアレクサンドルー世は (Aleksandr I, Pavlovich Romanov, 1777-1825) 再び彼女を女官長に任命した(エカテリーナ二世の時も女官長職にあった)。じつにこのあと、彼女がかつて長であったふたつのアカデミーの会員たちからも、ダーシコワに対して、院長職と総裁職への復帰願いが出されたという。彼女は健康と年齢を理由にこれを辞退したが、ここからも、ダーシコワの手腕が、会員たちからいかに高く評価されていたかが良く分かる。

彼女には自分に命令できる男性がもはや存在しなかった。遊学でこそないが、この時代にフランスからポーランドへの大旅行を果たした珍しい女性であるジョフラン夫人 (Marie Thérèse Rodet Geoffrin, 1699-1777) もまた、その時には未亡人だった。つまり生きていた夫のいたエミリー・デュ・シャトレは、夫がイギリスに行くような環境になかったために、留学が果たせなかったのである。マリー・ラヴワジエも、二度目の結婚の後にイタリア旅行を臨んだが、夫であるラムフォードの拒絶により、やはりこれを断念せざるを得なかった。これが当時の有夫の女性の「宿命」だったのである。

第二はこの旅行の名目上の主役はダーシコワ本人ではなく、息子だったからである。つまり彼女は、エカテリーナ女帝に「息子の教育のため」としてグランド・ツァーの許可を願い出たのである。じつにダーシコワと息子のパーヴェルは、2回の旅行で合計10年ほどを西ヨーロッパ各地で過ごしたのだが、なんと最初の旅行の時に息子はたったの9歳だった。だから、1回目の旅行の名目は、より正確に言うならば、「息子の為の学校探し」という、とってつけたようなものである。要するにその時に本当に大学の授業に出たり、その土地土地のアカデミーの公開講座に出席して、熱心に勉強したのは息子ではなく、母だった。

しかし当時女性が「自分のために」遊学を願い出ることなど、ジェンダー規範から許されることではなかった。女性のジェンダーはあくまでも「愛他的」であることを要求される。「婉曲」だけが女性に許された表現手段だった。

たとえ相手がエカテリーナ女帝であっても、筋を曲げない発言をするダーシコワは、当時「女らしさに欠ける」とよく批判されたが、その彼女でさえ、「息子」という口実がなければ、とても長期に外国旅行をすることなどかなわなかったのである。ここには、やはり「男まさり」と周囲に思われながらも、「息子のための教科書」として『物理学教程』を書いたデュ・シャトレの態度と類似のものがある。彼女は息子が10歳から13歳のころにこの本を書いていたのだが、『物理学教程』のレベルを考えると、「息子のため」というのは口実としか言いようがない。それでもやはり、「母」という隠れ蓑は必要だったのである。

こうして「母の愛」という大義名分の下、ダーシコワは、ディドロ、ヴォルテール、スミス (Adam Smith, 1723-1790)、フランクリン (Benjamin Franklin, 1706-1790) たち錚々たるフィロゾフとの知的交流を楽しみ、イギリスではエジンバラ大学の講義に出席した。

ただ、「母」という隠れ蓑は、当然の話だが子どもにとっては迷惑な口実ではない。しかもダーシコワには娘がいたが、これもデュ・シャトレの娘と同様、息子に比べて無視される傾向にあった。ただし、ダーシコワはグランド・ツァーに娘アナスタシーヤも連れて行った。これにはなんと「娘の夫の学問のため」

という名目をつける。要するに娘夫婦を連れて行こうとしたのである。ところが義理の息子は途中でロシアに帰ってしまい、娘だけが母と一緒に行動する。

ここからも、最初の名目はまったくの口実であることが良く分かる。こんな調子だから、もちろん娘夫婦の仲は良好ではなかった。それにダーシコワの主眼はあくまで息子であり、回想録の記述を読む限り、娘のお伴は「おまけ」である。当然娘と母の関係も歪んだものとならざるを得ない。しかし溺愛された息子が母に感謝するかというと、そうもならない。

最終的に彼女の娘はその浪費癖から、正式に禁治産者の宣告をうけることとなり、息子は母に無断で身分の低い女性と結婚して、母を悩ませ続けた。この事態はダーシコワの評判を落とした。その傑出した知性と社会的地位のために、彼女には以前から敵が多かったのだが、敵たちはこうした「母の失敗」を大きく騒ぎたてた。また、ルソーに感化されていたダーシコワ自身も、「母」の立場を重視していたので、この手の批判にひどく傷ついた。彼女の回想録では、自分がふたりの子どもの母として、どれほどの自己犠牲を払ったかという記述に多くのスペースが割かれている。しかし実際の行動を見る限り、彼女がそれよりも重視していたのは「自分の」知的向上である。ところが当時、女性は学問に対して正攻法が許されなかったため、ダーシコワは婉曲な手段を取らざるを得なかった。これは子どもから見れば「偽善」であり、おしつけがましい態度と映るものである。そして結局この「偽善」の代償は、このようなジェンダー・バイアスの強い制度や習慣を作った社会ではなく、当の女性やその家族だけが払わされることになったのである。

しかもダーシコワの評価のされ方は、当時から多少はその傾向があったのだが、19世紀以降は特に、ジェンダー・バイアスのきわまったものとなってゆく。研究者たちの間ですら、ヴォルテールやディドロの彼女への賞賛が歪んだ形で後世に伝えられた。18世紀の、特に才女を称えたフランスの伝統は、19世紀には理解されがたいものになっていった。ディドロはダーシコワを多角的に評価しているが、歴史研究者たちは、このフィロゾーフの彼女に対する賞賛は無視して、「彼女は美人ではなかった」という彼の一文ばかりを何度も何度も繰り返した。

こうして、“ふたつのアカデミーの長を全うして、すばらしい業績を上げた”という彼女の手腕は、長い間忘れ去られていたのである。これに注目が集まりはじめたのは、ペレストロイカ以降のことであり。この時代のロシアの科学アカデミーの研究と並行して、ダーシコワについても、今後さらなる新情報がもたらせる可能性に期待が高まっている。

4. 科学アカデミー会員：ラウラ・バッシとイタリアの才女たち

ここまでで明確になったことは、この時期の欧米の科学アカデミーは、女性の「協力者」は歓迎したが、女性の「会員」、つまり男性と対等な科学研究者の同士は求めなかったということである。

たとえばパリの科学アカデミーは、王妃の前で椅子に掛ける資格を持つ、数少ない上流貴族であるデュ・シャトレ家の侯爵夫人にして、アカデミーの常任書記と対等な科学論争をしたエミリー・デュ・シャトレを会員とする意思は全く持たなかったが、その甥にして宮内大臣を務めたブルトゥイユ男爵を名誉会員にすることには何の問題も感じなかった。もちろんこの甥が何かの科学書や論文を書いたという事実は存在しない。彼は叔母の名声と、自身の由緒ある家柄と社会的地位、そして科学のパトロンとしての業績が買われたにすぎない。

ペテルスブルグ・アカデミーもしかりである。院長が女性の時にも、ここが女性を会員と認めたことはないし、自国に女性科学者を誕生させるための、直接的な手段を講じたというわけでもない。二人のエカテリーナも、そこまでは手を出せなかったというべきだろうか。しかし外国人会員として、すでに当時何らかの科学的業績のあった外国人女性を、名誉会員に選ぶことならできたはずである。じっさい先にみたように、ダーシコワ自身がこの榮譽にあずかったのだ。しかしロシアはこうした榮譽に対して、お返しをしたりはしなかった。

ところがここに例外的に、ラウラ・バッシ (Laura Bassi, 1711-1778) やファウステイーナ・ピニャテッリ (Faustina Pignatelli, n.d.-1785) といった自国の女性や、エミリー・デュ・シャトレのような外国人を会員として認めた特殊なアカデミーが存在する。しかもそれは名もなきアカデミーではない。世界最古の大学を持つ都市国家、ボローニャに存在したボローニャ・アカデミーである⁷⁴。たしかにイタリアには他の国にない伝統があり、社交界とは別の場所でも女性が科学の分野で活躍した。こうしたイタリアの伝統がボローニャの存在を作り上げたと言っても間違いではない。これが、哲学サロンであれだけ女性が権勢をふるっていたフランスとの大きな違いである。繰り返しになるが、フランスでは17世紀から18世紀を通じて、科学関係のアカデミーはただ一人の女性も受け入れなかったのである。

では、なぜこうした女性たちはボローニャ・アカデミーの会員になれたのか。そしてなぜイタリアだけが、このような例外的な存在たり得たのだろうか。

ここでは特に、当時最も有名だったラウラ・バッシの例を中心に、イタリア女

⁷⁴ボローニャ・アカデミーとイタリアの女性知識人に関しては、Paula Findlen, “Translating the New Science,” *op.cit.*; “Science as a Career in Enlightenment Italy: The Strategies of Laura Bassi,” in Sally Gregory Kohlstedt ed., *History of Women in the Science*, Chicago and London, Univ. of Chicago Press, 1999: 66-95 参照。

性たちの足跡を見てゆこう。

4-1. ボローニャ・アカデミーとラウラ・バッシ

エミリー・デュ・シャトレが1749年に42歳で早世した時、ボローニャの人々は「これでラウラ・バッシがヨーロッパで一番有名な女性知識人になった」と言ったという話が残っている。バッシ自身がそう思ったかどうかはわからない。ただボローニャ市民がそう思ったことは確実だ。この町はデュ・シャトレにアカデミーへの会員資格を与えたが、やはり同国人であるラウラ・バッシをひいきにしていた。このエピソードはそうしたボローニャ市民の気持ちを端的に示したものとしてとらえることができるだろう。

ラウラ・バッシは、デュ・シャトレ夫人の死亡時には38歳、すでにボローニャ大学の正式な教員（つまり大学から給与をもらい、講義をする者）として物理学を教えていた。彼女はヨーロッパで二番目に大学の学位を取得した女性であり、ヨーロッパ初の女性大学教授、そしてボローニャ科学アカデミー正会員である。じつはこの経歴にはイタリアの特殊事情がからんでいた。

この時期、女性の全体的な知的レベルという問題に関しては、イタリアよりフランスの方が上だった。フランス女性の才知の高さは、ヨーロッパを広く旅した多くの啓蒙の知識人が書き残している。しかし公の場では別だった。サリカ法に縛られていたフランスは、女性の国王を認めなかった。同様にこの国ではあらゆる公的な組織は（女官長や女子修道院長などの女性に限定された職以外）女性を排除していた。ところがイタリアの事情は違っていた。ルネサンス以来の、比較的男女双方に与えられていた人文教育の伝統の上に、この国ではボローニャ・アカデミーを代表として、いくつかのアカデミーが女性の正式な入会を認めていた。しかも先に述べたように、エミリー・デュ・シャトレを会員に迎え入れるなど、その国籍をイタリア人に限らなかった。これはフランスやイギリスでは考えられないことだった。

もうひとつの特徴は、大学がすでに17世紀に正式に女性に学位を与えたことである。イタリアは1678年にパドヴァ大学で、ヨーロッパ初の学位を女性に与えている。次いでバッシが1732年にボローニャ大学で学位を受けた。この大学はその後も先のアンニェージ他、幾人かの女性たちに学位を与えている。バッシが一番目立った女性であることは事実だが、彼女はイタリアでただ一人の例外ではない。ジェンダーという観点から考えると、これは何にもまして重要なことである。つまり、彼女の存在が稀少であるのは事実だが、完全に孤立した存在でもない、ということだ。とはいえ「ラウラ・バッシ大学教授兼ボローニャ・アカデミー会員」というものの誕生には、ジェンダーに関する多くの例外的環境がかかわっていることはまぎれもない事実である。以下にその経緯を見てゆ

こう。

法律家の娘として生まれたラウラ・バッシは、タッコーニというボローニャ大学教授兼ボローニャ・アカデミー会員から家庭で高度な教育を受けることができた。ここでひとつだけイタリアの特殊事情について説明すると、当時他のヨーロッパの国々では大学とアカデミーの連携はほとんどなく、むしろ敵対することもしばしばだったが（従って両方の肩書きを持っていても、それは単なる偶然である）、イタリアはそうではなかった。したがって、タッコーニも、後のバッシも、大学とアカデミー両方の肩書きを持っているのである。ともあれ、タッコーニは教え子の才知に驚嘆し、ボローニャ大学に働きかけて彼女に学位をとらせることを計画する。それはバッシが公衆の前で公開討論することを意味するのだ。この討論にバッシは大成功をおさめ、1732年にこの大学の学位を取得する。頭脳明晰であることに加えて、彼女の洗練されたマナーやさわやかな弁舌はボローニャ市民を魅惑した。ボローニャはこの「魅力」に目をつけたのである。

というのも当時のボローニャはスターを必要としていた。先にも述べたが、この町はヨーロッパ最古の大学があることで有名であり、そのことはボローニャの誇りであったが、17世紀の末ころにはじつは落ち目になっていた。もちろんこの時代に、ボローニャの名前を高めた学者も、他にいなかったわけではない。ボローニャ・アカデミー会員の肩書でヨーロッパを回り、ニュートンの科学啓蒙に努めたアルガロッティ（Francesco, Algarotti, 1712-1764）の存在は、学問の町ボローニャのイメージアップにはつながったが、やはりかつての栄光をとりもどすほどの力を持ち得なかった。そこに登場したのが若く魅力的なラウラ・バッシだった。並々ならぬ知性を備えているこの女性を前面に出せば、ボローニャにとってすばらしい広告塔になる。フランスと違い、国家としての意識を持たなかったイタリアは、それだけに郷土愛が強い。「町」の再生はボローニャ市民すべてにとっての悲願だったのだ。

こうして1732年、公衆の前で科学の講義や討論をし、公開実験をする大学教師にしてアカデミー会員ラウラ・バッシが誕生する。男性学者のパトロンという通常の知的女性の役割を超えたいというバッシの野心と、過去の栄光を誇るボローニャ市民の利害が一致したのである。

ところが、これだけの名声と社会的地位を享受したバッシの科学的業績を分析するのは、じつは至難のわざなのである。というのも、その著名度にもかかわらず、彼女が書いたはずの科学論文がほとんど残っていないからである。しかもバッシは本を出版していない。本当は単著を出版したかったのだが、これだけの名声と肩書きを持ちながら、あとで述べる、「女性」アカデミー会員というその特殊な立場ゆえに、本を書き上げることができなかった。この点は当

時常に比較の対象にされたデュ・シャトレ夫人や、ここで述べた他の「アカデミー会員になれなかった」女性知識人たちとの決定的な違いである。わずかに残された水力学などに関する4つの作品も断片的なものにすぎず、彼女の科学研究の全容を知るには不十分である。

ただし、紙に書き残すだけが科学の仕事ではない。18世紀のフィロゾーフたちの最大目標であった公衆への「啓蒙」、とりわけ「科学啓蒙」に話を限れば、バッシはまぎれもなく当時のヨーロッパで有名かつ有力な自然哲学者だった。というのも、彼女はボローニャ科学界の広告塔として毎年のように公衆の面前で科学に関する行事に出席し、さまざまな科学上の問題について発言したからである。その最初のものが先に述べた博士号の公開審査である。次は他のどんな男性博士のものよりも華やかだった学位授与式だった。アルガロッティも参列したこの行事は、町をあげてのイベントとなり、広くヨーロッパに語り伝えられた。

ここでは教会も科学研究者の味方となる。町の高位聖職者たちは彼女を盛大に祝福した。いや、町だけではない。じつは時の法王ベネディクトゥス14世（Benedictus XIV, 1675-1758）も彼女の味方だった。ボローニャの栄光はひいてはイタリアの栄光なのだ。国家という概念こそなかったが、イタリア人はルネサンスに自分たちがヨーロッパで最も輝いた存在であったことを決して忘れてはいなかった。

こうしてローマ・カトリック教会自らが、イタリア人の女性科学研究者という存在に祝福を与えたのである。このあたりは、教会と対立することが多いフランスの科学啓蒙の事情とは大きく異なっている。なんとこの法王は（過去の勅令を撤回こそしなかったが）コペルニクス（Nicolaus Copernicus, 1473-1543）やガリレオ（Galileo Galilei, 1564-1642）、スピノザ（Baruch De Spinoza, 1632-1677）といった、かつて法王庁がその学説を批判した学者たちを受容する態度を示しさえしたのだ。

バッシが町の有力者たち、つまり貴族階級が集まる会合への出席を要請されていたこともわすれてはならない。彼らのすべてが科学に関心があったわけではないが、ヨーロッパで名を馳せている故郷の有名女性を一目見ようという人々は大勢いたし、それは彼らの中にある程度の科学への興味をよびさますことにもなった。とりわけ貴婦人たちは同性の有名人ということでバッシに好意的だった。彼女たちは少なくとも、アルガロッティが『ご婦人方のためのニュートン主義』で述べた、哲学者に「啓示を与えた」たぐいの女性にはなりたいたいと思ったのだ。

しかしなんと言っても最大のイベントは、年に一度のボローニャ大学解剖学教室における公開解剖である。これには内外の学者だけでなく、町の有力者や外

国の要人などが招待された。「解剖用死体と女性教授」というこの組み合わせは、当時の（そして多分今でも）ジェンダー規範からは異様なものであり、それだけにヨーロッパ中の話題をさらった。公開解剖はよそでもおこなわれるだろう。しかし女性がそれをとりおこなう町はヨーロッパ中でボローニャだけなのだ。

ボローニャは、こうしたイベントが町にもたらしてくれる有形無形の利益を最大限に利用した。そしてバッシもまた、こうしたイベントへの参加が、彼女の本来の科学研究—ニュートンの物理学をさらに精緻化すること—をスムーズに進める上での必須条件であることをよく心得ていた。ボローニャが彼女を必要としているかぎり、科学研究者としての彼女の立場はゆるがない。ただしそれは皮肉なことに、当時のジェンダー・バイアスこそが作り上げたゆるぎなさだった。もし多くの女性が本当の意味で科学に参加できたなら、彼女の希少価値は存在しえない。

1738年の同業者ヴェラッティとの結婚に際しては、当時のジェンダー・バイアス（男と違って、女にとって結婚と学問は両立しない、あるいは処女性を失ったら女は学者たりえないという社会通念）のために周囲に反対されたりしたが、バッシの知性が衰えることはなかった。それになんといってもボローニャは彼女を必要としていた。だいいち彼女自身が、結婚によって自分の学問活動をやめるとどという気は毛頭なかった。結婚後も、八人からの子どもの出産後も、バッシは学者として精力的に活動した。結婚後に自宅ではじめた私的な授業には、有力貴族も出席するなどして、一種の有名サロンの様相を呈していた。こうして、科学はこの町ではますます重要な話題の一つとなっていく。

そしてバッシの科学啓蒙はこれだけにとどまらない。彼女が当時の知識人たちと交わした手紙もまたこの時代の科学啓蒙に大きく貢献した。ヴォルテールやアルガロッティ、ボスコヴィッチ (Rugjer Josip Bošković, 1711-1787)、ノレ (Jean-Antoine Nollet, abbé, 1700-1770)、ベッカリーア (Cesare Bonesana Beccaria, 1738-1794)、ヴォルタ (Alessandro Volta, 1745-1827)、スパランツァーニ (Lazzaro Spallanzani, 1729-1799) などの著名人との文通は、そのつど文芸共和国で話題となったからだ。

こうして、バッシの持つ「女という稀少性」、特に「女性科学アカデミー会員」という肩書は、科学研究者としての彼女の名をヨーロッパに広めさせ、同時に彼女が支持するニュートン科学の伝播に大いに役立った。この点でバッシは偉大な科学啓蒙家であり、イタリアのみならず大陸におけるニュートン啓蒙に大きく寄与した人物であるといえよう。

その生前からバッシは数々の詩に謳われ、メダルさえ作られた。かつてガリレオ詣でのために、彼が隠遁させられていたアルチェトリを訪れる人が後をた

なかったように、この時期のボローニャは、そのガリレオの流れをついだニュートン主義を支持するバッシ詣でのために、ヨーロッパ中から多くの人々を引き寄せたのである。しかも法王庁から追われた人間であったガリレオと違い、バッシには法王の後ろ盾があるのだ。人々は「安心して」彼女を訪問できる。バッシの後光はいや増しにも増していった。なんと1760年代には、ボローニャ大学からの彼女の俸給は他のどの教授よりも多かったという。かつてガリレオが、ピサ大学、あるいはパドヴァ大学教授としての俸給の安さを嘆いていたことを思うと、バッシの扱いがどれほど破格のものだったかがよくわかる。

しかもバッシはただ珍しい女学者として、「与えられた」ものだけをありがたく受け取っていたわけではない。先にも述べたように、残ってこそいないが、毎年のように物理学の論文を書き続けた。しかも1776年には65歳で自らアカデミーの実験物理学の教授職に名乗り出た。女性によくある「請われてしかたなく」というポーズをとらなかつたのだ。この請願は認められ、同時に夫には彼女の助手というポストが与えられた。バッシにおいては、フォントネルやアルガロッティの考えていた「男から女へ」という科学啓蒙の流れが完全に逆転している。

バッシのキャリアから明らかになることは何か。それは、そこがどんな時代であり、場所であっても、一般に流布している男女の「性質」などは、社会の要請があれば、簡単に覆されるものだ、ということである。バッシの例をみると、ジェンダーは宿命などではないことがよくわかる。要するにボローニャは、ジェンダー規範よりも、町の復興を重視したのだ。そしてバッシはこの町の「弱み」を最大限に利用したのである。

4-2. 女性「非アカデミー会員」の自由と、女性「アカデミー会員」の束縛

ただし、真正の科学アカデミー会員であり大学教授であったバッシは、やはりイタリアにあっても、例外的な存在であったことに変わりはない。彼女はその後輩たちの先例にはならなかつた。バッシ以外の女性会員や女性大学教授は、彼女ほどに「公的な」活動をしていたわけではない。女性が男性と同等の学歴や社会的地位を獲得するための本当の運動は、18世紀のイタリアの伝統の中から出てきたものではない。それはヨーロッパの他の国々と同様、19世紀の後半からの教育改革の流れの中で出てきたものである。

18世紀にその知性を謳われたほとんどのイタリア人女性は、彼女が住んでいた地方の科学アカデミー会員はなっていない。もちろんボローニャが地方会員に任命してくれたわけでもないし、ダーシコワやデュ・シャトレのように外国人会員になったわけでもない。しかしこうしたイタリア人女性知識人は、バッシのような、正式なアカデミー会員になった女性とは違う特徴を持っていた。

それは何か。それは彼女たちの方が、バッシのような立場の女性より、多数の翻訳や著作をものしているということである。

繰り返しになるが、これはフランス人であるデュ・シャトレやダルコンヴィルを見ても当てはまる傾向である。仮に紛失した論文がすべて見つかったにしても、多分バッシは『物理学教程』や『腐敗について』に匹敵するほどの作品を残していないだろう。これは何故なのか。

これこそが、けっきょくは女性会員が男性会員と同じでないことの証拠である。もちろん実力の問題ではない。ボローニャはなぜバッシを正式の会員にしたのか。それはなによりもボローニャ市の発展のためである。女性会員はボローニャの広告塔なのだ。「若い女性が解剖の講義をする」というだけで、見物人は倍になる。学問と関係する人間だけでなく、外国の王侯貴族たちもやってくる。

要するにこれらの科学イベントに出るという義務のために、バッシは同僚の男性会員より出番が多くなり、自宅で静かに執筆作業をするための時間が確保できなくなってしまう。アカデミーは、科学の本を書かせるためにバッシを会員にしたのではないのだから。かくして彼女は、アカデミーで発表したという記録は多数残しているが、いわゆる「本」は残さなかった。そんな暇は彼女の生涯にはなかったのだ。要するに、バッシの務めは、やはり一種の「女役割」なのである。

ここでは仔細を述べなかったが、バッシの後輩に当たる、二人目のボローニャ大学女性教授、マリーア・アンニェージ (Maria Gaetana Agnesi, 1718-1799) の最終的な宗教への帰依も、バッシとは違う形だが、やはり周囲からの「女役割」の押しつけへの反動だったのかもしれない。アンニェージの大学教授というポストは、バッシと違って「名誉職」であり、彼女が講義をしたという記録はない。というのも、彼女は長女の務めとして、早世した母の代わりに、二十歳ころから幼い弟妹たちの世話を追われていたからである。

しかしアンニェージは同時に、幼少時から天才少女との評判が高く、ボローニャ大学教授の父に英才教育を施された特別の存在だった。すでに十代で高度な数学研究を行い、母の死後には、弟妹の世話の傍らで、文芸共和国から絶賛された数学の教科書を出版したという驚くべき業績の持ち主でもあった⁷⁵。つまりアンニェージもまた、「家に閉じ込められていた」がゆえに、執筆の時間があつた女性である。

⁷⁵ アンニェージの代表的著作『解析学教程』(1748)は、自国で大評判を取ったのみならず、なんとフランス語と英語に翻訳され、ヨーロッパ全土で解析学の教科書として長く使用された。当時の数学系のパリの科学アカデミー会員たちはみなアンニェージを絶賛しており、エミリー・デュ・シャトレは「もしアカデミーが規則を変えて、女性をその会員として迎え入れるなら、最初にメンバーに選ばれるのは、自分ではなくアンニェージだろう」という手紙を書いたとまで言われている。

しかしこうした、弟妹の世話や父の期待への応答、というケア役割は、じつは彼女の心を蝕む行為だったのだろう。一見すると、アンニェージの最終選択—「男らしい」数学を捨てて、「女らしい」貧者や病人への奉仕の生活を選び、修道院が経営するホスピスに移り住んで、こうした人々世話に専念した—は、彼女が何よりも「女性の務め」を重視していたかのように見える。しかしこれは同時に、生家の「主婦役割」を捨てることであり、彼女をそこまでの数学者に育ててきた、父をはじめとした「周囲の」男性学者達の「期待を裏切る」、という「女らしくない」行為でもあったのだ⁷⁶。その意味では、アンニェージは父の死後、最後の最後に「自分の」意思を貫き、雑音のない「主体的な」生活を手に入れた女性なのかもしれない⁷⁷。

ともあれ、こうした女性たちの不自由な生活を、たとえば同じ世代のボローニャ・アカデミー男性会員のアルガロッチェのそれと比較すれば、その差は歴然である。彼は公的な地位を持ちながら、ヨーロッパを自由に行き来し、多くの著作を残した。こんなことはバッシには不可能だった。バッシはボローニャにとどまり、町の活性化に尽くすことによるのみ、男性と同じ資格が与えられたのであり、ひとたび町を離れたが最後、彼女の待遇は完全に変わってしまっただろう。バッシには、アルガロッチェのように、自らの意思でプロイセンに行きフリードリッヒ二世に仕え、お返しにピサの聖堂に豪華な碑文を残してもらえる、などという可能性は、最初から存在しないのである。ただ、ダーシコワのところで見たように、いずれにしてもこの時代の女性が旅をするのは容易ではない。けっきょく、アカデミー会員になってもなれなくても、女性は自由に旅行できないのである。

要するに、女性は科学アカデミーの正会員になれば本は書けず、本を書く時間を確保したければ、正規の肩書は望めなくなるという、男性にはありえない、

⁷⁶ 天才少女を娘に持ったアンニェージの父は、自分が教育した娘の評判を通して、この評判を可能にした自分の存在を、ミラノから世界に向けて発信したいという野心を持っていた。しかし当のアンニェージにとっては、学問は自分を売り出すための道具ではなく、魂を磨き、神に近付くための一つ的手段にすぎなかった。彼女は地位にも名声にも色ごとにも興味はなかった。確かにアンニェージは父のサロンを仕切っていたが、フォントネルやアルガロッチェによって描写されているような、いわゆる「サロンの知的かつコケットな女主人」といった風情は全くなかったと言われている。

⁷⁷ 「周囲の期待」への裏切りという意味では、アンニェージは、なんと当時ミラノのあるロンバルディア地方を支配していた、神聖ローマ帝国皇帝マリア・テレジアの期待をも裏切っている。アンニェージの『解析学教程』は、聡明な女性を書いた本ということで、やはり名君の誉れが高かった聡明な女帝に捧げられた。マリア・テレジアはこれに気を良くして、出版の褒美として、アンニェージに、ダイヤモンドのついた高価な贈り物をした。しかしアンニェージは後にこれを売却し、その代金を貧者への施しとしてしまった。これは確かに「キリスト者」としての正しい行為であり、誰にも文句のつけようのない行いではあるものの、他者からの好意をきっぱりと否定する、「女らしくない」行為でもある。

どうしようもないジレンマの中に置かれていたのである。

たとえばラヴワジェ夫人の節で名前を挙げたナポリ在住のジュゼッパ・バルバピッコラは、非常な野心家であり、彼女のデカルト哲学—『哲学原理』—のイタリア語訳は単なる翻訳ではない。バルバピッコラは多くの女性科学翻訳者同様、「翻訳者序文」という形式を利用して、そこでデカルト哲学や当時の女子教育に対する自身の見解を長々と披露している。しかもこの本で彼女は翻訳者である自分の名前を明記しているだけでなく、デカルトの肖像のかわりに、自分の肖像画を印刷させている。これは当時としては異例の試みである。この本は評判を呼び、ナポリのみならずイタリアにおけるデカルト啓蒙に多大な貢献をした。こうした活動によって、彼女はナポリの科学アカデミーの会員たちと知己となり、そこでの知的アイドルといった存在になった。ただ、それで彼女が正会員になれたわけではない⁷⁸。

バルバピッコラにはもうひとつ、注目すべき要素がある。彼女には知的な女友達がいたのだ。ナポリの著名な学者であるヴィーコ（Geanbattista Vico, 1668-1744）のサロンの常連であったバルバピッコラは、この学者の長女と親しかった。ヴィーコはアンニエージの父同様、女子教育に力を入れた人物で、自分の二人の娘に高度な教育を施した。ただ、この娘たちはバルバピッコラのように、自然哲学の翻訳を出版し、そこで自分の意見を述べるようなことはしなかった。ヴィーコと同僚である、当時のナポリの科学アカデミー会員たちの記録によれば、彼女たちも自然哲学を探究していたらしい。しかし彼女たちが実際に出版したのは、「女らしい」詩集のみであった。これは18世紀の女性知識人によくある話であり、その点でデカルトの翻訳を出したバルバピッコラは、科学アカデミー会員でこそないものの、自然哲学の中では稀有なケースである。

もう一人の女性科学翻訳者、やはりナポリのマリーア・アンジェラ・アルデイゲッリは、ニュートン主義のイタリアへの啓蒙者、特にステファン・ヘールズ（Stephan Hales, 1677-1761）の翻訳者として有名である。しかもこの翻訳は単なる言葉の置き換えではない。それは自分の研究報告でもある。というのも、彼女はあきらかにヘールズのすべての実験を追試しており、作者の間違いを自分の研究結果に基づいてきちんと批判、訂正している。さらに、原書の内容をよりわかりやすい形で自国の読者に伝える為に、多数の脚注をつけ、先の訂正と共に、こまかい解説を追加しているからである。この点ではダルコンヴィルの翻訳に酷似しており、彼女のように自分の本も出せるのではないかと思わせるほどの、高度な科学的知識の持ち主だった。

⁷⁸ ただし、バルバピッコラは文学関係のアカデミーである、アッカデミア・デッリ・アルカディの会員には任命されている。フランス同様やはりイタリアでも、文学や芸術のアカデミーは女性の受け入れに寛容だった。

ここからもわかるように、アルディゲッリは、文学的な意味での科学啓蒙家であるのみならず、実験家としての素質も持っていた。こうした点から、彼女はナポリのアカデミー会員だけでなく、実験系のパリの科学アカデミー会員たちとも友好的関係を結んでいた。特にヨーロッパ全土で実験家として著名だった、フランスのノレ師と親しく文通していた。彼はイタリア旅行の際に彼女と出会い、その学識に感動して、親しく付き合い始めたのであった。じつにノレは、アルディゲッリに向けて「女性がパリの科学アカデミー会員になれないのはとても残念だ」とまで書き送っている。ノレにはアカデミーの女嫌いの慣例を変える力はなかったが、できるだけこの女性の科学研究を応援したいと思った。そのためにたとえば、フランスのアカデミー会員たちに、ぜひ彼女と文通するように薦めたりしていた。

その一人に、有名な天文学者のラランド (Joseph Jérôme, Le François de Lalande, 1732-1807) がいる。自分の娘に天文学の手ほどきをし、また女性のための天文学の教科書を書いたこの学者も、アルディゲッリの科学啓蒙の才能を高く評価した。ヘールズの本の翻訳に感心したラランドは、彼女に対して、ビュフォンの『自然誌』のイタリア語訳をしないかともちかけた。この仕事は実現しなかったようだが、彼女はこうした形で、かなりの数のパリの科学アカデミー会員との付き合いがあり、彼らからの学問的な支持を受けていた。

しかし、これだけの学識と積極性のあったバルバピッコラもアルディゲッリも、「自分の」著作は残さなかった。それはなぜか、アルディゲッリはヘールズの本の翻訳者序文で、科学界における自分自身の著名度のなさをはっきりと自覚した文章を残している。彼女は片方では、自分は単なる解説者以上の者、つまり独立した自然哲学者であるという自負を持っていたが、自分はそのことをストレートに表現できる立場にないとも思っていた。要するにバッシのような「アカデミー会員」あるいは「大学教授」といった公的な地位がない以上、どれほどの実力があっても、自分自身の科学の本を出すことの意味が、自らの内に見出せなかったのだろう。これは皮肉な話でもある。というのも、現実には、肩書があつて有名なバッシには、本を書く時間が与えられていなかったのだから⁷⁹。

もちろんアルディゲッリたちには、バッシのこんな「不自由」など想像だに

⁷⁹ しかしここでもっとも皮肉なことは、実際に自分の本を出版し、その本が高い評価を得たのは、自己表現の野心を科学の内には持たなかったアンニエージだったことである。アンニエージの本の出版は、本人の希望ではなく、父をはじめとした周囲の圧力によるものであり、彼女はむしろ「ラテン語で書いてない」自分の本に出版する価値があるのかどうか迷っていたという。ここからわかることは、女性の本が出版できるかどうかは、むしろその女性の「周囲」、つまり人間関係の問題であり、周囲が強く望めば、本人が望まなくとも本は出るし、周囲が協力的でなければ、本人が望んでも出版は難しいということである。重要なのは常に「周りの人々」—大抵は周囲の「男性」—の意向であり、当の女性本人の意思はこの問題の決定的な要素ではない。

できなかったろう。ともかく科学アカデミーの周辺にいた女性たちの多くは、「自分の」本を出すべく努力するよりも、科学界の「巨人」（そしてそのほとんどは、どこかの科学アカデミーの男性会員だった）の翻訳をする方に自分の情熱を傾けた。そして「翻訳者序文」や「翻訳者注解」において自分の意見を展開する方を選んだのである。ここでも女性の翻訳に付けられた序文や注釈は大きな意味を持っている。

この時代の科学におけるイタリア人女性知識人を仔細に研究しているフィンドレンは、彼女たちについて実に皮肉な感想を漏らしている。

こうした女性たちが、しばしば [科学アカデミーのような] 学識あるコミュニティの中央にいるということは、より広い科学啓蒙を実現するにあたって、彼女たちの登場がいかに重要なことだったのかを雄弁に物語っている。しかし同時に、彼女たちがその位置でみごとなまでに沈黙を守ったことを知るとき、当時女性がそんな場所にいることは、いかに奇妙なことだと思われていたのかということをも雄弁に指し示しているのである⁸⁰。

したがって、脚注や翻訳者序文、巨人たちの本の解説書などは、まさにジェンダーの枠組みのぎりぎりでの、科学における女性たちの自己主張であり、批判を避けつつ自分の野心を表明するために、彼女たちが選んだひとつの戦略だったのである。

結び：科学アカデミーと女性

幾人かの例外的な女性たちの科学活動を通して、女性のためにはほとんど門戸を開いていなかった啓蒙時代の科学アカデミーと女性の関係について見てきたが、ここから導き出されることは何であろうか。

それは、すでに17世紀の末に、後のパリ科学アカデミー常任書記フォントネルが知的好奇心のある女性たちに望んだこと、つまり「観客」や「消費者」として科学アカデミーを支えることだけでは、彼女たちすべての欲望は、本当には満たされなかったということだ。全体的に見れば、17世紀のこの時点での、才女たちに対するフォントネルのような見方は、それなりに好意的で新しいものだった。しかし同時代のモリエールが批判的に描いているように、すでにこのときに「アカデミーに入会したい」「アカデミーを作りたい」と思った女性たち、つまり科学への本当の「参加」を望んだ女性たちが存在したのである。

⁸⁰ Findlen, "Translating the New Science," *op.cit.*, p.205.

そのほとんどは、多分わずかな参加さえ許されなかったであろう。しかし諦めなかった女性たちは、組織の隙間を利用して、それなりの形で「参加」をなすとげ、啓蒙の世紀の科学史の中に足跡を残していったのである。

その中には、自らの欲求が最初にあつて、科学アカデミーの会員たちに接近したケース（デュ・シャトレ、ダルコンヴィル、など）もあれば、たまたま父や配偶者や恋人が科学アカデミー会員であったことで、アカデミーと関わりをもつことになったというケース（マリー・ラヴワジエ、ピカルデ、モンペイヤール、アンニエージュなど）もある。そして、あくまでも都市の思惑という特殊な事情に乗った形ではあれ、本当にアカデミー会員になったケース（バッシ）も存在する。また、強大な権力を持つ女帝の側近だったおかげで、現在でもまれな人事である、科学アカデミーの長を務めたケース（ダーシコワ）も存在する。

こうした多様な「参加」形態をとりながら、女性たちは自分たちの置かれた環境の中で、多くの啓蒙主義者たちがキリスト教会に代わる権威として希望を託した近代科学に、自らの野心や希望を託していったのだ。

ただ、これらの女性たちはあくまで超のつく例外であり、その結果としてほとんどの場合、彼女たちは自分が属するサークルで「同性の仲間」を見出せる環境にはなかったことに留意する必要がある。この共通点は、要するに彼女たちが当時のジェンダー規範をはみでる存在であったということに他ならない。科学の「観客」や「消費者」ではなく、「参加者」に、と望んだ瞬間、彼女たちは家父長制社会の意地悪な目にさらされる。そしてこうした女性たちの大部分は、「男性の分野」に手を出そうとする女性への社会的圧力にはっきりと気付いていた。

この妨害から逃れるために、ある者は「匿名」を、ある者は「母役割の強調」を、ある者は「広告塔の務めへの専心」を余儀なくされる。しかも好むと好まざるにかかわらず、こうした主体性の欠如した役割を「自らが望んだ」という形をとって。彼女たちは多様な戦略をとりながら、ジェンダー・バイアスのかかった社会の中で、科学に対する自分の熱意を形に残そうとした。もちろんこうした方法の中で、世間で最も評判が高かったものは、男性科学研究者の有能な「補佐役割」を務めることだったのは言うまでもない。しかし、この「受けの悪い」役割に喜びを見出していたように見えた女性でも、彼女の内に時折噴出する、隠しきれない「主体性」を垣間見せることがある。しかしこうしたささやかな「主体性」も、世間からの批判を逃れることはできなかった。だから、科学における明白な「自己主張」をすとなれば、その女性は世間からの手ごわい反撃を覚悟しなければならなかった。

こうした批判や中傷の中で、デュ・シャトレは「後世の正統な評価」を、と望んだ。ダーシコワは、「私は忘却と軽蔑によってのみ不正に対抗した」とい

う一文を、回想録の最後に書き残している。つまりこれらは、自分たちに加えられた不正に対して、彼女たちの力では現世での復讐はかなわなかった、という意味でもある。では後世は彼女たちの望みをかなえてくれたのだろうか。答えはいまだ出ていない。確かにその次の世紀に、欧米の大学は女性たちに正式に門戸を開いた。その恩恵を受けて世界で最初に近代大学の博士号（理学）を獲得したマリー・キュリーは、バッシのような特例としてではなく、自らの業績によって、20世紀には世界中の科学アカデミーの会員に任命された⁸¹。これは18世紀には考えられなかった状況である。

しかし、これら18世紀の女性たちに向けられた批判的な視線や、この同じコインの裏にあたる、周囲の男性科学研究者への彼女たちの献身に向けられた過度の賞賛はやはり、強弱の差はあれ、現代の科学に参加する女性たちにも等しく向けられているまなざしではなかろうか。制度の充実は、女性の科学参加への必要条件にすぎない。たとえ長が女性であっても、それだけでその科学アカデミーを「ジェンダー・バイアスのない組織」と判断することはできない。人権宣言を用意した時代である啓蒙時代に生きた、これらの女性たちの足跡を丹念にたどり、彼女たちがどのような形で評価されてきたのかを分析することで、私たちは自分たちの時代が持つジェンダーの問題を、さらなる新しい視点から見直すことができるだろう。

⁸¹しかしここで重要なことは、二度のノーベル賞受賞者であるマリー・キュリーは、世界中の矚ましい科学アカデミーの会員に任命されたにも関わらず（巻末資料6参照）、肝心のパリ科学アカデミーに入会を拒絶されたという事実である。なんと、パリのアカデミーが女性正会員を認めたのは、20世紀も末の、1979年であった。この経緯については、川島慶子『マリー・キュリーの挑戦』（トランスビュー、2010）、pp.80-88 参照。

資料

資料1：18世紀欧米の科学アカデミーの状況

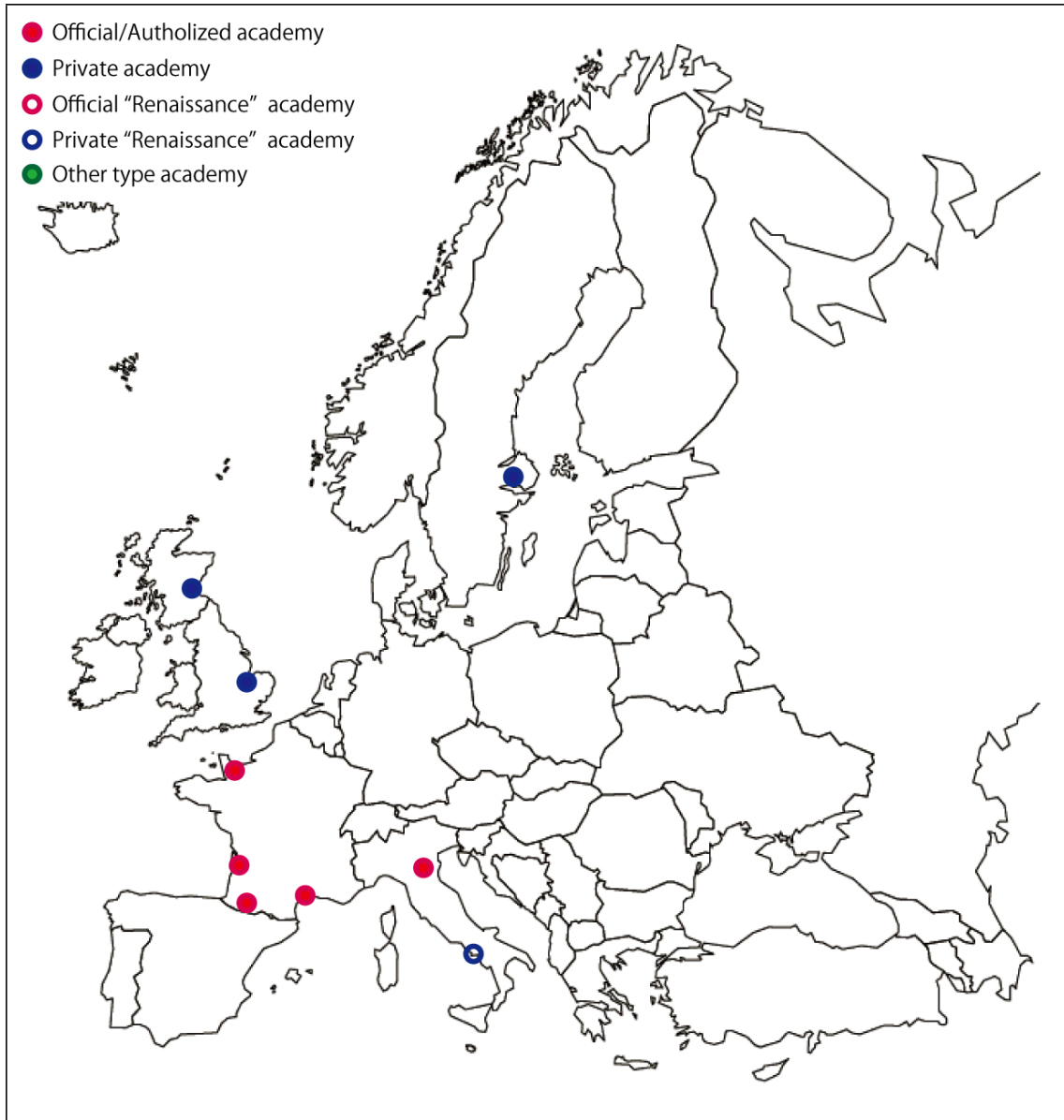


Figure 1-1 1701年-1720年に活動を開始したアカデミー

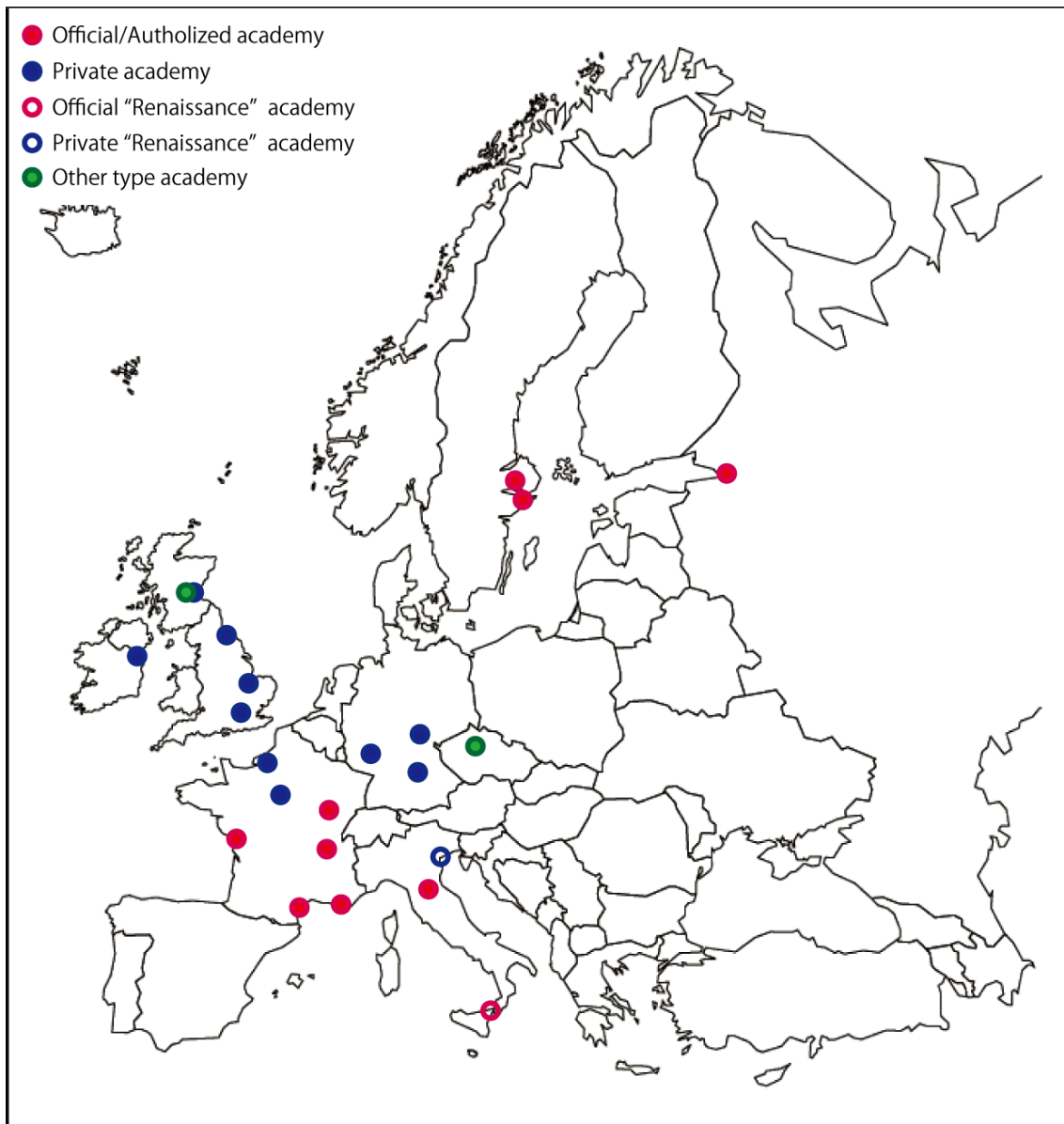


Figure 1-2 1721年-1740年に活動を開始したアカデミー

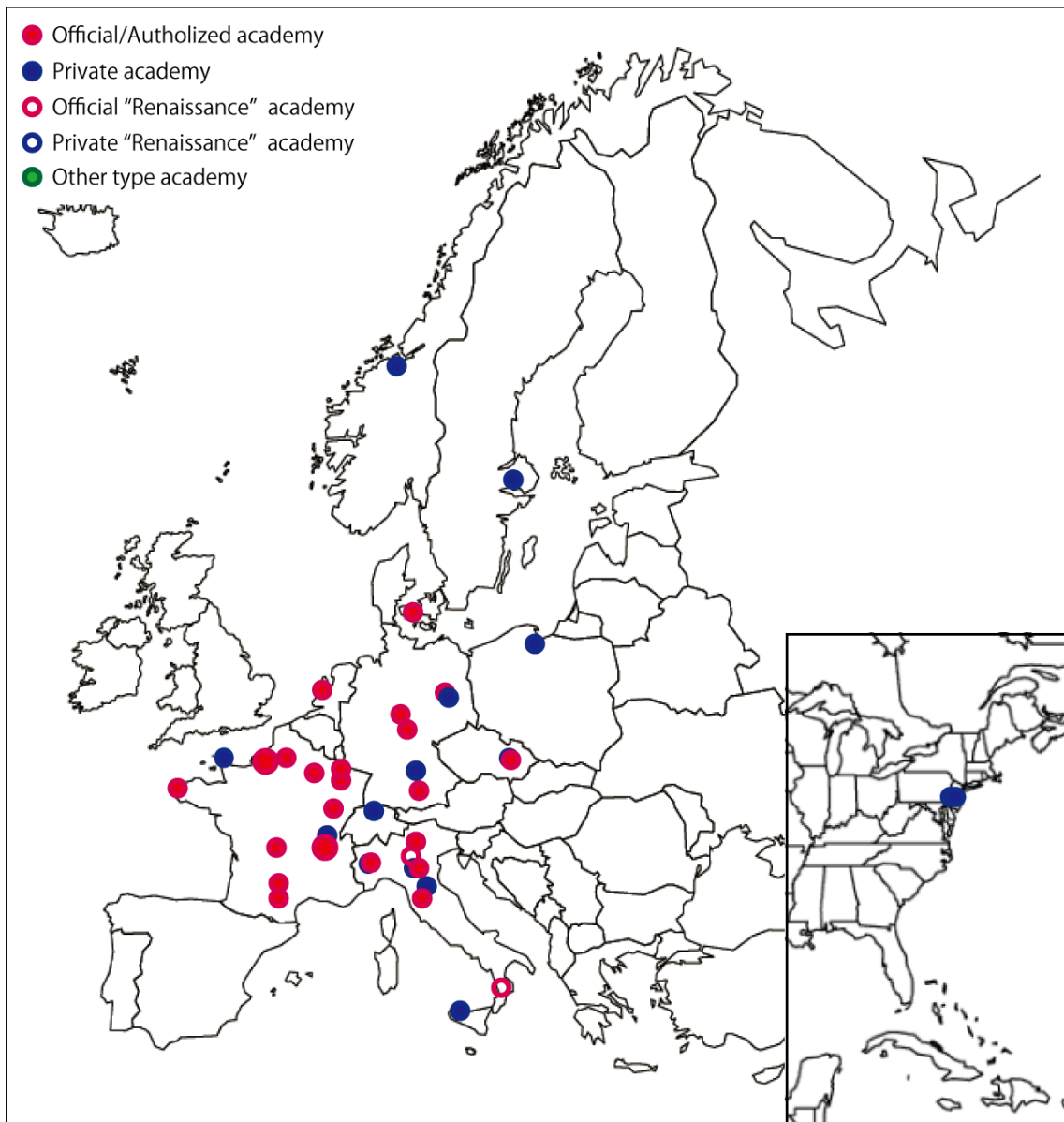


Figure 1-3 1741年-1760年に活動を開始したアカデミー

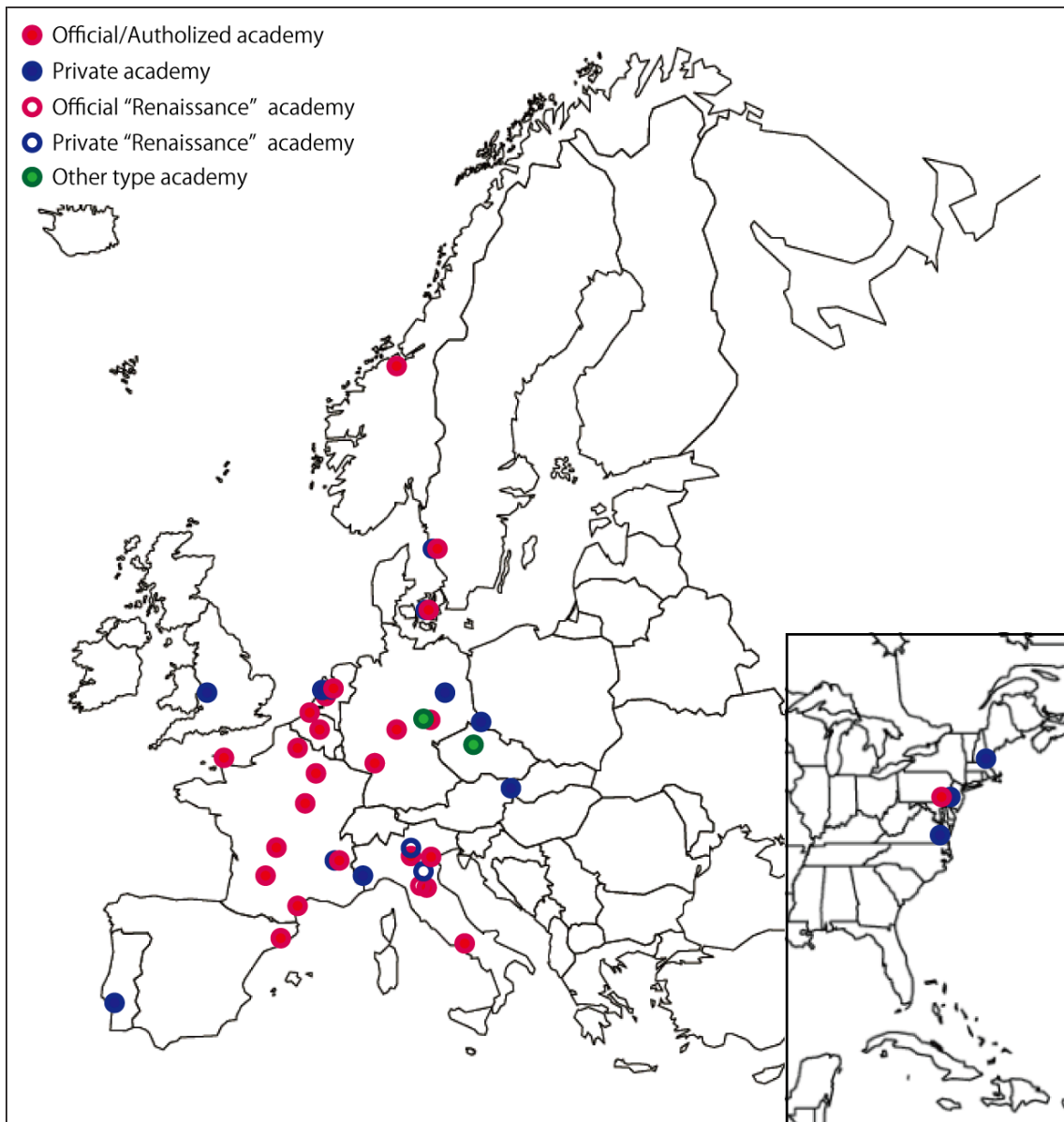


Figure 1-4 1761年-1780年に活動を開始したアカデミー

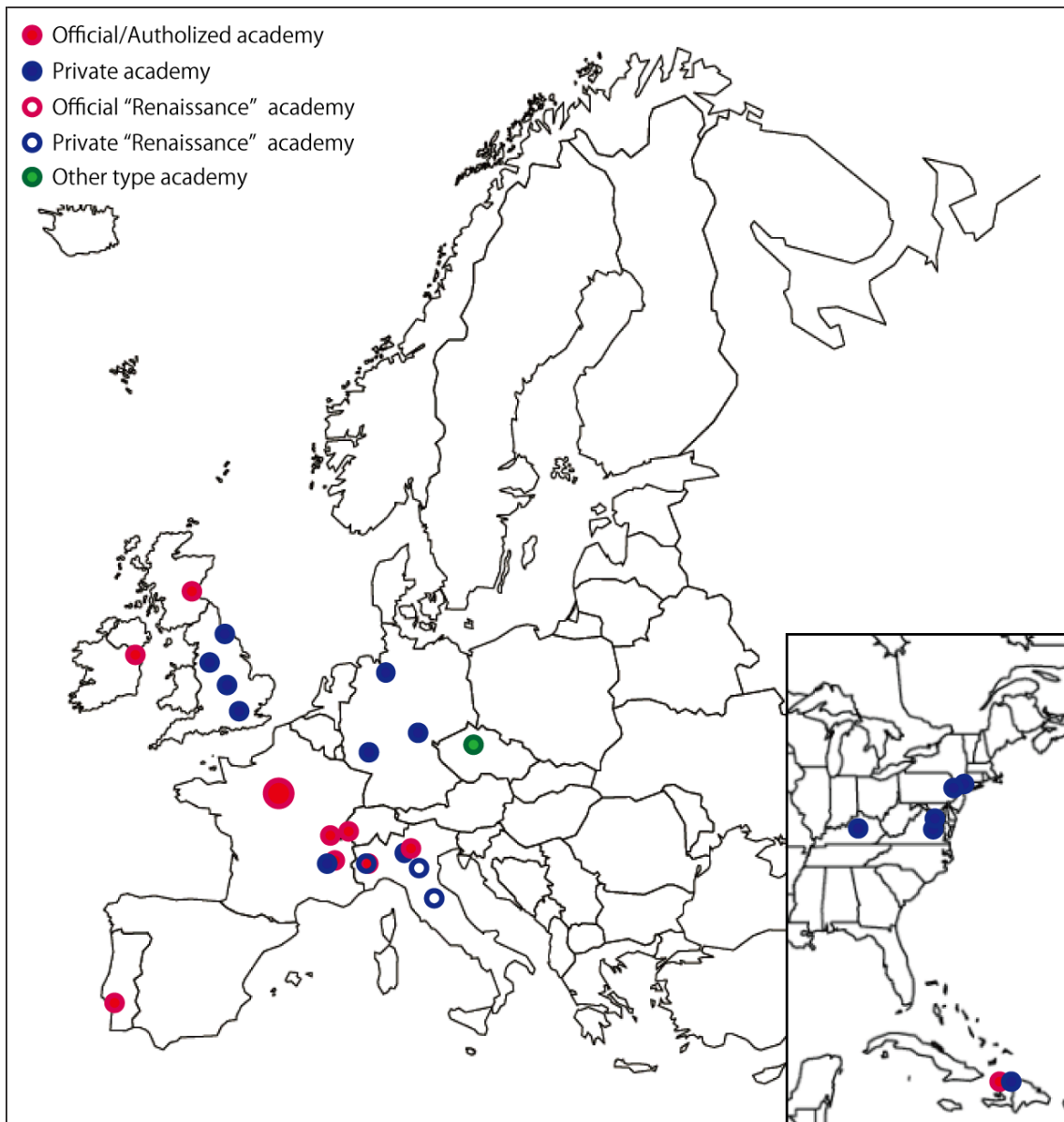


Figure 1-5 1781年-1800年に活動を開始したアカデミー

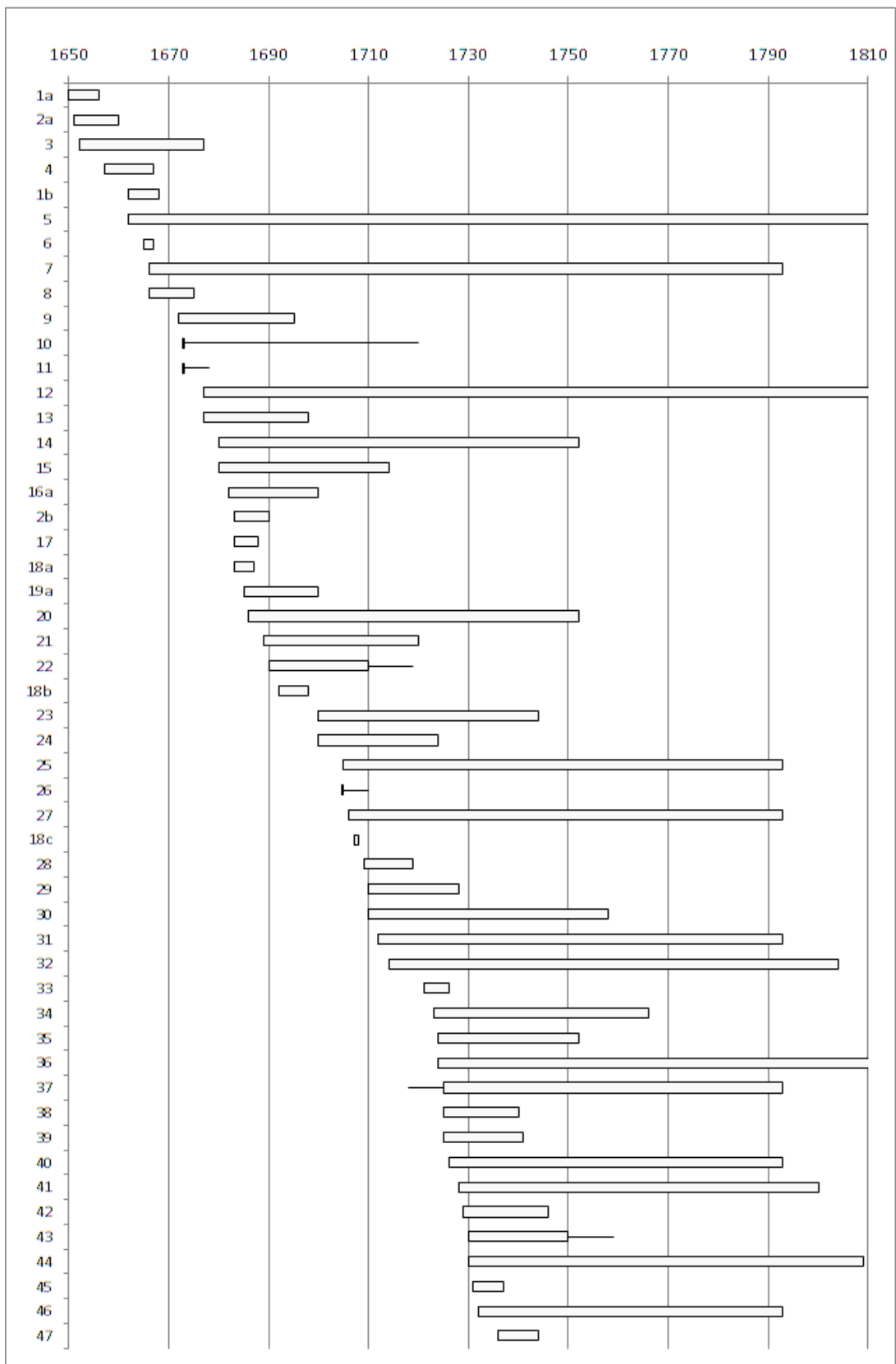


Figure 1-6(a) 各アカデミーの開始・終了年

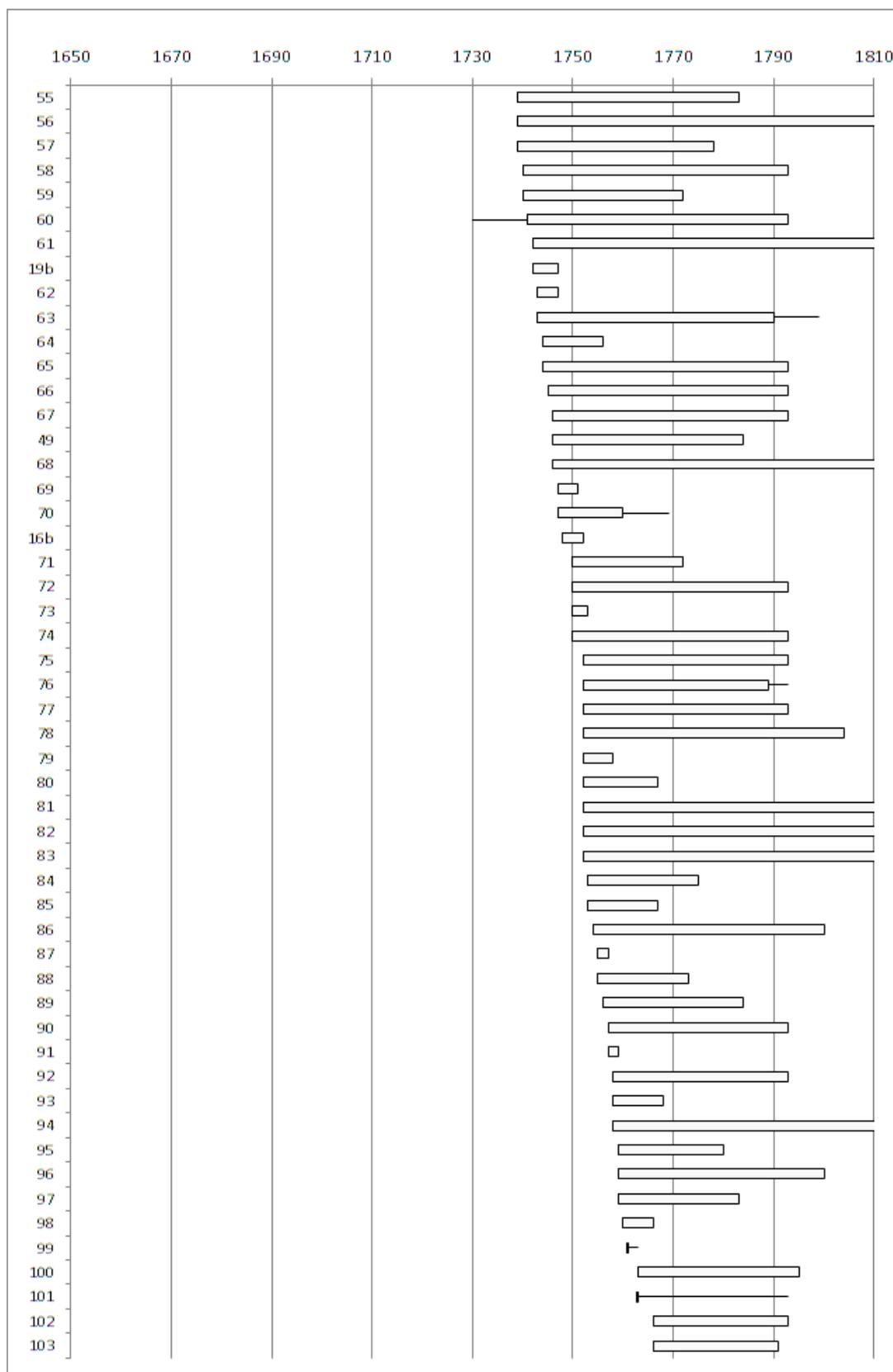


Figure 1-6(b) 各アカデミーの開始・終了年

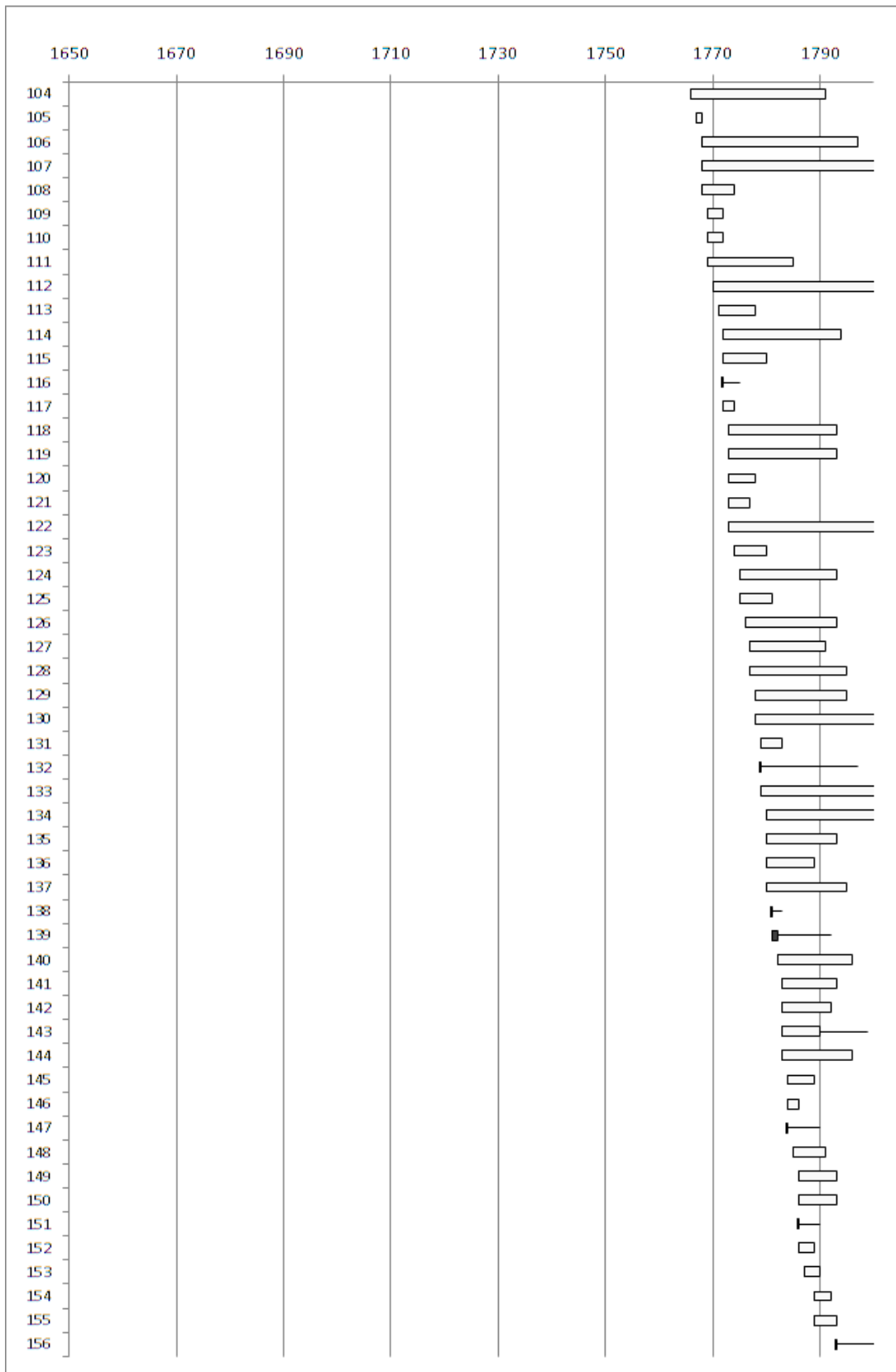


Figure 1-6(c) 各アカデミーの開始・終了年

Table 1-1 アカデミーの名称と活動開始年・活動終了年

番号	アカデミー名	開始年	終了年
1	Accademia degli Investiganti	1650	1668
2	Oxford Philosophical Society	1651	1690
3	Sacri Romani Imperii Academia Caesareo-Leopoldina-Carolina Naturae Curiosorum	1652	1677
4	Accademia del Cimento	1657	1667
5	Royal Society of London for the Promotion of Natural Knowledge	1662	present
6	Accademia della Traccia	1665	1667
7	Académie royale des sciences	1666	1793
8	Académie de Physique	1666	1675
9	Collegium Curiosum sive Experimentale	1672	1695
10	Accademia Boreliana	1673	1720?
11	Accademia Corvara	1673	1678?
12	(名称不明)	1677	20th century
13	Accademia di Fisico-mathematica	1677	1698
14	Accademia Ducale dei Dissonanti di Modena	1680	1752
15	Accademia Geografico-storia-fisica	1680	1714
16	Académie royale de Nîmes	1682	1700
17	Boston Philosophical Society	1683	1688
18	Dublin Philosophical Society	1683	1687
19	Académie royale d'Angers	1685	1793
20	Accademia Virgiliana	1686	1752
21	Temple Coffee House Botany Club	1689	1720
22	Accademia degli Inquieti	1690	1710s
23	Societas Regia Scientiarum	1700	1744
24	(名称不明)	1700	1724
25	Académie des arts et belles-lettres	1705	1793
26	Philosophical Society	1705	1710?
27	Société royale des sciences	1706	1793
28	Accademia degli Irrequiti	1709	1719
29	Collegium Curiosorum	1710	1728
30	Philosophical Society	1710	1758
31	Académie royale des sciences et belles-lettres	1712	1793
32	Accademia delle Scienze dell'Istituto	1714	1804
33	Botanical Society	1721	1726
34	Société des sciences et belles-lettres	1723	1766
35	Société royale des sciences, arts et belles-letters	1724	1752
36	Accademia Scientiarum Imperialis Petropolitana(Académie Impériale des	1724	1917

	Sciences de Saint Pétersbourg)		
37	Académie royale des sciences et beaux-arts	1718/1725	1793
38	Académie des sciences, arts et belles-lettres	1725	1740
39	(名称不明)	1725	1741
40	Académie des belles-lettres, sciences et arts	1726	1793
41	Accademia Peloritana dei Pericolanti	1728	19th c
42	Société des sciences	1729	1746
43	Society of Physicians	1730	1750s?
44	Literary and Philosophical Society	1730	1809
45	Society for the Improvement of Medical knowledge	1731	1737
46	Académie royale des belles-lettres	1732	1793
47	(名称不明)	1736	1744
48	(名称不明)	1737	1745
50	Accademia Botanica	1739	1783
51	Kunzl. Vetenskapsakademie	1739	present
52	Physico-Historical Society	1739	1778
53	Académie des sciences, arts et belles-lettres	1740	1793
54	Accademia dei Planomaci	1740	1772
55	Académie des belles-lettres	1741	1793
56	Det Kongelige Danske Videnskabsberens Selskab	1742	present
57	Nouvelle Société littéraire	1742	1747
58	American Philosophical Society	1743	1747
59	Naturforschende Gesellschaft	1743	1790's
60	(名称不明)	1744	1756
61	Académie royale des sciences, belles-lettres et arts	1744	1793
62	Académie royale des sciences, inscriptions et belles-lettres	1746	1793
63	Accademia degli Ipcandriaci	1746	1784
64	Naturforschende Gesellschaft	1746	present
65	Societas Eruditorum Incognitorum	1747	1751
66	Cosmographical Society	1747	1760s?
67	Société littéraire	1748	1752
49	(名称不明)	1737	1745
68	Académie des science, belles-lettres et arts	1750	1793
69	(名称不明)	1750	1753
70	Société des sciences et belles-lettres	1750	1793
71	Académie des sciences, belles-lettres et arts	1752	1793
72	Académie royale de Marine	1752	1793
73	Hollandsche Maatschappij der Wetenschappen	1752	1804

74	Académie royale des sciences et belles-lettres	1752	1758
75	Accademia Virgiliana	1752	1767
76	Imperiale Regia Accademia degli Agiati	1752	20th century
77	(名称不明)	1752	1817
78	Accademia Palermitana (del Buon Gusto)	1752	present
79	Société littéraire	1753	1775
80	(名称不明)	1753	1767
81	Akademie gemeinütziger Wissenschaften	1754	19th c.
82	Société d'émulation	1755	1757
83	Société Académique	1755	1773
84	Accademia dei Pescatori Cratilidi	1756	1784
85	Société royale des sciences et arts	1757	1793
86	Societas Privata Taurinensis	1757	1759
87	Académie royale des sciences, belles-lettres et arts	1758	1793
88	American Society for Promoting and Propagating Useful Knowledge	1758	1768
89	Cosmographiska sällskapet	1758	1824
90	Société littéraire	1759	1780
91	Churbayerische Akademie der Wissenschaften	1759	19th century
92	Société royale des sciences	1759	1783
93	Det Trondhjemske Selskab	1760	1766
94	Gesellschaft der Freunde der Wissenschaften	1761	1763?
95	Academia Electoralis Scientiarum et Elegantiorum Literarum Theodoropalatina	1763	1795
96	Accademia Enciclopedica	1763	1793?
97	Académie des sciences, belles-lettres	1766	1793
98	"Lunar Society of Birmingham"	1766	1791
99	American Philosophical Society	1767	1768
100	Reale accademia di Scienze, Lettere ed Arti	1768	1797
101	American Philosophical Society, Held at Philadelphia, for Promoting Useful Knowledge	1768	present
102	Accademia degli Aletofili	1768	1774
103	Académie des science, arts et belles-lettres	1769	1772
104	Société littéraire	1769	1772
105	Privatgesellschaft in Böhmen	1769	1785
106	Real Academia de Ciencias Naturales y Artes	1770	present
107	(名称不明)	1771	1778
108	Académie royale et impériale des sciences et belles-lettres	1772	1794
109	(名称不明)	1772	1780
110	Academia Scientifica (Cientifica) do Rio de	1772	1775?

	Janeiro		
111	Virginian Society for the Promotion of Useful Knowledge	1772	1774
112	Académie royale des belles-lettres	1773	1793
113	(名称不明)	1773	1793
114	Kunigl. Vetenskaps-och Vitterhets Sämnhallet	1773	1778
115	Konstgenootschap	1773	1777
116	Gesellschaft Naturforschender Freunde	1773	present
117	(名称不明)	1774	1780
118	Académie des sciences, arts et belles-lettres	1775	1793
119	Société patriotique de Hesse-Homburg pour l'encouragement des connaissances et des moeurs	1775	1781
120	Société des sciences, arts et belles lettres	1776	1793
121	Privinciaal Utrechtsh genootschap van Kunsten en Wetenschappen	1777	1791, 1800...
122	Accademia dei Concordi	1777	1795
123	Bataviaasch Gnootschap van Kunsten en Wetenschappen	1778	1795
124	Kunigl. Fysiografiska Sällskapet	1778	present
125	(名称不明)	1779	1783
126	Accademia di Scienze, lettere ed Arti	1779	1797?
127	Oberlausitzischen Gesellschaft der Wissenschaften	1779	20th century
128	American Academy of Arts and Sciences	1780	present
129	Société royale des sciences, arts et belles-lettres	1780	1793
130	Société littéraire	1780	1789
131	Societas Meteorologicae Palatinae	1780	1795
132	Trenton Society for Improvement in Useful Knowledge	1781	1783?
133	Accademia Filopatria	1782	1792?
134	Società Itqliana delle Scienze	1782	1796
135	Académie des sciences, belles-lettres et arts	1783	1793
136	Académie royale des sciences	1783	1792
137	Société des sciences physiques	1783	1790's?
138	Accademia Rangoniana	1783	1796
139	Cercle des philadelphes	1784	1789
140	(名称不明)	1784	1786
141	New York Society for Promoting Useful Knowledge	1784	1790?
142	Böhmische Gesellschaft der Wissenschaften	1785	1791
143	(名称不明)	1786	1793
144	Société Académique et Patriotique	1786	1793
145	Connecticut Society of Arts and Sciences	1786	1790?

146	Académie des sciences et beaux-arts États-Unis de l'Amérique	1786	1789
147	Kentucky Society for Promoting Useful Knowledge	1787	1790?
148	Société royale des sciences et des arts du Cap Français	1789	1792
149	Académie Delphinale	1789	1793
150	Medizinische und Physikalische Gesellschaft	1793	1804?
151	(名称不明)	1660	?
152	Accademia Fisico-matematica	1667	?
153	Accademia del Cimento	1680	?
154	Accademia dell'Arcidiacono	1687	?
155	Reale Accademia delle scienze di Siena (detta de' Fisiocritici)	1690	?
156	Accademia Clelia de'Vigilanti	1700	?
157	Societatis Regiae Scientiarum	1728	?
158	Académie royale des sciences et belles-lettres de Prusse	1744	?
159	(名称不明)	1746	?
160	Königliche Societät der Wissenschaften	1752	?
161	(名称不明)	1759	?
162	Reale accademia dei Georgofili	1767	?
163	Det Kongelige Norske Videnskabers Selskab	1767	?
164	Fürstlich Jablonowskische Gesellschaft	1768	?
165	Zeeuwsch genootschap der Wetenschappen	1768	?
166	Bataafsch Genootschap der Proefonderwindelijke Wijsbegeerte	1769	?
167	(名称不明)	1778	?
168	Reale Accademia delle Scienze e Belle-Lettere	1778	?
169	Teylers Tweede Genootschap	1778	?
170	Gesellschaft der Naturforschenden Freunde	1779	?
171	(名称不明)	1781	?
172	Literary and Philosophical Society	1781	?
173	Accademia dei Naturalisti	1782	?
174	Philosophical Society of Edinburgh	1783	?
175	Academia real das ciências de Lisboa	1783	?
176	Literary and Philosophical Society	1783	?
177	Académie royale des sciences, arts et belles-lettres	1784	?
178	Royal Irish Academy	1785	?
179	Accademia Aretina	1787	?
180	Linnean Society	1788	?
181	Alexandrian Society for the Promotion of Useful Knowledge	1790	?

182	Königlich Böhmishe Gesellschaft der Wissenschaften	1791	?
183	Societs Physica	1793	?
184	Literary and Philosophical Society	1793	?
185	Accademia Galianiana	±1700	?
186	Physical Society	1760's(?)	?
187	Physikalische Gesellschaft	1790s	?

* James E. McClellan III, *Science Reorganized : Scientific Societies in the Eighteenth Century*, New York, Columbia University Press, 1985の巻末資料を元に作成。

資料2：メスレー懸賞に関する、エミリー・デュ・シャトレからモーペルティエへの手紙

私がアカデミーのために論文を書くほどの大胆さをもっていたというので貴方がとても驚かれたことと思います。私は匿名ということに守られて試してみたかったのです。といいますのも、私はそのことを決して知られたくなかったからです。私はシャトレ氏だけにこのことを打ち明けてました。あの人はとてもよく秘密を守ってくれ、パリで貴方たちにその事について何一つ言わなかったのです。私はヴォルテール氏には秘密のままでしたので、全然実験というものができませんでした。さもなければこの人には隠し切れなかったでしょう。私が応募を思いついたとき、すでに提出までに一月しかありませんでした。私は夜しかこの仕事ができず、その上この手の事柄には全然経験がありませんでした。私が自分の作品を始める前にほとんど終わっていたヴォルテール氏の論文は、私に色々なアイデアを思いつかせ、私もこの人と同じ道をたどってみたいと思ったのです。私は自分でも論文を送るかどうがわからないまま仕事にとりかかりました。そしてヴォルテール氏にはそのことを一言も言わなかったのです。なぜなら、この人の目の前で、この人が気に入らないかもしれない恐れのある企てをしていることがうしろめたかったからです。その上、私は自分の作品の中でこの人の考え方のほとんど総てに反対していました。雑誌が2人とも落選したことを告げた時にはじめてこの人に打ち明けたのです。この人は自分と私が共に落選を分かちあったことを名誉だと考えているみたいです。私たちの論文が賞を競いあう線までいった作品の内に数えられたことを知って以来、そして貴方がたしかに私のお読みになったに違いないと思うと、私は勇気づけられるのです。

*Lettre 129. in *Lettres de la marquise du Châtelet*, introduction et notes de Théodore Besterman, Genève, Portrait, 2 vols., 1958.

資料3：マリー・ダルコンヴィルの主要業績

Œuvres morales

Avis d'un père à sa fille (Lord Halifax), 1756, T
Pensées et réflexions sur divers sujets, 1760 (2e édition, 1766), O
De l'amitié, 1761, O
Des passions, 1764, O

Romans et théâtre (y compris contes moraux)

Mélanges de littérature anglaise, 1761, T
Romans traduits de l'anglais, 1761, T
L'amour éprouvé par la mort ou chronique de deux amants de vieille roche, 1763, O
Mémoires de Mlle de Valcourt, 1767, O
Mélanges de poésie anglaise, 1770, T
Histoire d'Amynthor et Thérèse, 1771, T
Samiens, 1781, T
Amurat, inédit (dans les *Pensées* de 1801-1805), O
Lettres d'un chinois, inédit (dans les *Pensées* de 1801-1805), O

Sciences et médecine

Traité d'Ostéologie, 1759, T
Leçons de chimie (Shaw), 1759, T
* *Les secrets et les fraudes de la chymie et de la pharmacie moderne dévoilés* (1759). T
Essai pour servir à l'histoire de la putréfaction, 1766, O

Histoire

Vie du Cardinal d'Ossat, 1771, O
Vie de Marie de Médicis, 1774, O
Histoire de Saint Kilda, 1782, T
Histoire de François II, 1783, O
Suite à l'Abrégé de l'Histoire d'Angleterre de Bevil Higgons, inachevé et perdu

Œuvres « complètes »

Mélanges de littérature, de morale et de physique, 1775

Manuscrits

Pensées, réflexions et anecdotes, manuscrits inédits (1801-1805)

Signification des sigles : T= traduction; O= original ; *= attribution douteuse

*このリストは当該研究費で招聘したTiggelen氏が作成したもの。氏の許可を得てここに掲載する。

資料4：マリー・ラヴワジエによる『化学論集』の序文

1792年に、ラヴワジエ氏はこの20年間にアカデミーで読み上げた全ての論文をまとめた選集を出す計画を抱いていた。それはなにがしかの方法で近代化学の歴史を作ることである。

彼はこの歴史をより深く完全なものとするために、自分の体系を受入れてその主張を裏付けるために実験をした他の人々の論文もその中に挿入するつもりであった。

この選集はおよそ8巻からなるはずであった。ヨーロッパは何故彼がこれを果たせなかったかを知っている。

われわれは第1巻のほとんど全てと、第2巻の完全な原稿、そして第4巻のいくつかの部分を見つけた。

幾人かの学識者たちがこれに日の目をみさせるべきだと望んだ。一われわれはこのことに関して長い間逡巡した。一というのも、あれほどに大きな名声を、しかもその名声にふさわしい資格で享受していた人物が未完のままで残した原稿を出版するということが、いくばくかの不安を感じないわけにはいかなかったからである。愛おしく、尊敬すべき人を失ったときに、友情が厳しさを帯び、その人の栄光に加わるものだけを世に出すべきである。

もし、残されたこれらの原稿の中に、彼のおこなったことに基づいて、彼に属するものとしての新化学理論を表明しているラヴワジエ氏の論文（第2巻の78頁）がなかったら、われわれはだらだらと作業を長引かせ、それらの原稿は世に出なかったであろう。

つまり、この〔新化学は彼のものであるという〕真実について、学識者たちの見解を一致させるということが、彼に対するわれわれの義務なのである。

この論集のそのほかの部分にまぎれているであろうさまざまな間違いについては、われわれは識者の許しを請いたい。

作者の最後の日々に大部分の証明が再検討されていたと知る時、学識者たちは彼に同意するであろう。そして、あらかじめ注意深く、自分の暗殺計画がすすめられていることに無知ではなかったにもかかわらず、ラヴワジエ氏は、冷静に勇気をもって、科学に役立つと信じた仕事に従事し、最も恐るべき不安のただ中であって、啓蒙と美德が保ちえる平静さの偉大なる手本を示したのである。

*Marie-Anne Lavoisier, “Préface” in Antoine-Laurent Lavoisier, *Mémoires de chimie*, 2 toms., Paris, Chez Du Pont, 1805, tom.1, s.p.

資料5：アントワーン・ラヴワジエと地方および外国の科学アカデミーの関係

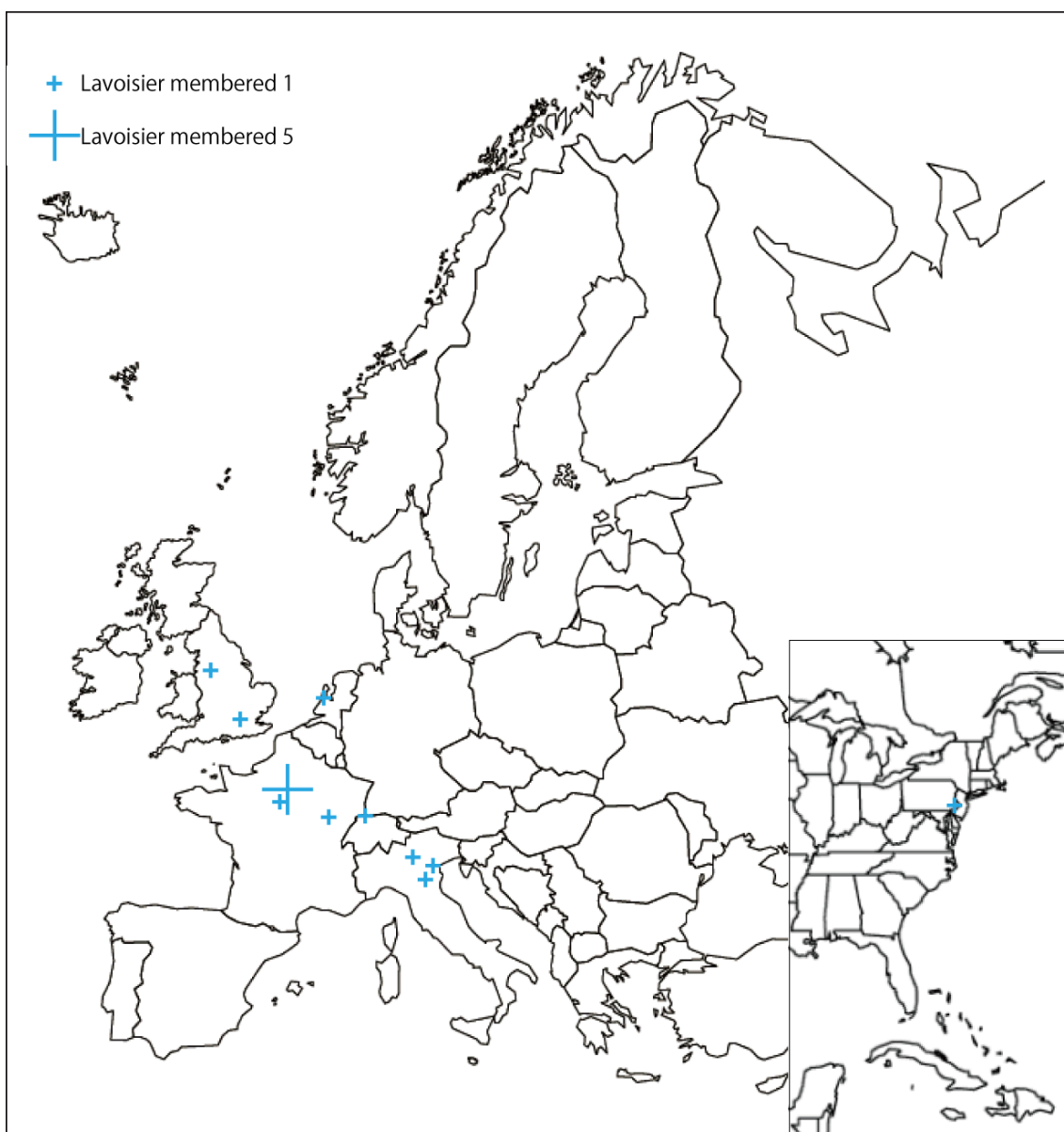


Figure 5-1 アントワーン・ラヴワジエがメンバーとなったアカデミーの所在地

Table 5-1 アントワーン・ラヴワジエがメンバーとなったアカデミーの一覧

Academy or Society	City
Académie royale des sciences	Paris
Royal Society	London
Académie des sciences, arts et belles-lettres	Dijon
'Société Helv étique'(Societas physico-mathematico-anatomico-botanico-medica Helvetica)	Basel
American Philosophical Society, Held at Philadelphia, for Promoting Useful Knowledge	Philadelphia
Hollandse Maatschappij der Weetenschappen	Harlem
Accademia delle Scienze dell'Istituto di Bologna	Bologna
Société royale de médecine	Paris
Société libre d'émulation	Paris
Literary and Philosophical Society	Manchester
Société d'agriculture (1761), then Société royale d'agriculture	Paris
Musée de Monsieur (1781), then Lycée	Paris
Società italiana delle scienze	
Société royale d'agriculture de la généralité d'Orléans	Orléans
Accademia di Scienze, Lettere ed Arti di Padova	Padua
Société de la Description des arts et métiers	Paris
Société des Annales de chimie	Paris
Bataafs Genootschap der Proefondervindelyke Wysbegeerte	Rotterdam
Société d'histoire naturelle	Paris
Société du Lycée des arts	Paris
Société philomathique	Paris

* Patrice Bret, "Power, Sociability and Dissemination of Sciences. Lavoisier and the Larned Society," in Marco Beretta, ed., *Lavoisier in Perspective*, Munich, Deutsches Museum, 2005: 129-152 より作成。

資料6：マリー・キュリーが会員になった科学アカデミー

Table 6-1 マリー・キュリーが会員になったアカデミーの一覧

年	名称
1904	モスコウ帝室人類学士俗学同好会名誉会員
1904	イギリス王立科学普及会名誉会員
1904	ロンドン化学協会在外会員
1904	バタヴィア哲学協会通信会員
1904	メキシコ物理学協会名誉会員
1904	メキシコ科学学士院名誉会員
1904	ワルソー工業商業奨励会名誉会員
1906	アルゼンチン科学協会通信会員
1907	オランダ自然科学協会在外会員
1908	セント・ペテルスブルグ帝室科学学士院通信会員
1908	ブラウンシュヴァイク自然科学協会名誉会員
1909	ボローニャ科学学士院通信会員
1909	チェコ科学文学美術学士院在外特別会員
1909	フィラデルフィア薬学専門学校名誉会員
1909	クラコウ理科学士院普通会员
1910	チリ科学協会通信会員
1910	アメリカ哲学協会会員
1910	スウェーデン王立科学学士院在外会員
1910	アメリカ化学協会会員
1910	ロンドン物理学会名誉会員
1911	ロンドン物理研究会名誉会員
1911	ポルトガル科学学士院在外通信会員
1912	ベルギー化学協会名誉会員
1912	セント・ペテルスブルグ帝室実験医学学会賛助会員
1912	ワルソー科学協会普通会员
1912	レンベルク大学哲学名誉会員
1912	ワルソー写真協会会員
1912	ヴィルナ科学同好会名誉会員
1913	アムステルダム王立科学学士院特別会員（数学物理科）
1913	エディンバラ科学美術協会名誉会員
1914	モスコウ大学物理医学会名誉会員
1914	ケンブリッジ哲学学会名誉会員
1914	モスコウ科学学会名誉会員
1914	ロンドン衛生学会名誉会員
1914	フィラデルフィア自然科学学士院通信会員
1918	スペイン王立医学電気学放射学協会名誉会員
1919	スペイン医学電気学放射学協会名誉会長
1919	マドリッド・ラジウム研究所名誉所長
1919	ポーランド化学協会会員
1920	デンマーク王立科学文学学士院普通会员

1921	バッファロー自然科学協会名誉会員
1921	ニューヨーク鉱物学クラブ名誉会員
1921	北アメリカ放射学協会名誉会員
1921	アメリカ自然科学博物館名誉会員
1921	ニュー＝ジャージー化学協会名誉会員
1921	工業化学協会名誉会員
1921	クリスチャニア学士院会員
1921	ノックス芸術科学学士院名誉終身会員
1921	アメリカ・ラジウム協会名誉会員
1921	ノルウェー医療ラジウム研究所名誉会員
1922	パリ医療学士院自由賛助会員
1922	ベルギー・ロシア学術団体名誉団員
1923	ルーマニア医学水治学気候学協会名誉会員
1923	チェコスロヴァキア数学者物理学者連盟名誉会員、プラーグ
1924	ワルソー・ポーランド化学協会名誉会員
1924	アテナ心霊研究協会名誉会員
1925	ルブリン医学協会名誉会員（ポーランド）
1926	ローマ《ポンティフィチア・ティベリナ》普通会员
1926	サン・パウロ化学協会名誉会員（ブラジル）
1926	ブラジル科学学士院通信会員
1926	ブラジル・サン・パウロ薬学化学協会名誉会員
1927	モスコウ科学学士院名誉会員
1927	ボヘミア文学科学協会在外会員
1927	ソビエト科学学士院名誉会員
1927	北アメリカ・州連合・医学研究科生協会名誉会員
1927	ニュージーランド学会名誉会員
1929	ポスナン科学同好会名誉会員（ポーランド）
1929	ニューヨーク医学学士院名誉会員
1929	アメリカ・ポーランド人医学歯科学協会名誉会員
1930	フランス発明家学者協会名誉会員
1931	ジュネーヴ世界平和連盟名誉会員
1931	アメリカ放射学専門学校名誉会員
1931	マドリッド物理学自然科学学士院在外通信会員
1932	帝室ハルレ・ドイツ自然科学学士院会員
1932	ワルソー医学学会名誉会員
1932	チェコ・スロヴァキア化学学会名誉会員
1933	イギリス放射学レントゲン協会名誉会員、ロンドン

December 1st,1904.	Honorary Member of the Société Impériale des Amis des Sciences Naturelle d'Anthropologie et d'Ethnographie
May 9th,1904.	Honorary Member of the Royal Institution of Great Britain
May 18th,1904.	Foreign Member of the Chemical Society of London
September 15th,1904.	Corresponding Member of the Batavian Philosophical Society
1904	Honorary Member of the Mexican Society of Physics
May 4th,1904.	Honorary Member of the Mexican Academy of Sciences
1904	Honorary Member of the Warsaw Society for the Encouragement of Industry and Commerce
November 6th,1906.	Corresponding Member of the Argentine Society of Sciences
May 25th,1907.	Foreign Member of the Dutch Society of sciences
January 29th,1908.	Corresponding Member of the Imperial Academy of Sciences,St.Petersburg
March 10th,1908.	Honorary Member of the Society of Natural Sciences,Brunswick
March 31st,1909.	Corresponding Member of the Academy of sciences,Bologne
1909	Associate Foreign Member of the Czechish Academy of sciences,Arts and Letters
September 27th,1909.	Honorary Member of the Philadelphia College of Pharmacy
1909	Active Foreign Member of the Academy of Sciences,Cracow
December 19th,1910.	Corresponding Member of the Scientific Society of Chili
April 23rd,1910.	Member of the American Philosophical Society
1910	Foreign Member of the Swedish Royal Academy of Sciences
March 1st,1910.	Honorary Member of the American Chemical Society
1910	Honorary Member of the London Society of Physics
February 1st,1911.	Honorary Member of the Society for Psychical Research of London
April 19th,1911.	Foreign Corresponding Member of the Portuguese Academy of Sciences

April 16th,1912.	Honorary Member of the Belgian Chemical Society
April 12th,1912.	Collaborating Member of the Imperial Institution of Experimental Medicine,St.Petersburg
1912	Member of the Scientific of Warsaw
1912	Honorary Member in Philosophy of the University of Lemberg
1912	Member of the Warsaw Photographic Society
1912	Honorary Member of the Vilna Society of the Friends of Sciences,July 20 th
May 21th,1913.	Extraordinary Member of the Royal Academy of Sciences(Mathematics and Physics Section),Amsterdam
January 15th,1913.	Honorary Member of the Association of Arts and Sciences of Edinburgh
March,1914.	Honorary Member of the Physico-Medical Society of the University of Moscow
May 30th, 1914.	Honorary Member of the Philosophical Society of Cambridge
March,1914.	Honorary Member of the Institution of Moscow
April 15th,1914.	Honorary Member of the Institution of Hygiene,London
April 22nd,1914.	Corresponding Member of the Philadelphia Academy of Medical Sciences
April 25th,1919.	Honorary Member of the Royal Spanish Society of Medical Electrology and Radiology
April 25th,1919.	Honorary President of the Royal Spanish Society of Medical Electrology and Radiology
July 5th,1919.	Honorary Director of the Radium Institute of Madrid
1919	Member of the Polish Chemical Society
1920	Ordinary Member of the Danish Royal Academy of Sciences and Letters
June 16th,1921.	Honorary Member of the Buffalo Society of Natural Sciences
April 20th,1921.	Honorary Member of the Mineralogical Club of NEW York
1921	Honorary Member of the North American Radiological Society
April 20th,1921.	Honorary Member of the American Museum of Natural History

May 16th,1921.	Honorary Member of the New Jersey Chemical Society
July 13th,1921.	Honorary Member of the Industrial Chemistry Society
March 18th,1921.	Member of the Christiania Academy
June 18th,1921.	Honorary Life Member of the Knox Academy of Arts and Sciences
July 29th,1921.	Honorary Member of the American Radium Society
October 15th,1921.	Honorary Member of the Norwegian Society for Medical Radiology
February 7th,1922.	Associate Member, Académie de Médecine, Paris
January 22nd,1922.	Membre Honoraire du Groupe Académique Russe de Belgique
January 10th,1923.	Honorary Member of the Rumania Society of Medical Hydrology and Climatology
January 20th,1923.	Honorary Member of the Czechoslovakian Union of Mathematicians and Physicists
1924	Honorary Member of the Polosh Chemical Society of Warsaw
December 15th,1924.	Honorary Member of the Society of Psychic Research of Athens
July 4th,1925.	Honorary Member of the Medical Society of Lublin, Poland
March 31st,1926.	Member of the "Pontificia Tiberina" of Rome
August 24th,1926.	Honorary Member of the Chemical Society of São Paulo Brazil
August 24th,1926.	Corresponding Member of the Brazilian Academy of Sciences
July 23rd,1926.	Honorary Member of the Brazilian Association of Pharmacists
January 4th,1927.	Honorary Member of the Academy of Sciences of Moscow
January 12th,1927.	Foreign Member of the Bohemian Society of Letters and Sciences
February 2nd,1927.	Honorary member of the Academy of Sciences of U.S.S.R.
1927	Honorary Member of the Interstate Postgraduate Medical Association of North America
February 8th,1927.	Honorary Member of New Zealand Institute

March 6th,1929.	Honorary Member of the Society of the Friends and Sciences of Poznan,Poland
January 7th,1930.	Honorary Member of the New York Academy of Medicine
October,1929.	Honorary Member of the Polish Medical and Dental Association of America
March 5th,1930.	Honorary Member of the Société Française des Inventeurs et Savants
1931.	Honorary Member of the World League for Peace Geneva,
April 16th,1931.	Honorary Member of the American College of Radiology
April 25th,1931.	Foreign Corresponding Member of the Madrid Academy of Exact Natural Physical Sciences
March 18th,1932.	Member of the Imperial German Academy of Natural Sciences,Halle
June 28th,1932.	Honorary Member of the Society of Medicine of Warsaw
September 24th,1932.	Honorary Member of the Czechoslovakian Chemistry Society
1933.	Honorary Member of the British Institute of Radiology and Röntgen Society London,

*Eve Curie, Madame Curie, Paris, Gallimard, 1938 (『キュリー夫人伝』河野万里子訳、白水社、2006) の巻末資料を元に作成。

<English Summary>

Women and Academies of Sciences in the Age of Enlightenment

When we think about the issue “Women and Academies of Sciences” in the Age of Enlightenment, there exists two key perspectives. There is both direct and indirect involvement of women in Academies. Especially, the latter is important; hence the lack of this perspective just results in the repetition of the conventional “Absence of women in historic description theory”. Because, there was only a handful of women officially involved in the Academies of Sciences in that era.

The Academies of Sciences in that era, of which Paris Royal Academy of Sciences and Royal Society of London were two representative models, basically inherited the spirit of the above mentioned two organizations, which is the spirit of “misogyny”. In other words, they kept a stance that does not accept women as their regular members. Though this stipulation was seldom clearly written in their codes, it gave them all the more reason to conduct this “elimination of women” skillfully and thoroughly. Italian cities were an exception. Especially, the Academy of Bologna accepted women, not only their very own excellent scholars of natural science which included Laura Bassi and Maria Agnesi but also foreign women such as Émilie du Châtelet. Having them as its members; it showed a clear difference on this point from Academies in other countries.

Another exception was Russia, under Empress Catherine the Great. At the Russian Academy of Sciences, Yekaterina Dashcova, a henchwoman of the Empress, took command of the organization as the Director of the Academy. However, the role of Dashcova was not that of a scientific researcher, but a business executive. This woman Director successfully reconstructed the financial situation of the Academy of Sciences and was greatly acclaimed by other countries. She was made very welcome by the Republic of Letters, a network of intellectual figures at that time, and was selected as an honorary member of several Academy of Sciences, including one in the United States. Dashcova was a woman who had the largest number of membership titles of Academy of Sciences in that era.

However, behind such few exceptional women, many women scientific researchers existed. The Academies did not accept them into their bosom or their membership, but highly welcomed them as audiences or assistants of science. They, not only supported members of the Academies as social ladies but also helped the male researches by utilizing their high level of skill as amateur scientists; in response to requests from male members, they took detailed observation records of astral body and/or weather, and marshaled experimental data. However, were these women fully satisfied with such

duties? In most cases, there is no evidence from them left. And many previous studies about this era, have taken this “no evidence from them left” as “evidence”, and have applauded their activities to help the Academy of Sciences as so called "beautiful supports of the Academy's faithful helpmates."

Yet, some women among them left notes to express their own feelings. Or they tried to write down their feelings. And, actually, it is a work piece called “translation” that does display such intention. We should consider “Science translation works by women” in the Age of Enlightenment separately from those works done by men. Because, different from men that could openly publish their own scientific work, women had significant hurdles to overcome to enable them to introduce their own scientific work, due to the gender norm of that time. In Europe during that era, except for a few exceptions like Laura Bassi and Émilie du Châtelet, there were few women who could publish science books or theses which would then get readership. However, the readership of the translations of books written by great scientists would be there even though the works were translated by unknown women.

Therefore, such women who definitely could be members of their local Academy of Science if they were male took chances. They translated famous scientific works through their fellowship with male members, and expressed their own scientific theories and scientific philosophies by putting notes from a translator as well as preface and/or afterword by a translator in the translated book. And there were women translators who pointed out errors in the author's experiment data based on their own experiments and observations, thus there were even such works that were half translation and half counterargument. This is the act of “riding on the shoulder of a giant,” yet such behavior was one of a few opportunities where self-assertiveness in the scientific field by women could make the borderline of the gender norm.

Because of the above, when we think about the issue of “Women and Academies of Sciences in the Age of Enlightenment” it is important to pay special attention to the peripheral problem. Also, when we deal with exceptions such as Dashcova, we should not forget that several Academies of Sciences welcomed Dashcova, but, at the same time, these Academies had given the cold shoulder to women of excellence in their own countries. Therefore, the key to a proper interpretation of the timeless issue of gender and science may still lie in the modern age.